
Project.D

*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r o j e c t . D

【Nコード】

N 6 9 5 9 0

【作者名】

*

【あらすじ】

自分が何者かも分からない…記憶が無く
気がついたらカプセルの中で培養液に浸されていた…

自分の居た研究所を探索して見つけたのは…自分が化け物だという
事実

特にショックは無かったけどな

常にマイペースを貫く主人公の描くりリカルな世界

基本は原作をに沿っていきますが、オリジナルも入ったり

リリカルなのはにプレスオブファアの設定を少し組み込んでみました！

よかったです読んで下さい。

注：作者に文才を期待したら裏切ってしまいます。

主人公設定

考えついたら追加します

名前：リユウ

年齢：トリップ前 50〜60ぐらいかな
トリップ後 12ぐらい？

見た目

それなりに整った顔、イケメンっつーか…なんっつーか。近寄り難くはない

若干目つきが悪い。

髪の色：黒

魔力光：黒（中二風に言うと漆黑）

魔力：普段時 F

D・ダイブ時 測定不能

性格

基本テキトー

やるときはやる…かなあ…

生前の記憶が無く、自分の名前さえも思い出せない（テンプレ乙）
目が覚めたら培養液の中だった。強力な龍の遺伝子を組み込まれ、
半人半龍状態。（詳しくは本編で）本編でも言ってるが魔力放出量
が極端に少ないので遠距離戦とか無理。接近戦やベエ。（具体的に
は魔力を通した素手でバリアブレイク）

使用デバイス

インテリジェント：ドラグーン
実験室で見つけたデバイス。

ストレージ：デュランダル

形状：剣（どちらかといえば大剣）
最初に見つけたデバイス。多分リュウ以外には使えないくらい重い、
基本対人戦の為使用されていない

ストレージ：ルファル

形状：爪

牽制やスピード型の敵、多対1の戦闘時に使用。今の所一番使われている

内蔵術式：クリムゾンノート

両腕を炎に変換した魔力で纏い、相手を殴る。生半可な障壁はあっさり打ち砕く上に直撃した部分を爆破するため、大抵の障壁は破壊する

ストレージ：ボレアス

形状：ハルバート

多対1の戦闘の時、守りが堅い敵や大型の武器を使ってくる時に使用

内蔵術式：テンペスト

ボレアスから雷に変換した魔力を放出、それをボレアスに纏ったり相手に放つ。広範囲に撃てる凡庸性の高い魔法

ストレージ：？

形状：？

レアスキル：D・ダイブ

龍の遺伝子を活性化させ、龍人になることが可能

D・ダイブ

髪が白くなり、背中にバーニアのようなものができ、両腕、両足が龍のような形状に、体から常に赤色の魔力を放っている。攻撃力、防御力、速さの全てにおいて普段のリュウを上回る。

魔力球作成

リュウが魔力を溜めておけないか考えた末に作成した物。

緻密な魔力コントロールと集中力を必要とされるので普通は無理。口に含んで使用する。どす黒い為、初めての人は躊躇うだろう。

魔力変換

炎、雷、氷と一通り扱う事が出来る。

おそらく研究者が攻撃のバリエーションの少なさをどうにかしようとして追加した能力と思われる

こんなもんで

始動：？（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは。

＊でございます。

更新は遅くなると思いますがお願いします。

始動…？

やあ、みんな。

初めまして、そしてこんにちわ

元気かい？俺は只今実験体にされているよ？

……サラツと言ったけど何？この状況。

俺の現状は…変なカプセルに入れられて…こう、何て言うんだろ？
チューブみたいな…配線みたいなのが体のあちこちに取り付けられております。

そしてパンツ一丁。

服をくれ…

しかしここは何処なんだ？

どうやら研究所のようだが…外の話し声が少し聞こえてくるな…

「……の…験…成…だ…！」

「よ…！やつ…こ…上層…の…ら…見る！」

「早速……を…起動……う。」

えーっと？

つまり、コイツ等は何かの実験でもしてたのか？

そしてそれが成功したと？ハイハイよかったね。いいからさっさと
出せや。実験成功したんだろ？俺なんか用済みだろ？

「さ……、今日……で……と…か」

え？ちょ、ま、まった！

こっから出せやあ！

おい！ちょ、マジで！カムバツアアク！

始動…？（後書き）

ちよつと短めかな…

次回で主人公がカプセルから出ます

えーっと？簡単に言えば生物兵器？

最後に研究員を見たのが1、2週間前：

誰かー！誰か居ませんかー！

って言っても声が出とらんがな…

ずっとカプセル中に放置されてたら段々感覚が戻ってきたな…
腕ぐらいなら動かせるか。

部屋の外は管理局に襲撃を受けて壊滅。この部屋は隔離とカモフラージュ、更に魔力反応がしない（調整だけで魔力が必要なかった）から見つからなかった。

（更に1週間）

もう待ってられん！

自力でぶち破る！

「オラアアア！」

研究室の奥に置かれていたカプセル内から、カプセルをぶち破って

何かが飛び出して来た

「やっと出られた……」

その何かは体に付着しているやたら粘っこい液体を落とした後

「体は…普通に動くな…ここは…研究施設だよなあ。ん？」

辺りを見回し始めた

そして机の上に視線を移すと

「この書類は…」

『Project・D』

「プロジェクト？」

何のこっちゃ……」

何かの実験の概要が書かれた書類を発見、読んでみることに

『管理外世界で発見された龍の遺伝子を人に組み込む計画。』

龍の名称：アジーン

次元航海をしていると管理外世界に強大な魔力反応を測定。実際に
見に行くと、肉体は殆ど朽ちているのに細胞内で魔力反応があった。
この事を上層部に報告。そうしたら細胞を人に組み込み新たな生物
兵器を造るそうだ。いくら管理局だと言っても流石に限度があると
思うのだが…実験を行わなければ私もどうなるか分からんな…裏を
知ったからには消されるか、実験体行きだな。』

「計画の概要と結果しか無いな…後は研究員の意見つつーか…考えみたいな。」

眩きながらもめくって二枚目を読み始める

『結果

結果だけを言えば組み込むのは成功した。

だが、保有魔力は多いのだが一度に放出出来る量が少ないので、使える魔法は

身体強化、防御、バインド（かなり短時間、一瞬気を逸らす程度にしか使えない）、近距離転移
ぐらいだ。

だが、身体能力はかなり高くなっているため接近戦に持ち込めばおそらく負けは無い。』

「魔法？んなもん俺は使えんぞ？
続きは…」

『実験体名称：リユウ

安直だが龍の遺伝子を組む込んでいるのだからこの名前に決定
ドラゴナイズドフォームについて。』

「ドラゴナイズドフォーム？」

『ドラゴナイズドフォームとは、全身に移植してあるアジーンの細胞を体内の魔力で刺激し、活性化させる事により龍人のような形態に変化する事である。実験段階では細胞に侵食され人としての自我を失ってしまっていたが、改良する事により侵食を抑えることに成

功した。

但し使用後は身体中に疲労と虚脱感が伴い、魔力が殆ど枯渇する。」

「状況的に俺が実験体だよなあ……」

『なお、デバイスはまだ力に慣れていないため特注のストレージデバイスを用意。耐久性を第一に考えた為AI（人工知能）を搭載不可能に。インテリジェントやアームドは魔力の扱いに慣れてからでないと、総合魔力量に耐えきれず長時間稼動は不可能。』

「デバイス？

コイツか？」

書類の隣に腕輪のような物がある。

「どうやって使うんだ？」

『デバイスには反抗や暴走時の為プロテクトをかけておく。』

「プロテクトって……めんどくせえなあ……魔力には慣れておくか？」

とりあえず瞑想みたいな感じか？と座禅を組む

しばらくして……

「コイツか？」

身体の奥から何かが湧き上がる感覚。

よく視てみると身体の表面を薄い膜のようなものが覆っている。

「結構自由に動かせるな…」

手、腕、足、と魔力を動かしていくリュウ

「1箇所を集める事も出来るな。」

「やっぱ俺が実験体かあ…」

追われる生活は敵陣でのゲリラ戦だけで充分だ。」

そう言いながら部屋の中を調べるリュウ

「扉っぽいけど開かん…」

鍵穴を探すが見つからない。

「ぶち破るしか無いか？」

力ずくで行くことを考えついたリュウ

「けどデバイスは使えんしな…」

「そうだ！ドラゴナイズドフォームってのを試してみつか。方法は…」

『ドラゴナイズドフォーム

発動方法

まだ詳しくは分からないが、今までの実験での共通点は全身に意図的に魔力を循環させる。』

「分かんねえのかよ…とりあえず共通点つてのを試してみつか…」

リュウの体から魔力が湧き上がり

「……………コイツか…？」

D・ダイブ！」

何かを本能的、いや、龍の部分が感じ取ったらしく、ドラゴナイズドフォームへの切欠を掴んだリュウ

唱えた瞬間、全身の魔力が赤く発光し足元に魔法陣が浮かび上がる。その赤い魔力がリュウの腕や足を覆っていき

「でええええやあああ！」

リュウが叫ぶと同時に魔力が弾けリュウの体に変化していた黒かった髪が白くなり、背中にはバーニアのような物が、身体からは常に赤色の魔力が湧き出て下半身や両腕は龍のように変化し龍人の姿に。

「コレが…ドラゴナイズドフォーム…武器が握れんな…」
気にするところはそこじゃないと思う

「オラア！」

勢いよく腕を振るい

ドガアアアアーン！！

ドアを簡単に破壊した。

「すごいなこの力…
そろそろ戻るか…」

戻り方は本能で分かる様子

「ふう、じゃあ行くか…って、アレ？身体が…だるい…」

ドサッ

どうやらドラゴナイズドフォームで力尽きた様子。
力に慣れるにはまだまだかかりそうだ。

えーっと？簡単に言えば生物兵器？（後書き）

全然進行しないな…

次の話かその次で管理局登場予定

では、また次回お会いしましょう！

脱出成功……したんかなあ……

リュウがD-ダイブを使用してから数時間後

「あー……だるい……」

身体に力が入らん……とりあえず外を目指すか

『ちょっと待って下さい』

「あん？声？」

ここには俺以外誰もいないはずだが……

「何処だ？」

『ここです。ここ。』

なんだありゃ？机の上の宝石が点滅してる

「……コレか？」

宝石をつまみ上げると

『どうも、リュウ』

いきなり宝石が喋り出した

俺の体といい、喋る宝石といい……何なんだこの場所は……？
オマケに俺の名前を知ってやがるときた

「俺の名前？何で知ってる。俺もさっき知ったばかりなのに」

『貴方のサポート役として制作された、インテリジェントデバイスです。貴方の事についてはデータがインプットされています。』

デバイス…確か魔法を使うための媒体みたいなもんだったか？

「インテリジェント？確か扱えない筈だが？」

『はい。今の段階では使えません。なので魔法の使い方や、ある程度の知識を教える為に作られました。』

知識ねえ…確かに今の俺は何にも知らねえからな

「ふーん……じゃあ聞きたいんだが、此処はどこだ？」

『此処は管理外世界にある違法研究所です。』

「思いつきり違法つつたな…何でこの部屋の外は壊滅状態なんだ？」

『わかりません。私も制作されてからこの部屋に放置されてましたから。可能性があるのは、この世界の原生生物による襲撃か、管理局の襲撃ですね。』

原生生物は分かるが…管理局？

こんな状態になるって事は相当強力な力を持った組織だな…生半可な力じゃすぐに叩き潰されるような

「放置って……」

「私はまだ試作段階ですので。サポートは出来ませんが、おそらく貴方の魔力にフレームが耐えきれないので扱う事はこの先不可能です。」

むう… やつと武器が手に入ると思ったんだが… また振り出し… じゃねえか

教師みたいなデバイスが見つかったんだし

「分かった。じゃあ管理局って？」

『正式名称は時空管理局。魔力を扱う技術が発展している世界を統括する存在です。魔力による犯罪を取り締まったり、ロストロギアと呼ばれる古代遺物の事件を解決します。』

「ロストロギアあ？ 分からん事が多すぎるな… 移動しながら教えてくれ。」

移動中

（研究所の外）

研究所から外に出るまでに大体の事は聞いたな
要するにロストロギアってのは世界を1つ潰しかねない力を持った
代物が多くて
管理局はそれが暴走して世界が崩壊しないよう色々な世界に行って
回ってんのか

「よし、大体分かった。次は魔法だが…」

『魔法は簡単です。貴方が使える魔法はかなり少ないので。』

「ほっとけ。で、使うには？」

『まず、私のマスターとして認識するために名前を付けて下さい。』

「名前……………」

いきなりだな…名前か…何かいい名前は…

〈数時間〉

「……………」

『……………』

「……………」

『…まだですか？』

「……………」

『……………』

「…じゃあ…もうドラグーンでいいや」

竜騎兵、いい名前じゃねえか、俺は竜で
コイツは俺に竜としての力の扱い方を教える

『竜騎兵…貴方は使われるのではなく使う方なのですが…』

「いいじゃん、力は持ってつけど扱い方分からのだから」

『はあ…では、

名称：ドラグーン

認識しました。』

よし、これで魔法が扱えるのか？

「んで、後は？」

『貴方が持っているストレージデバイスはまだ中に何も登録されてません、なので今から私と接続して魔法を移します。』

俺のデバイスは空っぽで、ドラグーンからデータを移す…

やっぱり最初はドラグーンを使うように設計されていたのか？

「接続ってどうやんだ？」

『そこらにある端末に私とデバイスを接続して貰えば後は私が』

「りょーかい」

よっしゃ、さっさとやって管理局に見つけてもらわねーとな

「そっぴゃこイツの名前知らねーんだが」

凄え今さらな気もするが、ストレージデバイスの名前を知らなかった
もしかしてまた名前を付けることになるのか？

『このデバイスの名称は…デュランダルですね。』

「デュランダルな、分かった」

どうやら名前は付けなくて済むみたいだな…

それにしてもデュランダルって…確か妖精が鍛えたとされる伝説の剣の名前じゃなかったか？

（10分後）

『終わりました』

「意外に早いな」

やっぱ使える魔法が少ないからか？

戦う事になったら手札は多いほうがいいからな…

放出出来る魔力がだんだん増えていくといいんだけどなあ…

『デバイスにプロテクトがかかっているのでどこかの施設でデバイスマスターに解析してもらい、解除してもらわなければなりません。』

「そうだったな…」

そついやプロテクトが掛けてあるってさっき書類にあったな…orz

『そういえばさっき端末に接続した時、様々なロストログアのデータを発見したのでコピーしておきました。』

「ロストログアのデータがあつて役に立つのか？」

確か殆どのものが危険物なんだろう？

もしそんなものに不用意に近づいて巻き込まれたらどうすんだよ

『このデータの中には管理局が入手していないデータもあると思われるので、管理局に売れば資金源になるかと』

「なる程、そういう手があつたか」

管理局に売りさばく…か、それがこれを提供するのを条件に戸籍と
かを用意してもらつのもいいな

『後、貴方に用意されたデバイスは複数あるようです』

「後何個あるのか？」

1つぐらいプロテクトがかかつて無いのがあればいいんだが…

『はい、おそらくこの部屋の中にあるかと』

「探してみつか……」

武器は無いよりあつた方がいいだろ

「それっぽいのが幾つかあつたぞ？指輪が2個と腕輪だ」

デュランダルも似たような形状だったからな…
多分これもそうだろ

『データによると、指輪が弓と爪、腕輪が槍ですね』

ビンゴ！一発で見つけられたか！

「遠距離と小回りにスピード型の接近戦か…一応魔法が使えなくても遠距離戦も出来るんだな」

それにしても全部使った事の無い種類なんだが…

『工夫次第では』

「まあ調べるのは後にして、外に出るか…」

ここは埃っぽいからな…さっさと出たい

『その前にこの部屋の救難信号を発信しておいた方がいいと思います』

「何でだ？」

『貴方の魔力放出量では次元転移など出来ないからです』

「……………辛え」

なんてしょぼいんだ…俺の魔力よ…

（研究所の外）

ガアアアア！

「うおつと！」

何なんだ！？この化け物共は！
研究所を出てから次々と襲いかかってきやがる！！

「こちとら素手なんじゃい！」

『しばらくは魔力で身体能力を強化して戦うしか無いですね』

「チイツ！」

ガアアアア！

「ラア！」

気持ち悪いんだよ！芋虫みたいな図体してる癖にかなり俊敏な動きをしやがる！

グギヤアアア！

「とどめ！」

拳に魔力を通して殴ってやったら怯んだから、そこを狙って更に魔力を叩き込んでやった

ギヤオオオオオ…

奴には魔力が堪えるのか？
弱々しい鳴き声を挙げて死んでいった

「ふう…」

『ご苦労様です、リュウ。』

「なあ、ドラグーン」

俺は目の前にある芋虫を見てドラグーンに問いかける

『何ですか？』

「コイツ…食べっかな？」

『おそらく食用ではありません…川か何かを探して魚や動物を捕らえた方が…』

「やっぱ？めんどくせえなあ…」

ゲテモノって食ったら上手いってのが定番なんだけどなあ…

く森く

「早く焼けねえかな」

『魔力変換があって助かりましたね』

どうやって火を起こそうか迷ってたらドラグーンが俺に魔力変換能力があるとか教えてくれて

何とか薪に火をつける事が出来た…魔力も結構便利だな…おい

「そろそろいいかな…」

両面に程よく焦げ目が付いてきたので火から外して齧りつく

「うん、結構いける。塩とか欲しくなるな」

何の魚か全く分からなかったが中々いけるな
皮が少し硬いが身は柔らかいしホクホクしてる

『あの研究所は破壊後などかそれ程ありませんでしたから管理局に
襲撃を受けたのだと思います。
食糧はその時に回収していったのででしょう。』

「管理局の実験体じゃなかったか？俺は」

あの書類に書いてあったよな？

『実験していたのは非公式の管理局員ですね、所謂裏の存在です。』

「で、襲撃したのが表の普通の局員か」

どんな組織にも裏つてのはあるんだな
犯罪とか犯してるけど強大な力を持つてるって奴か…

『おそらくは』

「じゃあ俺管理局に見つかったらヤバくね？」

再び実験体行きだよな？

『表の局員に見つけてもらえれば保護されますが、裏に見つかった

「戦闘ですね」

「速攻で捕まる自信があるぞ」

「何せ遠距離攻撃が出来ない上に武器も無いんだ
接近する前に囲まれて滅多打ちだな」

「多分捕まりますね」

「普通の局員が来ますように…」

「じゃなきゃ俺に明日は来ない…
勘弁してくれよ…」

「そつえばさ、ドラグーン」

「どうしました？」

「1つ聞き忘れてたな」

「ここで目覚める前の記憶が一切ないんだが…
実験前の俺が一体誰だったのかお前のデータベースに残ってないか
？」

「一番古い記憶がさっきまでカプセルに入っていた事だからな」

「それは…申し訳ありませんが…ありませんね」

「そうか…まあ生きて行くには困らんだろ」

人間生きてりや何とかなるさ…そついや既に俺は人間じゃなかったな…

『一先ずはこの世界からの脱出を目標にしましょう』

「ああ、さつさと来いよな…管理局…」

脱出成功……したんかなあ……（後書き）

後少しで管理局登場ですね。

今1話から見直してるんで、少し更新が遅くなると思いますがご容赦下さい。

では、また次回お会いしましょう！

拾い物

リユウが研究所から出てきて数週間後

「いい加減来てくれないかな…」

あれから研究所の救難信号を起動させておいたんだが…

『救難信号を送ってからしばらくですね』

ぜんっぜん来ねえ…

「原生生物の相手は疲れた…」

ギヤオオオオ！

「だからって実験体ともいやじゃあ！」

自分で言うのもなんだがどうやらあの研究所は俺以外にも化け物を造り出していやがったらしいな

廃棄されたのかデータを取っていたのかしらねえが研究所の外に化け物共がウヨウヨいやがる

例えば目の前のコイツなんて腕が4本生えてる上に背中に翼だぜ？
複数の生物の遺伝子を組み合わせたらしいな…あそこは遺伝子研究を主に行っていたのか？

「よつと！」

俺の身体能力もどうやら普通じゃないからな、

この体になる前は知らんが今じゃ空飛んでる奴の所へジャンプで行けるし

「セイツ」

奴が上からブレスを吐いてくるから

隙を狙って奴の背後に飛び上がって首の骨を折ってやれば一撃だ

グギャアア…

「相変わらず気持ちいいもんじゃないな…」

流石に慣れたって言ったなら不謹慎だがもう躊躇いは無くなっちまったな

『それはそうでしょう』

「デバイスが使えればなあ…楽になるんだが…」

少なくとも素手で殺るよりは感触が残らんだろ

「ったく…さつさと来いよな…管理局」

『もしかしたら救難信号が壊れているかもしれないね…』

「壊れてたら俺は…?」

『この世界に独りぼっちですかね…違法研究所を造るのだから人気の無い世界にするはずですし』

マジかよ…1人とか…精神的にきついぞオイ

「やっぱりなあ…研究所に様子見に行くか…」

『そうしよう』

しゃあねえ、またあそこに行くのはめんどくせえけど行くしかないか

〈研究所〉

全然管理局が来ないので信号が壊れてないか見にきたリュウ

「…ちゃんと発信してるな」

『ただ管理局が発見してないだけですな』

「虚しいな…」

『まあ、とりあえず研究所内を探索してみては？』

「そうだな…せつかく来たんだし何か使える物でもあればいいな」

〈数時間後〉

「結構探したな…」

『色々見つかったじゃないですか？』

「危険物ばかりじゃねえか…服が見つかったのは嬉しいが…」

見つかったのは大量のロストロギアと研究員の物であったであろう
白衣

『ロストロギアがこんなにあるなんて、凄いですね。』

「こんなところを管理局に見つかったらヤバくね？」

『とりあえず捕まりますね。そして調査などをして、無実が証明されるまで留置場ですね。』

「下手したらそのまま牢獄行きだな…」

『危険な物は除いて比較的危険の少ない物を調べてみましょう』

「あいよ」

「数10分後」

「コレは？」

『暴走したら次元震が起きます』

「んなもん置いとくなよ…」

そして……

「魔導書か…」

『コレは…呪文を唱えると使用者の魔力を勝手に吸収して魔法を放

つよつですね』

「じゃあ、俺でも使え…」

『無理ですね』

「……何故」

『放出量が少ないからです。例え使用したとしても威力はかなり低いです。目眩ましにもなるかどうか…』

「保存の方向で…」

『カバンもありましたし、それに入れておきましょう。』

「じゃあコイツも保留だな」

『そうしておきましょう。残りの危険物は管理局が来たら引き渡す方向で』

「それまで此処に放置だな」

く森く

研究所から帰ってきたリユウは晩飯の確保を済ませ、ドラグーンと話をしていた。

「なあデバイスが無くて魔法を使えるんだろ？」

『ええ、使えますが』

「何か俺にも使えそうなやつ無い？」

『貴方の魔力だと…シューターが1つで限界ですかね…』

「シューター？」

『魔法の基礎みたいな物です』

「基礎が一発だけって…」

『これから先に魔力放出量が増えれば書類に書いてあった近距離転移とかも扱えるようになりますよ』

「…………ハア」

『気長に頑張りましょう』

「おう」

『では、シューターの発動からやっていきましょう』

「練習を始めて1時間」

「結構出来るようになってきたな」

『貴方は元々魔力の操作は上手い方みたいですから。数が無くては戦闘には使えません。』

「確かになあ…」

『先ずはシューターを思いのままに動かせるようになることが先決です。』

「りょーかい！」

シューターの練習をする事にしたリュウ。果たしてこれから先魔力は増えるのか

～1週間後～

「……………」

無言でシューターを動かすリュウ

「……………っ！」

枝の間や木と木の間をかなりの速さで飛び回らせていたがぶつかってしまった

『それなりに扱えるようにはなってきましたね』

「まあ、様にはなってきたな」

『魔力操作も大分上達してきましたから、少ない魔力を無駄にする事は無いと思います。』

「少ないは余計だっつの…」

『そういえば、貴方と共に居て気づいた事があります。』

「ん？何だ？」

『貴方は常に周りに魔力を放出し続けています。』

「へ？」

『簡単に言うと貴方は常に周りに魔力供給を行っています』

「マジで？」

『ええ』

「何でそんな事に…」

『分かりません。貴方に組み込まれた遺伝子を持っていた龍が周りに干渉するか魔力を放出しているタイプだったのでしょう。』

「マジかよ…」

『どうやら貴方は生物兵器としての他に魔力タンクのような役割としても造り出されたようです。』

「タンク…」

『どちらにせよ兵器ですね』

「兵器よりもタンクのが嫌だ」

『事実ですから』

「チクシヨウ…」

『体質的なものですから止める事もできませんしね』

「なん…だと…」

魔力タンク（リュウ）は無事この世界から脱出できるのか

「誰が魔力タンクだあ！」

拾い物（後書き）

次回は管理局登場です！

あと、読んで下さる皆様に相談が…

学校の友達に小説を書いていることがバレて…注文をされました。

主要男性キャラの殆ど（具体的にはヒロインになりうる年齢のキャラ）をTS化してくれ

らしいです…

ぶっちゃけユーノはギリギリ見たことがあります、ザフィーラのTSとか想像出来ねえ…

と、言うわけで皆様の需要があれば頑張ります。無い場合は友達には諦めて貰います。

どうぞ意見を感想にお願いします！

では、また次回お会いしましょう…

管理局との邂逅

「次元航行艦アースラ」

乗組員の1人が見つめるモニターの先にはリュウのいる世界が

「艦長！1年程前に違法研究所を発見され、調査が終わるまで進入禁止になっていた管理外世界から救難信号が発信されていますが…」

「あの世界に？」

「はい…」

「ひとまず行ってみましょうか」

「了解です」

「艦長…そんな簡単に決めていいんですか？」

「どっちにしても第97管理外世界から救難信号が出てるのだから本局に戻る時間は無いわよ？」

「それは…確かにそうですが…」

「じゃあいいでしょ？」

「むう……………」

「じゃあ、そっちの世界に行ってから第97管理外世界に行きます。」

」

「まったく…艦長は…」

溜め息をついている苦労が多そうな少年だった

「リュウのいる世界」

リュウがシューターの練習を始めてから更に1週間が経った

「まだ来ねえのかよ…管理局」

いい加減気づけよ…職務怠慢かコラ？

『全然気づきませんね』

「他人事みたいに言いやがって…」

この宝石…何処か遠くへ投げ飛ばしてやろうか…

『いえいえ』

「まったく…ん？」

俺とドラグーンがそんな感じで不毛な争いを繰り広げていると

『！？ 転移魔法の反応です！』

「何！？」

いきなり側に魔法陣？らしきものが展開されて、人が現れた！

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて…」

「『遅い！』」

今まで何してやがった！救難信号を送ってどれだけ経ったと思ってやがる！

「え？は？」

「お前ら管理局は何をしてやがる！救難信号を出したのは1ヶ月程前だぞ！」

『まったくです！』

「え？あの…すまなかった…」

「まったく！」

おつといきなり怒鳴りつけたからコイツの容姿さえも確認してなかったな…

黒髪黒目に身長は…低いな…コイツ何歳くらいだ？つーか俺も何歳なんだ？

「……………で、君は一体何者だ？この世界は立ち入り禁止のはずなんだが？」

「立ち入り禁止って…ドラグーン知ってたか？」

『いえ、まったく』

だよなあ…まあ入り込んではいねえけどさ…ここで目が覚めたんだし

「つーか、立ち入り禁止つつつてもさ、俺とドラグーンはこの世界で目覚めたんだが？」

「何だと!？」

黒髪黒目…子の呼び方は長いな、黒目でいいか

黒目が俺の言った事に驚いているときなり空中に画面が現われて髪が緑色の女が黒目に話しかけ始めた魔法って凄えな…

『クロノ、お疲れ様』

「あ、艦長…どうやら少しややこしい状況なんです…」

『ええ、そのようね。でね、ちょっと話を聞きたいからその子をアースラに案内してあげてくれるかしら?』

「了解です。すぐに戻ります。」

結局…俺は黒目についていけばいいのか?

「えーっと…俺はついて行けばいいのか？」

『おそらく、話が聞きたいと言っていましたし。』

「そういう事だ。ついて来て貰えるか？」

「りょーかい」

こうして俺はアースラ？とか言う場所に行く事になった…犯罪者扱いにならなきゃいいけどなあ…

「アースラ内」

なんか…やけに日本かぶれって感じだな
獅子脅しやら松の盆栽やらが所々に置いてあるが…

「どうぞ」

羊羹と抹茶だ、何か久しぶりに見る感じだなあ…
記憶喪失だからかもしれないが

「お、羊羹だ」

「君はこの世界に居たのに羊羹を知っているのか？」

「実験体になる前の記憶が少し残っててな、日本で食ったことがある」

「そうだったのか…」

そっか、俺は別にどうでもいいんだが他人からすると俺の境遇は普通じゃねえんだ
黒目が落ち込みしまった

「気にすんなよ」

「ああ…ありがとう」

「いって別に。話の前に自己紹介だな」

さつきから黒目じゃややこしいからな
さつさと名前を教えてほしい…

「ああ、すまない。さつきも言ったがクロノ・ハラオウンだ」

「俺はリュウ。んで、コイツがドラグーンな」

『よろしくお願いします』

「こちらこそ。私は次元航行艦アースラ艦長、リンディ・ハラオウンです」

「よろしく」

黒目がクロノで、さつきの緑色の髪の毛の女がリンディか

「それで、話を戻すが君はこの世界で目覚めた。と言ったな？この違法研究所は襲撃されてから閉鎖したはずで、中の実験体達も全員保護したはずだが…」

クロノが俺の境遇を聞いてきたから答えようとしたら…

『それについては私が。私とリュウが配置されていた場所は地下深くに隔離されていて、

どうやら研究員の中でもかなりの高官でないと入れない部屋のようでした。そしてリュウは最終調整に入っていたので魔力が殆ど使われていませんでしたし、リュウも放出する魔力は微々たるものです。

「ドラグーンが答えた…説明長いな…」

「そういえば君も実験体なのだろう？　どういう実験だったんだ？」

「Project・Dって知ってるか？」

ふむ…確かあの書類に書いてあったな、Project・D…それが俺を生み出す事になった計画だった筈だ

「Project・D？　詳しくは知らないが…途中で中止になった計画の筈だ…艦長知っていますか？」

「どうして…貴方がその計画を？」

クロノとリンディが怪訝そうにこっちを見てくるが…
やっぱり成功してたって知らねえのか

「俺が唯一の成功体だそうだ」

「…！？」

俺が事実を告げると2人は目を見開いて驚いた
まあ…そりゃそうだろうな、目の前に途中廃棄された計画の成功体がいるんだから

「龍の遺伝子に呑み込まれて暴走する事は無くなったらしいぞ？この書類に書いてあった」

確かパクってきた白衣の内ポケットに折り畳んで…あった
計画概要書と結果報告書、それにまだ読んでねえ部分もあるが…まあいいだろ

「これは…！？」

「まさか…」

俺が手渡した書類を読んで驚愕してる2人
んなもんいいから俺の扱いはどうなるんだよ？

「とりあえずそれは置いといてさ、俺の扱いはどうなるんだ？」

『次元犯罪者としてか、次元漂流者か』

前者だったら俺は逃げるぞ

「ひとまず部屋を用意するからそこに待機していてくれ。どうなるかは後で伝えよう。」

「分かった。案内してくれ。」

これって保護…だよな？まさか確保とか拘束じゃねえよな…？

「あ」

『どうしました？』

んで、案内してもらった部屋でボーっとしてたら思い出したんだ

「ロストロギアの事言っの忘れてた」

『そうでしたね…』

あの大量の危険物の事を…
放置しておいてこの世界が崩壊、とか無いよな…？

「まあ戻ってきた時に言いやぁいいだろ」

『いいんですかね…』

別に接触しなけりゃ危険じゃないはずだ、次クロノからリンディに会った時に言えればいいさ

くリュウの部屋く

俺がドラグリーンと色々話してたらクロノが部屋に来て

「リュウ、君の処遇が決まった」

「犯罪者か？保護か？」

俺の処遇が決まった事を伝えに来た
まあ何もやましい事はやってねえから普通に保護してもらえと思うんだが…

『犯罪者の場合免罪にも程がありますが』

「君はアースラで保護する事になった」

「留置場行きは免れたか…」

よかった…暗くて狭いところは勘弁だぜ

「そこで君のデバイスを一旦預けてもらいたいのだが？」

「ドラグーンは扱えないから心配ねーよ。それよりコイツ等を頼む。」

「

さつさとプロテクトを解除してもらわねえと武器が何時まで経っても手に入らんからな

そう思って俺が4つのデバイスをクロノに渡したんだ

「これは？」

『リュウに用意されたデバイスです。詳しくはあの書類に書いてあったと思いますが…？』

「ああ、すまない。君の事について話し合っていたから書類は今、母さ……じゃない、艦長が読んで…」

ん？今母さんって言いかけたな…

そしてまたクロノに通信が来たな、次は何なんだ？

『あら、別に今は出撃中じゃないんだし、いいじゃない』

アンタ今までの会話全部聞いてたのか？

それにしても…名字からも思ったがやっぱり2人は親子だったか

「艦長！しかし…」

「だからいいじゃない。母さんって呼んでくれないの？」

「まったく…で何の用ですか？母さん」

クロノが呆れて用を訪ねると

『そうそう、リュウ君、これからこの艦アースラはもう一つ救難信号が出ている世界に向かいます。貴方もついて来てもらえるかしら？』

ようやく要件を俺に伝えてきた

別にここにいりや少なくとも衣食住は保障されっからな、構わん

「いいぜ。俺はこの世界から出たいだけだしな。」

『よかった。ではこれから…』

『ちょっと待って下さい』

「どした？ドラグーン」

おそらくリンディが指令を出そうとしたのだろう
それを遮ってドラグーンが待ったをかけた

『ロストロギアですよ』

「……………ああ！」

そつだ！あの山積みの危険物を処理してもらわにゃいかんのだ

「ロストロギア？」

「俺が調整されていた部屋に大量のロストロギアがあつたんだよ」

俺がそんな事をさらつと言つと…

『早急に封印処理をしなければ暴走の可能性が有る物もありました』

「なつ……………！？どうしてそれを早く言わない！」

「いやあゝ忘れてて」

クロノが慌てだした

「まったく…艦長！」

『ええ、クロノ・ハラOWN執務官、只今より目標のロストロギアの調査、封印処理、出来れば回収もお願いできるかしら？』

「了解しました！」

『リュウも行ったらどうですか？』

「俺が行っても役に立たなくね？」

だって碌な魔法使えないじゃんかよ

『魔力供給があるでしょう』

「そっか、クロノ俺も行くぜ」

不本意だが魔力タンクとして働いてやろう

「協力してくれるなら感謝する」

『じゃありユウ君もお願いね。事は一刻を争うから』

「りょーかい。」

さっさとして行って終わらせますか

く森く

ギヤオオオオ！

ガアアアア！

グオオオオ！

「うつとーしいんだよー！」

何なんだコイツら！？やけにコンビネーションがいいんだが！？

「魔法は使えないのに強いな…君は」

「1ヶ月ちょいはコイツ等と戦い続けてたからなあ」

もう飽きちゃった…

『対処法に弱点、何でも分かりますね。』

「そうだったのか…度々すまなかった…」

「もういいって、こうして来てくれたんだからさ」

何時まで気にしとるんだコイツは

「そうか…」

「ドラグーン、そろそろだよな？」

『はい、後数千メートルです』

うし、後数分で着くな

「遠いじゃないか！」

「そうか？飛ばせば10分かからんぜ？」

「魔法も使えないのに!？」

「こつすりゃいいさ！」

木を踏み台にして跳躍、そして木に着地して更に跳躍
みたいな感じでいけば歩くより早いんだよ

「デタラメな…」

〈研究所〉

「ほれ、ロストログア」

「……………何で…こんなにも…」

目の前にはロストログアが大量に

『全て起動しなければ魔力を発しないものばかりですから、起動したらお終いのようなものですが』

「不吉な事を言わないでくれ…」

「さっさと封印して戻ろうぜ？」

「そうしよう…」

クロノが魔法陣を展開し封印の準備を始めた時

「んなっ!?!」

『そんなっ!?!ロストログアから魔力反応!?!』

「溜まっていた魔力が反応したか!?!」

「チイツ、ドラグーン!何か方法は!?!」

『1つ目は貴方の魔力放出量の限界を越えて魔力で押さえ込む。2

つ目は貴方のD・ダイブ。3つ目は貴方がクロノ執務官に魔力供給をし続けてクロノ執務官が全力で封印処理ですね。」

「じゃあ…3つ目を…」

「よっしゃ、クロノ」

「何だ！？今は話してる場合じゃ…」

「後、頼んだぜ？」

ドラグーンをクロノにパスするリュウ

「うわっ！おい！」

「D・ダイブ！！！」

リュウから赤い魔力が吹き上がり背中にバーニア、両腕両脚が龍のような形状に、まるで龍人のような姿へと

「これが…Project・D…」

「ドラグーン！方法は！？」

『簡単です。ロストログアが発している魔力を上回るエネルギーを叩き込んで下さい。』

「了解！ハアアアアア！」

両腕に魔力を溜め始めたリュウ

『クロノ君！？』

「エイミィ！どうした！」

『魔力余波が凄すぎて映像が映らないんだけど、生体ロストログリア反応がクロノ君の目の前で起きてる！』

「え？」

『一体何がいるの！？』

「どっだけ魔力出てんだ…？」

「いや…リュウしかないが…」

『龍！？その世界龍がいるの！？』

「いや…龍じゃなくてリュウ…って！ややこしいな！」

『何言ってるの…？』

「いや、気にしないでくれ…大丈夫だ。心配いらない」

『いや…でも…』

「多分もつすぐ終わるから」

『え？』

「オラアアアア！」

両腕に溜め込んだ魔力を砲撃のように撃ち込むリュウ

放たれた魔力は暴走するロストログアと衝突。互いに拮抗しているようだ

「ウオラアアア！」

更に出力が増して…

「ラア！」

ロストログアから反応が消失した

「ハア…ハア…」

「大丈夫か！？リュウ！」

「あ、ああ…平気だ…」

そう言つて元の姿に戻る

「あ…ヤベ…」

しかし疲労で倒れ込んでしまったリュウ

「リュウ！？リュウ！しっかりしろ！リュウ！」

そんな取り乱さなくても平気ッスよ

『どうしたのクロノ君！？』

「リュウが倒れた！医療班を送ってくれ！」

『いや…龍が倒れたって…あ！艦長！』

『クロノ！リュウ君が倒れたの！？』

「はい！力を行使した反動だと…」

『分かったわ！医療を至急送ります！クロノはそのまま封印を！』

「了解しました！」

『別に只の疲労だからそんなに心配しなくても問題はないのですが…』

そんなドラグーンの呟きは誰にも聞こえませんでしたとさ

管理局との邂逅（後書き）

えーっと…感想にあつた通り自分の作品は地の文が全然ありません。しかし戦闘描写が入れば少しはましになると思いますのでどうか見守っていて下さい。

また次回お会いしましょう

模擬戦と可能性

くアースラく

ロストログアの処理が終了し、出航したアースラ

「リュウは目覚めましたか？」

「いえ、まだ医務室で眠って…」

クロノがリンディにリュウの事を聞いていると…

「艦長！患者が居なくなりました！」

リュウが脱走した知らせが

「あのバカ…！」

「まったく…」

その頃…

く食堂く

「おばちゃん！お代わり！」

「よく食べるね！おばちゃん作りがいがあるよ！」

もの凄い速度で飯をかき込むリュウの姿が。

「数10分前」

「ん…？ここは…？」

『起きましたか？リュウ』

少し離れた所の机にドラグーンが置かれている

「ドラグーン？そっいゃ…D-ダイブを使って…」

『倒れたですよ、貴方は』

「そっか…それにしても…」

『どうしました？』

「腹減ったあ…」

『はい？』

先ずそれかい

「飯食お…」

ドラグーンを手に取り

「食堂どっちだ？」

勝手に医務室を出て行ったのでした

その少し後で

「あれ？患者がない！？」

く現在く

「ふうく満足」

「よく食べたねく」

リュウが頼んだのはカツ丼（何故あるかは突っ込んではいけ
ない）だが、1人で4杯食べていた

「いやあくアレ使った後は腹減るなく」

『体中の細胞が活性化しますから、燃費が悪いのは仕方ありません』

「あくお茶つまっ」

「それにしてもアンタ見ない顔だね、新入りかい？」

おばちゃん…見ない顔なら簡単に飯作らないでよ…

「んくそんな感じかな？」

『随分のんびりしてますがいいのですか？』

「何が？」

『許可が出ていないのに勝手に医務室を抜け出した挙げ句食堂で食事をしてるんですよ?』

「それは…マズいな…」

今更気づいたか

『ええ、もう遅いですけど』

「へ?」

「ストラグルバインド!」

「どわっ!?!」

リュウの体を青色の魔力が締め付ける

「こ、コイツは!?!」

『バインドですね、この魔力はクロノ執務官です。』

「げ……………」

「さて、何か言い訳は?」

「…………アリマセン」

「じゃあ行くか」

「何処に?」

「母さんが説教するらしい」

「……………マジかよ」

ご愁傷様

『アホですね、リュウ。』

（艦長室）

リンディに説教されてるリュウ
ざまぁwww

「貴方は無茶をし過ぎです」

「けどよーあの時はアレが最善策だっ……」

「クロノと協力する手段も有ったはずよ？クロノとドラゲーンの双方に聞かせてもらったわ」

言い訳の手段を先に潰されるリュウ

「余計な事を……」

普通報告してるから

「協力出来る時は協力しないと……クロノと一緒に行った意味が無いじゃない」

「むー…」

「本来なら謹慎などを命じますが、貴方は正式な乗組員ではないし、結果も最悪の事態は免れたので今回は不問とします」

「やりい！」

「ただし！今後無茶はしないこと！」

「はい…」

「では、行っていていいわよ」

「うーす」

艦長室を出て行くリュウ

「本当に分かってるのかしら…」
「いやぁ多分分かってませんよ？」

〈医務室〉

「今度こそ許可が出るまで安静にしていして下さいね！」

「へーい」

リュウが医療隊員に怒られてる

「まったく…」

医療隊員が部屋を出て行った

「ったくよくアレが1番手っ取り早かったんだよ……」

『早急に片を付けるならあの方法が1番でしたね』

「だろ？」

『ただ、あの時はまだ時間的猶予が有ったのでクロノ執務官と協力しても充分解決出来たかと』

「むう……」

『とにかくこの先あまり無茶をしてはいけません』

「何でだよ？」

『D-ダイブを多用すると、いくら調整されたと言っても細胞を活性化させるんですよ？下手したら貴方の自我が無くなります』

「…………マジ？」

『冗談ですけど』

「この野郎……」

『私ねAIは女性型です』

「そついう意味じゃねえ！」

リュウ達が漫才をしていると

「君達は何をしているんだ…？」

「おろ？」

『クロノ執務官ではありませんか、どうしました？』

「いやあ、大した事じゃない。リュウの様子を見に来たんだ」

「お陰でもう平気だぜ」

『元々魔力使用過多の疲労ですから、大した事ではありません』

「だってよ」

「そういう事ならよかった」

「心配してくれてありがとよ」

「そういえば君はD - ダイクだったか？アレ抜きでどのくらい戦えるんだ？」

「どんくらいだろ？」

遠距離に持ち込まれるとまあ勝ち目は無いな

『おそらく接近戦なら負けはありません』

「ほづ…其処まで言うか…」

「やったこと無いから分かんけどな」

「なら僕と模擬戦でもするか？」

「へ？」

『それは良い考えですね』

「だろう？なら早速手配して来るよ」

医務室を出て行くクロノ

「なあ……」

『どうしました？』

「俺って安静にしなきゃいけないんじゃない？」

『大丈夫です。さっき、もう動いていいと連絡が入りました』

「……ならいいのか？」

『いいんですよ』

成り行きでクロノと模擬戦をする事になったリユウ
接近戦なら勝てるんだけどな……

「そついや俺……デバイス無いじゃん」

「シミュレーションルーム」

部屋の中央付近で向かい合っているのはリュウとクロノ。
ドラグーンはリュウが扱えないので制御室で見学

「さて、準備はいいか？リュウ」

「俺デバイス返してもらってないんだけど……」

その一言に笑みを凍らせるクロノ

「……そうだったな……」

「もう解析は終わってんの？」

「いや……まだ終わってないらしい」

「そっか……んじゃあこのままやるか？」

デバイスが返って来なくても気にしてない様子のリュウ
まあ一度も使っていないしなあ……そりゃそうだ

「しかし……君も武器が無くては……」

「今までは武器無しで戦ってきたんだが」

「はは……そうだったな……」

「おう、問題無い」

「じゃあ…始めようか?」

「オッケー!」

臨戦態勢をとる2人

合図は無い。始まりは2人が決める

「行くぞ!」

牽制にシューターを放ちながら距離を取るクロノ

「へっ!喰らうかよ!」

素早くシューターをかわし追尾するリュウ

「喰らえ!」

チャージしておいた魔力を解き放ちシューターを撃ち出すクロノ
数はさつきよりも遥かに多い

「チィッ!」

流石にかわしきれずに何発か直撃するリュウ

「ぐっ!」

「まだまだあ!」

怯んだリュウに砲撃魔法を放つクロノ

「喰らうか！」

砲撃魔法はかわしたが…

「フンッ！」

「何い！」

リュウが砲撃魔法に気を取られてる隙に接近していたクロノ

「セイツ！ハア！」

「うおっ！」

S2Uで殴りかかるクロノとそれをいなすリュウ

「オラア！」

「ぐあっ！」

しかし接近戦ではリュウに分がある様子、リュウに蹴飛ばされ体制を崩すクロノ

「そらよ！」

「おっと！」

それを好機と見て追撃するリュウだがかわされる

「バインド！」

「どわぁ！」

すぐさまバインドを放つが避けるリュウ

「魔法が使えないって不便なんだな…っ」

「魔法が使えない癖にここまでやるなんて…っ」

再び接近戦に、リュウは拳、クロノは杖で打ち合う

「そらっ！」

「うわぁ！」

クロノと打ち合っているながらに足払いをかけるリュウ

「クハハッ！」

「クソッ！」

上から魔力を腕に込めて殴りつけるリュウとプロテクションで防ぐクロノ

「まだまだぁ！」

「ぐう…！」

しかしリュウが更に力を込めるとプロテクションに亀裂が走る

「ラァ！」

「かつ…はぁ…」

リュウにプロテクションを破られ腹部に拳が突き刺さるクロノ
空気が腹部からこみ上げてくる

「まだ…行けるっ！」

「がつ！」

リュウの顎を蹴り上げるクロノ

「でやぁぁぁ！」

「ぐふっ…」

顎を蹴られ怯んだリュウを杖で殴りつけるクロノ

「これで…終わりだ！」

クロノが至近距離で砲撃魔法を叩き込み

「がつ…！」

撃ち込まれた勢いで壁に叩きつけられたリュウ

「ハァ…ハァ…やったか？」

叩きつけられたまま動かないリュウだが…

「まだまだあ！」

勢いよく起き上がる

「ふっ…その様子じゃあまだ行けそうだな？」

「当たり前！アレくらいでやられつかよ！」

クロノが魔力を杖にチャージしリュウが走り出そうと体を屈めると…

「ちょっと待ちなさい！」

リンディが乗り込んで来た

「か…母さん！？」

「いきなり何だよ…いいところだったのに…」

驚くクロノと文句を言うリュウだが

「リュウ君はまだ安静の筈じゃ？」

リンディに問い詰められる

「いや、でも、さっき動いていいって…」

「だからといっていきなり模擬戦をしていいわけ無いでしょう！」「

「いや…でも…」

「言い訳無用！」

「はい…」

言い返そうとするがリンディの気迫に圧されるリュウ

「クロノ！貴方もよ！」

「へ？」

「さっきまで気絶してた人と模擬戦するなんて！」

クロノも説教されるが

「俺半分人間じゃねえぞ？」

「貴方は黙ってなさい！」

「すみません…」

リュウ…お前やっぱアホだわ…

「とにかく！リュウ君は医務室で休みなさい！クロノは次の世界に着いたときの準備！」

「すみませんでした…」

「すみません…」

「まったく…分かりましたね？」

「はい…」

「…まったく」

そう言つて戻るリンディ

「じゃあ…僕も戻るよ…」

「ああ…俺もドラグーン拾つてから医務室に行くわ」

今回はリュウも反省した様子だ

「また後で、リュウ」

「おう、次はデバイス返ってきたらな？」

「…ああ！」

お互い再戦の約束を交わし戻っていく

この小説って主人公こんなに熱い性格だっけ…？

〈医務室〉

宛てられたベッドの上で寝転んでドラグーンと話すリュウ

『どうでした？クロノ執務官との模擬戦は』

「やっぱり強いわ…クロノは」

『そうでしょうね、でなければあの年で執務官などにはなっていない
せん』

「だよな。あのまま続けてたら俺負けてたわ」

『やはりデバイスが必要ですね』

「お前が使いりゃいいんだがな……」

『私が耐えきれませんから……すみません』

「気にすんなよ！俺がもつと魔力の扱いを上手くなりゃいいんだからさ！」

『……はい！』

何…このリュウ…気持ち悪！

「けどさ、魔力の扱いって具体的にどうすりゃいいんだ？俺って魔力の放出量全然無いじゃん」

『正確にはD・ダイブ時の魔力の扱いです』

「へ？」

呆けるリュウ

『私に武器としての形状はありません。貴方のD・ダイブ時のサポートとして開発されました』

「具体的には？」

『D・ダイブ時に貴方と融合し魔力運用をより効率的にします』

「んで、結果は？」

『攻撃の速さ、威力の底上げです。』

「へえ〜」

いや…へえ〜って…お前の切り札的力だろ？

『あと、発見したオーブと宝石を解析した所、貴方がD・ダイブを発動したときに共鳴を起こしていました』

「共鳴い？」

『はい、おそらく貴方に組み込まれた龍、アジーンに関連する物と思われる』

はい、フラグ立ちました〜

「つまり更にD・ダイブが強化されると？」

『はい』

「凄いじゃん」

そんだけかよ…

『D・ダイブの扱いが更に上達すれば部分変化も可能かと』

「部分変化…？」

『はい、例えば腕だけ変化させたり…等です』

「接近戦の途中で変化つてのも意表が突けるな」

そりゃ…相手はビックリするだろうよ…突然相手の腕が異形化するんだぞ？

『以上でD・ダイブとオーブと宝石についての報告は終了です』

「ありがとさん。これからはD・ダイブ時に意識するか…」

D・ダイブの強化を目標にしたリユウ

これ以上アレを強化してどうすんだよ…

くモニタールームく

どうやらクロノがリユウのデータを見てるようです

「エイミィさっきの模擬戦とこないだのロストログア封印のデータ解析は終わったか？」

「終わったよ、このデータ見てよ！普段や模擬戦の時はF有るか無いかぐらいなのにD・ダイブ時はSなんて目じゃないよ！」

リユウは極端過ぎますな

「更に近接戦闘も巧い…か」

「倒すなら遠距離から隙を突くしか無いね」

「確かに…」

「あら、それはリュウ君のデータ？」

「あ、艦長。はい、そうですよ」

「それにしても…ホントにあの子実験体なのかしら…」

「自分もそう思いまーす」

「そうですね…力を使うのもまったく躊躇いがありませんでしたし…」

「普段の生活からも普通の人間だよね」

「アイツ…図太過ぎやん…」

「そういえばリュウのデバイスの解析は終わっただんですか？」

「そういえばそうね…」

「あ、終わっただけですよ。普通のデバイスじゃないって技術班が言っていました」

「普通じゃない…？」

「どういう風に？」

「魔法を登録する領域がかなり少ないのに魔力伝達度が凄いの、あとはスッゴい頑丈だって」

「頑丈…か…確かにあの力では生半可なデバイスじゃ保たないな」

「使える魔法も少ないからね…魔法の多さよりも速度を重視したんでしょう」

「使える魔法は4つだからなあ
しかも戦闘に直線関係あるのはその内3つ
切れる手札が3つって…少ねえ」

「じゃあ後で受け取りに行くか、リュウに返さないと」

「そうね。クロノ、頼める？」

「はい母さん」

「私も行こっかな」

「エイミイも？」

「挨拶しときたいしね」

「それじゃ後で行こうか」

「うん」

やっとリュウのデバイスが返ってくるのか…

模擬戦と可能性（後書き）

戦闘描写入れました

けどまだ少ない気がします…キャラどうしの会話の時に入れるのが
難しくて…精進するよう頑張りますのでこれからもお願いします

デバイスゲットだぜ！そして海鳴へ…（前書き）

やっと原作入り始めました

ちよいちよいオリジナル設定や独自解釈がご入りますが容赦下さい

デバイスゲットだぜ！そして海鳴へ…

〽リュウの部屋〽

本来宛てられた部屋に帰ってきたリュウ
ここより医務室の方がいた時間が長いな…

「暇だな…」

『艦の中じゃやる事何て全然ありませんから』

リュウが暇を持て余しているとクロノが入ってきた

「リュウ、いるか？」

「んあ？クロノか」

「初めまして！エイミィです」

「お？リュウだ、よろしく」

『唐突な事も気にしない…流石リュウ』

「誰かって事も気にしないんだな…」

おそらくリュウは敵意を向けられない限り普通に接します

「んで、何の用だ？クロノ」

「そうだ、君のデバイスに掛けられていたロックの解析が終了した」

「じゃあ使えるのか？」

「ああ、だが一つ一つのロックの内容が違ってな…今の所2つしか使えない」

「充分だ」

「この2つだ」

指輪と腕輪を渡すクロノ

「名称さデュランダルとルファル、だそうだ」

『形状を確認しておきましょう』

「だったらシミュレーションルームの手配やってくねー！」

「ああ、頼む」

部屋を出て行ったエイミー

「そうだ、君のデバイスについて少し説明をしなければ」

「説明？」

『リュウのデバイスは少し特殊なので』

「特殊…ねえ」

エイミーから聞いたデータ解析の結果を伝えるクロノ

「ふむ…簡単に言いやあ俺は魔法より格闘か」

「そうなるな」

『リュウは元々奇襲、強襲、突破、AMフィールド下での戦闘、を目的として造られましたから』

「AMフィールド？なんだそれ」

『AMフィールドはAランク以上の特殊結界です』

「そのフィールド内では魔力の結合が解かれて無力化されてしまうんだ」

「魔導士には天敵だな」

AMフィールド、正式名称はアンチマギングフィールドでございます

『まずはリュウのデバイスの形状を確認に行きましょう』

「そうだな、エイミーも準備は終わってるはずだ」

「あいよ」

デバイスをもって移動する3人

「シミュレーションルーム」

中央にリュウが立っておりクロノは壁際で待機

エイミイは制御室でデータの記録、ドラグーンはクロノが持つてる

「さてと、んじゃ早速…set up!」

最初はデュランダルを起動

「形状は剣だな」

刀身は長く分厚い、どちらかという大剣と言える

「そんな大きいのが扱えるのか？」

「結構いけるぜ？」

棒切れのように振り回すリュウ

『リュウの腕力で扱えないはずがありません』

「そうか…リュウは半人半龍だったな」

周りの人間に実験体と忘れさせる程の自然体…流石リュウ

「さて、次は…とset up!」

次にルファルを起動

「……爪？」

「爪…だな」

手首周辺から指先までガントレットが覆い手の甲辺りから爪が付いている

「ふーん…小回りが効くな…」

蹴りも混ぜながら攻撃のモーション確認をするリュウ

「やっぱり格闘が巧いな…君は」

『むしろ格闘しか出来ませんが』

「やかましい！」

しばらく繰り返してモーション確認をしていたがそれも終わり…

「こんぐらいでいいかな…」

「終わったか？」

「ああ…早速模擬戦を…」

「無理だな」

「マジで？」

「ああ、もうすぐで次の世界に着くからな…模擬戦なんてやったら魔力が無くなる」

そりゃあ魔力が必要になるかもしれないのに消費するバカはいないからな

「俺は元々無いんだが」

『つまりリュウは戦力外って事ですよ』

「えゝマジかよ…」

「もしかしたら協力してもらうかもしれないがな」

「任せろ！」

やっと手に入れたデバイスを使ってみたくて落ち着かない様子

「まあ…君は力が多用出来ないから使い捨ての切り札に近いな…」

『一回使う度に気絶してでは無理ですね』

そんな2人の言葉も耳に入らずデバイスの扱い方とモーション確認に集中しているリュウであった

くアースラく

アースラの通路をリュウがドラグーンと話しながら歩いていた

「なあ、ドラグーン」

『どうしました？リュウ』

「俺ってさ一度に放出出来る魔力量が少ないんだろ？」

『はい』

だからシューター等も一度に一発ずつしか放てない

「だったらさ、魔力を溜めておく事って出来ないのか？」

『溜めておく？』

「普段の魔力に追加する形でさ」

簡単に言つとPCのUSBメモリみたいな感じ
本来あるものに追加して容量を大きくする

『…出来ない事もないかもしれませんが』

「本当か！？」

『ええ、カートリッジの要領で行えば可能かと』

「カートリッジ？」

『基本的にベルカ式デバイスに付いているシステムの事です。貴方がさっき言つた事をデバイスで行うようなものです』

カートリッジシステムはデバイスと魔導師の両方に不可がかかるが
リュウの提案はリュウ自身にだけ不可がかかる

「そうか…じゃあ早速実行だな」

『ならシミュレーションルームに行きましょう』

「じゃあクロノに話しとかないな」

クロノを探し始めたリュウ

30分後

リュウはシミュレーションルームにいた。今回はドラグーンも側にいる

『魔力を暴走させないようにゆっくり圧縮していった下さい』

「うおおお…」

両手に魔力を溜めながらゆっくり圧縮するリュウ

「ふぬぬ…」

しかし…

「どわぁー！」

魔力を上手く圧縮出来ず暴発してしまう

「チクシヨウ…」

『少しずつやっていきましょう』

「おうよ」

そして…1時間後

圧縮しきれずに暴発する事6回

圧縮したが形を留められずに暴発する事8回

「できた…?」

『若干歪んでますが大丈夫でしょう』

そこにはリュウの魔力光が更に深い色になった真つ黒な球体があった

「どうやって使うんだ?」

『口から摂取するしか無いでしょう』

「食つのか…?コレを?」

どう見ても体に悪そうな色をしている

『ゲテモノは食べたら美味しいと言つではありませんか』

「ゲテモノ言つな!」

どっからどう見てもゲテモノである

「まあ…後何個か作ってから試すか」

再び作業に取り掛かるうとしたら

『リュウ！もうすぐ次の次元世界に着く！こっちに来てくれ！』

クロノから通信が入った

「うわっ！クロノか…りょーかいつと」

『仕方ありません、続きは今度にしましょう』

「ああ、先にクロノんところ行かないとな」

やっと出来た1つをドラグリーンに収納してクロノの所へ向かったり
ユウ

「クロノ！」

「リュウか」

クロノの所へ来たときには既にエイミィとリンディも来ていた

「んで？次元世界に着いたって？」

「いや、正確にはもうすぐだ」

クロノとリュウが話していると

「艦長！目的の次元世界では既に戦闘が開始されている模様です」

「中心となっているのロストロギアはAクラス、動作不安定ですが
無差別攻撃の特性を見せています」

乗組員からの報告が

モニターには強大な魔力を持つ2人の少女が戦っている

「次元干渉型の禁忌物質：回収を急がないといけないわね、クロノ・ハラオウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定は出来てます。命令があれば何時でも！」

報告を聞いたリンディはクロノに向き直り命令を下す

「それじゃクロノ、これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、両名からの事情聴取を！」

「了解です！艦長」

転送ポートに向かうクロノ、それを見送る3人

「頑張つてね」

「気をつけてね」

ハンカチを振りながら見送るリンディと手を振って見送るエイミィ、更に

「頑張れよ」

リュウも声をかけた

「はい…行ってきます…」

苦笑いで返し転移したクロノ

2人の少女が向かい合って会話をしている

「だけど…譲れないから…」

「Device form」

「私は…フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

「Device mode」

「私が勝つたら…ただの甘ったれた子供じゃないって分かったら…
お話…聞いてくれる？」

会話が終わり…2人が接近し…

「ハアアア！」

2人の魔導師が激突する瞬間

魔導師達の間魔法陣が浮かび上がり

「ストップだ！」

少女達の間に入りデバイスと手で攻撃を止めるクロノ

「え…」

「ここでの戦闘行動は危険すぎる！」

「あ…」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

2人の間に立ち話しかける
それを見ながらリュウが

「あゝ…黒い服着た方が大人しくしなさそうだな…俺も準備しとくか」

『リュウが行っても飛行魔法はまだ使えないのでは？』

魔力量がかなり低いいためバリアジャケットや飛行魔法などの常時魔力消費型は使用出来ないリュウ

「シールドの上に立ちや平気だ」

『攻撃を防ぐ為の物を攻撃の為の足場にするとは…』

「ムチャクチャだね…リュウ君…」

「ホントよね…」

リュウのムチャクチャな考えに呆れる2人と1体
その頃外では

「先ずは2人共武器を引くんだ、まだ戦闘行動を続けると言っのな

ら…っ！？」

「魔力弾！？クロノっ！」

クロノが2人を地上に降ろし話をしていると上空から魔力弾が飛来、思わずリュウが叫ぶ

「フェイト！撤退するよ！離れて！」

狼が魔力弾を飛ばし、黒い服を着た魔導士の撤退を援護

「くっ…」

魔導士がロストロギアに手を伸ばした時

「ああっ…！」

クロノが魔力弾で牽制をし

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

狼が墜ちた魔導士を背に受け止めたが
クロノが追撃をしようとする

「ダメ！」

「えっ？」

「やめて！撃たないで！」

白い服を着た魔導士が庇う

「逃げるよ！フェイト！」

「はあ…っ」狼が飛行魔法で逃げ去っていった

アースラ内

「戦闘行動は停止、搜索者の一方は逃走！」

「追跡は？」

「多重転移で逃走、追いきれませんね…」

「そう…」

どうやら逃げ切られた模様

「ま、戦闘行動の迅速な停止、ロストログアの回収も出来たからよしとしましょう。詳しい事情も聞けそうだし」

「話して俺は参加すんの？」

「いえ、リュウ君はあくまで協力者って立場だから、別にいいわよ」

「んじゃ、俺はシミュレーションルームにいるから、何かあったら通信してくれ」

「はいはい」

管制室を去っていったリュウ

どうやら再び魔力球の作成に取り掛かるようだ

『リュウ！集中しないと…』

「あ…」

魔力が暴走

「だあぁっ！」

魔力波に吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる

「ぐえっ…」

『リュウ…大丈夫ですか？』

「何とかな…しかし何なんだ？」

『おそらくさっきの魔導士の声かと』

「ったくよ…」

ため息を吐きながら魔力圧縮を続けるリュウ

「むむむむ…」

10・20分ぐらいたっただろうか
魔力球が2個程出来た時

『リュウ、君も挨拶をしないとの方がいいだろう。艦長室に来てくれ』

クロノから通信が入った

「え？」

『だからリュウ！集中を途切らせたら…』

「ぐふっ！」

再び魔力暴走が

『…君は何をしているんだ？』

「な…何でもねえ…艦長室だな…？」

『あ、ああ…早めにな』

「おう…」

打撲をした体を起こし荷物を纏めるリュウ

「んじゃ、さつさと行きますか」

出来た魔力球をドラグーンの中に収納し艦長室へ向かうリュウだった

〈艦長室〉

リンディ、クロノ、白い服の魔導士、金髪の少年がいた

「少し待っていてくれ、事情があって管理局員では無いが協力者がいるんだ。」

「あ、はい、分かりました」

「少し変わった子だけどいい子だから、お願いね」

「…？子供何ですか？」

「ああ、君らより少し年上といった所だろう」

「へえ」

しばらく話していると

「ちーっす、クロノ、来たぞ」

リュウが部屋に入ってくる

「ああ、なのは、ユーノ、さっき話してたリュウだ」

「リュウ君ですか…？私高町なのはって言います」

「おお、クロノが言ってた魔導士か、リュウだ、よろしく」

「はい！」

笑顔で返すのは

「ユーノ・スクライアです」

「おう、よろしくな！」

出会いは好印象だったようだ

「で、さっき話した通り今夜は家でゆっくり考えて下さいね」

「送って行こう、元の場所でもいいね？」

「あ…はい…」

なのは達をクロノが送った後

「リンディ、アンタ正直に言えばいいのによ」

「何の事かしら？」

「またまたしらばつくて、なのはの魔力はロストログアの封印、黒衣の魔導士との戦い、両方に使えるからな」

「…バレてたみたいね」

「そりゃあな、まあいいけどさ、あまり無茶はさせんなよな？」

「勿論よ」

すれ違い様に笑い合う2人、少し黒いぞ…

「モニタールーム」

リュウとクロノ、エイミィがさっきのデータを見ていた

「凄いや！どっちもAAAクラスの魔導士だよ！」

「ああ…」

「こっちの白い服の子はクロノ君の好みっぽい可愛い子だし！」

「エイミィ！そんな事はどうでもいいんだよ！」

「ほう…クロノはああいうのが好みなのか…」

笑みを浮かべるリュウ

「リュウ！」

「ハハハ！スマンスマン」

からかわれて声を荒げるクロノと笑うリュウ

「魔力の平均値を見てもこの子で127万、黒い服の子で143万、最大発揮時にはその3倍以上！魔力だけならクロノ君を上回っちゃつてるよ！」

エイミィが興奮したように告げ

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない、状況に応じた応用力と的確に使える判断力だろ」

「確かにね！上手くやればリュウ君なんか普段は1万にも達して無いのにクロノ君と同等に戦っちゃったもんね」

クロノが反論すると実例があるため納得するエイミィ

「俺って普段そんなに低いのかよ…」

自分の魔力の低さに落ち込むリュウと

「リュウは特別だろう…」

何気に正論な事を言うクロノ

「あ！艦長」

そこへリンディがやってきた

「ん？ああ、2人のデータね」

「はい」

「魔力値がすげえぞ」

リュウとクロノが返す

「確かに…凄い子達ね」

「これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれれば…」

「暴走は必須だな」

「この子…なのはさんとユーノ君の集める理由は分かったけど…」

「黒衣の魔導士は何でかねえ」

黒衣の魔導士の目的について話し合う4人

「随分と必死な様子だった…何か余程強い目的があるのか…」

「案外誰かに頼まれた、とかだったりしてな」

今リュウがサラッと正解言いました

「目的…ね…」

モニターには魔導士がロストロギアの影響で怪物となったモノを倒している姿が

「随分と小さい子ね…普通に育っていればまだ母親に甘えていた年頃でしょうに…」

「クロノもまだ小さいぞ？」

「背の事は言うな！」

モニターを見つめるリンディの後ろでじゃれあっているリュウとクロノだった

アースラのモニタールームにはリンディ、クロノ、エイミィ、リュウの姿が

ユーノと通信を行っているようだ

「…だから、僕もなのはもそちらに協力させて頂きたいと」

「協力ねえ…」

「僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収、あの子達との戦闘、どちらにしてもそちらとしては便利に使えるはずです」

「んゝなかなか考えているようですね、まあそれならいいでしょう」

ユーノの考えを聞いて許可を出すリンディと

「か、母さ…艦長！」

それに反応するクロノ

「まあいいじゃねえか」

宥めるリュウ

「こちらとしても、切り札は温存しておきたいもの。ね？クロノ執務官？」

「…はい」

言いくるめられるクロノ

「なあ？クロノ執務官？」

それを茶化すリュウ

「うるさい！」

怒鳴るクロノ

「条件があります。2人共、身柄を一時時空管理局の預かりとすること、それから指示を必ず守ること。よくって？」

「分かりました」

リンディが提出した条件を承認したユーノ、通信を切ろうとして

「ところでさ…」

「どうした？リユウ」

「あのイタチは…どちらさま？」

「プッ…」

ユーノのフレット形態を知らないリユウがイタチと勘違いしたため、吹き出したクロノ

「イ…イタチ…」

イタチと言われ地味にへこむユーノ

「あはは！あの子はユーノ君だよ！」

「ユーノ！？あのイタチが！？」

「イタチじゃない！フェレットだ！それにコレは変身魔法で…って笑うな！クロノ！」

イタチと連呼するリュウに若干キレていたユーノがクロノにキレた

「そ…そうか…スマンかったな…ユーノ」

「う、うん…」

まだへこんでるユーノ

「では…これで…」

通信が切れて

「何か悪いことしたな…」

「いや、笑えたよ」

少し反省するリュウとまだ少し笑ってるクロノだった

「そっぴや、あの2人は何時からこっち来るんだ？」

「今夜からだよ」

「そっか、じゃあ来たら通信頼む。またシミュレーションルームに行ってるから」

時間を聞き、まだ時間があると知ったらシミュレーションルームに行くことにしたリュウ

「分かった…けど、君はシミュレーションルームで何をしているんだ？頻繁に行っているみたいだが」

疑問に思ったクロノが質問する

「もし俺が手伝う事になったら教えてやるよ

「…何なんだ？」

それを受け流すリュウと腑に落ちない表情をするクロノなのであった

（会議室）

会議室でリンディが乗組員達に説明をしていた

「…と言うわけで、本日0時を持って本艦全クルーの任務はロストロギア：ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件においては特例として、問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導士である、こちら」

ユーノを示し

「はい、ユーノ・スクライアです！」

「それから、彼の協力者である現地の魔導士さん」

「高町なのはです！」

若干緊張気味で挨拶する2人

「後、次元漂流者である」

「リュウだ、殆ど顔見知りだが改めてよろしく」

「以上、3名が臨時局員の扱いで事態に当たってください」

「「よろしく願います」」

声を揃える2人、リュウも合わせろよ…

リンディが微笑みながら見守り、なのはがクロノに笑いかけると

「えへへ…」

「うあっ！？あ…」

顔を赤くしてそっぽを向くクロノとそれを睨むユーノ

「な〜に顔赤くしてんだ？クロノは〜」

「う、うるさい！」

それをからかうリュウと、どもるクロノだった

ジュエルシードの反応があり、リュウが願い出た為リュウ、なのは、ユーノの3人に対応する事に

ギャオオオ！

どうやら鳥と融合したらしく、巨大な鳥になっていた

「いた！ユーノ君！」

「うん！チェーンバイン……！？」

ユーノがバインドを掛けようとした瞬間

「ダラアアア！」

ルフアルを装着し、鳥に特攻をかますリュウ

「り、リュウ！？」

「リュウ君！」

なのはとユーノの呼びかけも聞こえていない様子、鳥に攻撃をかわされるが…

「ドラグーン！」

『Absolute defense』

自分の足元にシールドを展開し

「ヒャッハア！」

シールドを足場に跳躍、そして

「オラア！」

ギャオオオ！

鳥を怯ませ

「なのはあ！ユーノオ！」

2人に合図を

「…へ？あ、チェーンバインド！」

ギャオオオ！

啞然としていたユーノが意識を戻しバインドで鳥を捕らえる

「なのは！」

「うん！」

『Sealing mode・Set up・』

レイジングハートの形状が変わり封印の準備が整う

『Stand by Ready・』

「リリカル、マジカル、ジュエルシード、シリアル？、封印！」

『Sealing!』

ギャオオオ…

怪物からジュエルシードが取り出され、レイジングハートの中に収納された

「状況終了です。ジュエルシード、ナンバー？、無事確保なのはちゃん、ユーノ君、リュウ、お疲れ様」

「はい」

「おう」

通信に返事をするリュウとなのは

「それにしても…リュウ…」

「ん？どした？」

「君って…ムチャクチャだね…」

「そうか？」

「にやはは…」

リュウに呆れるユーノと苦笑いのなのはであった

「うーん！2人共なかなか優秀だね。このままウチに欲しいくらいかも。」

リンディが感想を言い

「やっぱりリュウ君はムチャクチャだね…」

エイミイがリュウの感想を言っていた

「10日後」

「残り6つ…見つからないわねえ」

「確かに…案外全部固まっていたりして」

リンデイが呟きリュウが頷く

はい、またリュウ正解言いました

数十分後

艦内に緊急放送が

『Emergency! 搜索区域の海上にて大型の魔力反応を感知
』!』

「来やがったか!」

デバイスを掴み準備するリュウ

「な、何て事してんのあの子達!」

ジュエルシードの反応があった区域に儀式魔法を打ち込み、無理やりジュエルシードを発動させているフェイトの姿が

「あの儀式魔法すげえな」

「言ってる場合か！」

呑気に感想を言うリュウと突っこむクロノであった

海上での決戦

儀式魔法の放たれる数十分前

リュウが食堂を通りかかると

「ん？なのは？ユーノ？」

なのはとユーノが食事をしながら話していた

「あ、リュウ！なのはと家族の事とか話してたんだけど…」

「そういえばリュウ君の家族は？次元漂流者って聞いたけど…」

少し躊躇いがちに聞いてくるなのは

「んゝ家族…ねえ…」

「あの、言いづらかったらいいんだけど…」

悩むリュウに何かを推測して遠慮するのはだが

「いや、別にいいんだけどよ…話すと長えからさ…ユーノは？」

「そっか…僕は元々1人だったから」

「1人？俺と一緒にか」

「え？そうなんだ…僕は両親はいなかったけど部族のみんなに育てもらったから…だから、スクライアの一族みんなが僕の家族だ」

「そうか…」

「リュウ君も、色々片付いたらお話しない？」

「おう、いいぜ。なら、俺の身の上話もその時にしてやるよ」

事件が終わったらユーノ、なのはと話をする事を約束したリュウ

「だから、さつさとこの件を終わらせようぜ？」

「うん」

『Emergency! Emergency!』

3人で話していた時にさっきの放送が入り、フェイトが儀式魔法を
発動させていた

管制室ではリンディ、クロノ、エイミィがモニターを見ており

「出撃か!？」

管制室に走り込んできて待機状態のルファルとデュランダルを嵌め
始めるリュウ

「フェイトちゃん!」

続いてなのはが管制室に走り込んでくる

「あの! 私急いで現場に…」

モニターに映るフェイトを見たなのはが慌てるが

「いや、その必要は無いよ、放っておけばあの子は自滅する」

「え…」

「確かにな…それが一番こっちの消耗が無い…か」

クロノが現場に行かないことを納得するリュウ

「その通り、仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも…！」

なのはが反論しようとするが

「今のうちに捕獲の準備を！」

「了解！」

クロノがそれを無視して局員に指令を出す

「私達は…常に最善の選択をしなければならないの…残酷に見えるかもしれないけど…」

「でも…」

リンディの言葉に反論しようとするが言葉が見つからないのは

その時…

『なのは！行つて！』

ユーノからなのはに念話が入る

『僕が…ゲートを開くから…行つてあの子を…！』

『でもユーノ君！私がフェイトちゃんと話をしたいのはユーノ君とは…』

ユーノからの提案に自分の考えにユーノを巻き込めないと考えるのはが反対しようとしたが

『関係無いかもしれない…だけど僕は、なのはが困つてるなら…力になりたいんだ…なのはが僕に…そうしてくれたみたいに…』

ユーノは、なのはも関係無い自分を助けてくれたのだから自分も力になりたいと伝える

「君は！」

ユーノがゲートを開き、それにいち早く気づいたクロノ

ゲートに走るなのはとユーノがすれ違い様に笑い合う

「あつ！」

「ああ！」

リンディとクロノが止めようとするが

「ごめんなさい！高町なのは！指示を無視して勝手な行動を取ります！」

「あの子の結界内へ！転送！」

ユーノが術式を組み、転移魔法を発動させる

「まったく…あのバカ…」

「バカな！何やってるんだ！君達は！」

呆れるリュウと憤慨するクロノ

「ごめんなさい…命令無視は後でちゃんと謝ります！けど…ほっとけないの！」

「うつ…」

なのはの訴えに気を削がれるクロノ

「あの子きつと…1人ぼつちなの！1人の寂しさは…私少しだけと分かるから！」

なのはの言葉を聞いたリュウが

「しゃあねえ、ジュエルシールドがどうなるか分からんし俺も外で待機しとく。何かあったらD-ダイブでどうにか出来るからな」

「…分かった。頼むぞ…リュウ」

「任せとけて」

なのはとの会話の後連れ戻す事は出来ないと判断したリュウが自分も行くことを提案し、クロノがゲートを開いた

「じゃあ、指示はよろしく！」

軽く手を挙げ転移していったリュウだった

一方外では

「フェイトの邪魔をするなああ！」

「違う！僕達は…君達と戦いに来たんじゃない！」

アルフの攻撃をユーノがプロテクションで防ぐ

「まずはジュエルシールドを停止させないとマズい事になる！」

アルフを避けて暴走の全体を見渡せる場所へ行くユーノ

「だから今は、封印のサポートを！」

巨大な魔法陣を展開し、暴走して起きている竜巻をバインドで縛る

「フェイトちゃん！手伝って…一緒にジュエルシールドを止めよう！」

なのはがフェイトに魔力供給をして回復させた

『Power charge』

『Supplying complete』

フェイトに供給したお陰でバルディッシュが再起動を

ユーノが暴走魔力の余波に飛ばされそうな時にアルフの手伝いが入る

「2人でせーので一気に封印！」

『Shooting mode』

レイジングハートの形状を変化させるなのは

『Sealing from Setup』

迷うフェイトを後押しするかのようにな自分から形状を変化させるバルディッシュ

「バルディッシュ……」

何も言わずにただコアを光らせるバルディッシュ

「ディバインバスターフルパワー、行けるね？」

『All right・my master』

2人が魔法陣を展開し魔力をチャージし始める

膨大な量の魔力が辺りを渦巻き…

「せーの！」

なのはの合図で

「サンダー！」

フェイトが魔力を圧縮する

「デイベイン！」

なのはが魔力を一点に集める

「レイジ！」

圧縮した魔力を雷に変換させ広域に放つフェイト

「バスター！」

集中させた魔力を砲撃として放つなのは

2人の魔法が暴走区域に直撃し、巨大な魔力振動が起き

「ジュエルシード！6個全ての封印を確認しました」

「な、何てデタラメな…」

モニターを見ていたエイミィが報告し、クロノが半ば呆れた感じで言う

「なのは！ご苦労さん」

「リュウ君！来てくれたんだ！」

「っ！」

なのはに手を挙げて近寄るリュウに警戒するフェイト

「大丈夫だよ、フェイトちゃん！リュウ君は私の友達だから！」

「…友達」

「おう、友達だが…お前さんになるか？」

初見の相手にも自然体で接することができる…流石リュウ…

「私…も…？」

「ああ、俺はアンタに危害を加える気は無いしな」

「……私はフェイト、貴方は？」

「俺はリュウ、よろしくな？」

「…うん」

今までのなのはとの触れ合いやリュウの裏の無い性格に触れて大分
柔らかな性格になっているフェイト

「リュウ君ずるい！まだ私も友達になってないのに！」

「そうだったのか？」

これぞリュウのレアスキル！（結構真面目に検討中）

2人がじゃれあい、1人が困惑気味の中だった

「魔力！？ドラグーン！コイツは！？」

リュウが何処からか飛来する魔法に反応

『戦闘区域外からの次元干渉魔力攻撃ですね…リュウ！フェイトさんとアースラに直撃します！』

「んだとお！？」

ドラグーンからの報告を聞いたリュウが足場にしていたシールドを蹴る

「か…母さ…っ！」

「危ねえ！」

上空を見て何かに怯えるように呟いていたフェイトを突き飛ばし

「なのは！フェイトを頼んだ！」

「リュウ君！？」

フェイトは魔法から逃れたが、リュウが攻撃魔法に直撃した

「があああああ！？」

雷に撃たれ絶叫するリュウ

「リュウ君！」

「り、リュウ…？リュウ！？」

今さっき友達となったリュウが雷に撃たれ困惑していたが、状況を理解した瞬間リュウの名前を叫ぶフェイト

リュウが魔法に攻撃されている時、アルフはフェイトの母親の攻撃と分かりジュエルシードを確保しようとするが

「させない！」

クロノに阻まれる

「邪魔あ！」

「！」

「するなあ！」

しかしクロノを魔力弾で吹き飛ばしジュエルシードを回収しようとするが

「！？」

クロノが吹き飛び際ににジュエルシールドを3つかすめ取っていた

「このおおお！」

怒りのままに魔力弾をクロノに叩きつけたアルフ

「逃げるよ！フェイト！」

「う、うん…でも…リュウが…」

ジュエルシールド3つを回収したアルフはフェイトを連れて離脱
フェイトはリュウを心配して躊躇いがちに離れていった

「リュウ！大丈夫！？」

「リュウ君！」

雷に撃たれたリュウを心配してユーノとなのはが近寄るが

「カハッ！」

飛行魔法が使えずシールドも張る気力が無いリュウは海に落ちていく

「リュウ！」

クロノが手を伸ばすが届くこともなく落ちていった

「なのは！ユーノ！君達は先にアースラに戻っていてくれ！僕はリュウを助ける」

「僕達も行く！」

自分が助けるから先に帰還しろと言うクロノに反発するユーノ

「君達もさっきので大分魔力を消耗しているはずだ！いいから先にもどるんだ！」

「でも！」

「エイミイ！頼む！」

「はいよ！」

クロノがエイミイに呼びかけた瞬間、ユーノとなのはの足下に魔法陣が展開、強制転移させられた

アースラではなのはとユーノがリンディに懇願していた

「お願いです！私達もリュウ君を助けたいんです！」

「駄目よ、あなた達はさっきまで魔法を使用していたでしょ？それになのはさんは全力で砲撃魔法を放ったばかりなんだから」

「う…」

リンディに論破され返す言葉が無くなるなのは

「とにかく、今はクロノとリュウ君を信じなさい…分かった？」

「…はい」

2人が落ち込みながら管制室を去っていきエイミィがリンディに話しかける

「艦長…大丈夫ですよね？」

「大丈夫でしょ…あのリュウ君だもの」

「…そうですね」

流石に今回ばかりはこの2人も心配みただ

く海中く

「あ…このままもつかい死ぬんかな…」

全身に力が入らずゆっくりと海底に向かって行くリュウ

「死ぬ…か…」

今度はマトモな体に生まれ変わるといいな…」

自嘲気味に笑うリュウにドラグーンが話しかける

『何を言っているんですか？こんな所で死んでどうするんですか』

「だけどよ…力は入らねえし…D・ダイブなんて出来そうにねえよ」

『だから私がいるのです』

「はあ？」

『言いましたよ？私は貴方と融合するために造られた、と』

先日医務室で話された内容を思い出すリュウ

「もう…出来んのか？」

『魔力球の作成で緻密な魔力コントロールも貴方は出来るようになりました。D - ダイク時でも同じようにすればいいんです』

言っておきますが魔力球はこの為だけに作った訳ではありませんので

「なら…D - …ダイブ！」

リュウの足下に魔法陣が現れ、黒かった髪は真っ白に、両腕両足は龍のような形状になり、全身から赤い魔力を放っている。そして変わったのが、背中のバーニアがあつた場所に蝙蝠を思わせる巨大な翼が生えていた。

「翼…？」

『ええ、私と融合する事でより、アジーンに近い姿になることが出来ます』

「そうか…まあいい、さっさと帰るぜ？」

『はい』

翼をはためかせ具合を確認したリュウは足下にシールドを展開し、足場を確保した後全力で跳躍、かなりのスピードで海面に向かって

行った

クロノが海中に沈んだリュウを助けようとしていた

「な、何だ！？海中から魔力反応が…！？」

突然海中から強大な魔力反応が感知された

「ヒヤッハアア！」

海中からD・ダイブ状態のリュウが飛び出してきた。

「り、リュウ！？にしては…姿が…」

その姿はクロノが知っているD・ダイブに酷似していたが、背中に翼が生えているという違いがあった

「ん？ああ、クロノか」

「そうだが…大丈夫なのか？」

「おう！もう無理だわ！」

「は？」

そう言い放った直後にD・ダイブが解け再び落下を始めたリュウ

「おっと！…まったく…無茶をする」

たがリュウが海に落ちる前に受け止めたクロノが転移魔法でアース

ラに送ったのだった

海上での決戦（後書き）

マジでリユウにレアスキル作ろうか考え中…

そろそろ無印のクライマックスですねゝまだまだ続きますので、末
永くお付き合い下さい

感想まってまゝす！

束の間の休息（前編）

アースラ管制室

「今から帰還します」

「はいはい」

「エイミィ？艦長は？」

通信を入れたら返答がエイミィからだったので疑問に思うクロノ

「艦長はなのはちゃん達にお説教だよ」

「ああ…そうだったな、リュウは？」

「リュウ君なら医務室で寝てるよ」

「分かった、じゃあ僕も帰還したら艦長の所へ行く事にするよ」

通信を切った後転移していったクロノ

医務室ではリュウが寝ていた…が

「ふわ～あ…え～と…？」

『D-ダイブで海上に出ましたが、力尽きて気絶したんですよ』

寝起きで覚醒してないことと記憶が朧気だったことからしばらくボ
ーっとしていたが

「ああ！フェイトは？俺は結局どうやって助かったんだ？」

『フェイトさんは無事戦闘区域外に離脱、貴方はクロノ執務官が救
助してくれましたよ』

「そうか…クロノは何処にいる？礼を言っとかなきゃな」

待機状態のデバイスを嵌め、医務室を出て行ったリュウ
回復力も龍の遺伝子で強化されているようだ

モニタールームにはなのは、ユーノ、クロノ、リンディ、エイミイ
がフェイトの母親と思われる人物、プレシア・テストロッサのデー
タを見ていた

「クロノ…いるか？」

「リュウ！？もう動けるのか！？」

「ああ、逆に動かないと体が固まってるんだ」

「何て回復力だ…」

リュウの回復力に半ば呆れた表情のクロノ

「そっぴゃ助けてくれたんだってな？ありがとよ」

「構わないよ、助けるのが普通だ」

「それでもだ」

クロノに礼を言ったりリュウ

「リュウ君…大丈夫？」

「なのはか、平気だぜ？」

「リュウ君…ありがとう…フェイトちゃんを守ってくれて」

リュウを気遣った後、フェイトを庇った事にお礼を言うのは

「別にいいって、やりたくてやったただだからよ」

「…うん！」

「僕からお礼を言わせてもらっよ」

「別にいいのによ…」

なのは、ユーノからお礼を言われ若干照れるリュウ

「そうだ、さっきなのはさんに艦を降りる許可を出したんだけど、リュウ君も散歩ぐらいならいいわよ？」

「そうか？じゃあお言葉に甘えて…」

「ただし！今日は絶対安静ね？」

「…はい」

無茶をしたリュウが怒られる

「だったら！私のお家に来ない？アリスちゃんとすずかちゃんにも紹介したいし！」

「うゝん…それは今度でいいって、今は家族水入らずで、友達同士で思いっきり楽しんで来いよ！」

軽くなのはの背中を叩くリュウ

「…うん！ありがとう！」

「じゃあ、俺は部屋に戻るわ、じゃあな」

後ろ手に振りながら部屋に戻って行くリュウだった
宛てられた部屋でリュウはドラグーンと話していた

「何かさあ…」

『どうしました？』

「最近まともに戦って無いのに怪我してる…」

『先程フェイトさんを庇った事以外には？』

「魔力球の製作」

『たったそれだけじゃないですか』

「体を思いきり動かしたい…」

クロノとの模擬戦も不完全燃焼で終わったためしばらく戦闘を行っていないリュウであった

『そう言いつつも魔力球は製作してますね』

「作れる時に作つとかなきゃな」

『あつて困ることはありませんしね』

会話しつつも黙々と魔力球を作り続けるリュウ

「こんぐらいにしとくか」

『作っている時に人が来たら危ないですしね』

リュウが作成を止めて数分後

「リュウ？いる？」

「おう、ユーノか」

ユーノが部屋を訪ねてきた

「どうした？」

「もう少ししたらなのはがリンディさんと一旦家に行くからね、そ

の前に挨拶でも、と思って」

「別にいいのによ」

『リュウと違って礼儀正しいですね』

「んだと？コラ」

『じゃあ貴方は挨拶に行ったりしますか？』

「……………いや」

『でしょう？』

「チクシヨウ……」

「あはは！」

そんな感じで話をしていると

「そついえば前から思ってたんだけど」

「どうした？」

「リュウの側にいると体が軽いつていうか……心地良いつていうか……気分がよくなるんだけど……何で？」

「……さあ？」

『多分リュウが常に魔力を放出しているからですね、ユーノさんは

それを供給されていると認識しているから体が軽いと感じるのです』

「つまり、リユウは周りに魔力供給を常に行ってる？」

『はい』

「随分特殊な体質だね……」

「そっぴゃそんなんあつたな」

リユウ自身も忘れていた体質、まあ普通にしていれば気付かないし

「何だかりユウって本当に不思議だよね」

「そうか？」

「うん、初めて会った時から砕けた性格だし、簡単にフェイトと話し合ってるし、接近戦は凄かったのにクロノに話を聞いたらかなりショボいし」

「……褒められてんの？ 貶されてんの？」

多分貶してる

「これでも褒めてるんだよ？」

「ホントかよ？」

「うん、そろそろ時間だし行くね？」

「ああ、またな？」

「次の戦いでは頼りにしてるよ？」

「ハハッ！任せとけ」

ユーノが笑いながら部屋を去っていったのだった

なのは達が家に帰った次の日

「んじゃ、リンディに伝えて散歩でも行こか？ドラグーン」

『そうですね、偶には息抜きも必要でしょう』

その後管制室でリンディの許可を得て外に出たリュウ

「んじゃ何処行くかな…」

『この辺りはまったく知りませんし、図書館などで情報収集は？』

「そうすつか」

人に道を聞いたり看板を頼りに図書館を目指すことに

原作知ってる方はお分かりですか？

フラグ立ちまゝす

図書館に着いたリュウ

「ふいーやつと着いたか」

『人目がありますし、これからは念話で話します』

「了解、じゃあこちら辺の情報収集でもしますか」

本を探すために本棚の間を通っていると

「あと……ちよつと……」

「ん？」

車椅子に乗っている少女が本を取ろうとして腕を伸ばしていた

「ほれ、コイツか？」

普通に本を取って渡すリュウ

「え？あ、ありがとうございます……」

「無理すんなよ？」

「は、はあ……」

やっぱりいきなり自然体で接されると人は驚くものなのか

「んじゃ、俺も本探すから」

リュウが本探しを再開しようとする

「あの、ちょっといいですか？」

少女から声をかけられる

「ん？まだ何か取りたい本があんのか？」

「いや、私この図書館によく来てるんでどんな本が何処にあるかって大体分かるんですけど……」

「マジ？じゃあここら辺の地理とかの本って何処？」

「あそこらへんですけど……ここら辺の人じゃないんですか？」

「ああ、遠くから来ててな、今は知り合いの家で世話になってるんだ」

「だったら……私が案内しましょうか？」

少女から思わぬ提案

「そりゃあ……ありがたいが……いいのか？」

「はい！お礼もしたいですし！」

「んじゃ頼むわ」

こうして1日を少女と過ごす事にしたリュウだった

少女に案内してもらって数時間

「そついやリュウ兄ちゃんって何処から来たん？」

「んゝかなり遠い所…だな」

「遠いつて…外国とか？」

「まあ…外国だな」

外国つちやあ外国だな…

「そつなんか…両親は？」

「いないぜ？」

「え？そ、そうだったんか…イヤな事聞いちゃったな…」

「別にいいって記憶も無いしな（いるかどうかもう怪しいもんだし）」

言うなら研究員だな

「それよりはやては？」

「ウチもおらへんのよ…」

「あ…そつか…悪いな…」

「いや、別にええんよ…」

暗い雰囲気になってしまったがリュウが

「じゃあ、これから何するよ?」

無理やり空気を変えた（本人は何も考えておりませぬ）

「ウチに来おへん?」

「はやてんちに?ん?…」

「嫌なんか…?」

悩むリユウに不安がるはやて

「いや、早めに帰ってこいって言われたからな、まだ平気だろ。行こうぜ?」

「うん!」

はやての家に行くことに

「へえ、でつかいな、一人で暮らしてんの?」

「そうなんよ」

「少し寂しいよな」

「うん…」

だからお前は少しぐらい気遣えや

「まあ今は何かして遊ぼうぜ？」

「そつやな！」

暗い雰囲気を吹っ飛ばすように遊んだ2人

「ん？何だ？この本……」

はやての部屋に来た2人、机の上にある鎖の着いた本に気づくりユウ

「それ？ウチが生まれた時からあるんよ」

「へえゝまあいいか、そういや……そろそろ帰んなきゃな……」

「もう帰るん……？」

寂しそうなはやての表情に躊躇いがちに

「悪いな……また来るからさ……な？」

「……うん」

「んじゃ、御守りにコレやるよ、じゃあなゝ」

「あ！兄ちゃん……」

自分の魔力の塊を置いて帰ったりユウ

お前……暴発したらどうすんねん……

はやての家から帰る途中

『大丈夫だったんですか？魔力球なんか置いてきて…』

「あれは抑えを掛けてあるからな、多少の事じゃ何も起きない」

『抑え…ですか…』

「ああ、ん？あれは…」

リュウが気付いたのは怪我をしている大きな犬

「なあ、コイツって…フェイトの…」

『使い魔…ですね』

「やっぱり？どうすっかな…」

とりあえずかがみこんで傷を診るリュウ

「ん〜と…それ程深くないな…」

『誰にやられたんでしょうか…』

「うあ…あ…」

「意識が戻ったか？大丈夫か？」

「ア…アンタは…確か…フェイトを…助けて…くれた奴…だね…」

ドラグーンと相談しているとアルフの意識が戻ったようだ

「大丈夫か？何があつた？」

「フ…フェイト…が…ああ…」

「おい！？どうしたんだよ…」

再び気絶したアルフに呼び掛けていると

「ちよつと！アンタ何してんのよ！」

「はい？俺か？」

振り向いたら勝ち気そうな少女が腰に手をあて仁王立ちしていた

「何弱いものイジメしてんのよ！」

「え？いや、はい？」

身に覚えの無い疑いを掛けられ困惑するリュウ

「自分より弱い生き物をイジメるなんてサイツター！」

どうやらアルフを苛めたと思われているようだ

「いや、別にコイツを苛めてなんかねーよ」

「じゃあ何でそんな怪我してんのよ！」

「俺も知らねーっての…」

「お嬢様」

「何？ 鮫島」

「この怪我はおそらく数時間前に出来たものですから、この少年がずっとここに居たとは考えにくいかと…」

「ほれみる」

少女の言葉に反論していると少女の執事だろうか、初老の男性が怪我の具合を説明する

「う…悪かったわね…」

「まあ…コイツのことを考えたわけだし…別にいいって」

「そう…この子…どうするの？」

少女と和解しアルフについて聞いてきた

「連れて行くにも今居候だからなあ…」

「じゃあこっちで引き取っていい？」

「……………（どう思う？ ドラグーン）」

（ ）の中は念話と思ってね

『（ ……負傷しているようですし、構わないのでは？）（ ）』

「（引き取っても、どうなったか教えろって連絡先とか聞かれても面倒だしな）」

「ねえ？どうなの？」

ドラグーンと念話で相談していると急に黙り込んだので怪訝な様子で返事を催促してくる少女

「ああ、スマン。こっちは引き取れそうにないから頼めるか？」

「ええ、いいわよ。鮫島」

「はい、お嬢様」

初老の男性がアルフを丁寧に運んで行く

「じゃあ私も行くわね」

「あ、連絡先か住所教えてくれない？俺もソイツがどうなったか知りたいし」

「そうね…携帯持ってる？」

「悪いな、持ってないんだ」

「じゃあ、住所でいつか」

少女が戻ってきた男性に話しかけると男性が紙を渡してきた

「どうぞ、屋敷の住所で御座います」

「あ、これはどうもご丁寧に…」

男性の話し方や動作に畏まってしまつりゅう

「それじゃあ、じゃあね」

「おう、ソイツをよろしくな」

お互いに軽く手を振り離れていった

「じゃあ、そろそろ帰らないと怒られるな…」

『もう手遅れかもしれませんか』

気が付いたら既に夕方、これから転送ポートのある場所に向かった
ら日が暮れそうだ

「こりゃ…無理だな」

『諦めて説教ですね』

「……………チクシヨウ」

束の間の休息 (前編) (後書き)

少し長いんで前編、後編に分けました

楽しんでもらえれば幸いです
では、感想待ってまゝす

束の間の休息（後編）

あらすじ

前回休みを貰ったリュウは海鳴市を散策。そこで車椅子の少女はやてと出会い友達に、帰りに怪我をしたアルフを発見。その際に勝ち気そうな少女と出会う、ひとまずアルフをその少女に任せ急いでアースラへと帰還するのだった。そう。！リンディからの説教を逃れる為に…！

…なんかすいません

アースラの艦長室

「やっと終わった…」

艦長室からリュウがため息をつきながら出てきた

「30分ぐらいいいじゃんかよ…」

『戦場ではその30分が命取りです』

「やかましい…」

ずっと正座で話を聞いていた為疲れたようだ

「とりあえず…今日は寝る…」

『そうした方がいいでしょう』

「飯も…いいや…さっさと寝て明日はアルフンとこに行かなきゃな…」

おぼつかない足取りでフラフラと部屋に戻っていくリュウ

部屋に着いた時

「あ」

『どうしました?』

「アルフ預けた奴の名前聞いてねえ…」

『…忘れてましたね』

「…まあ…明日聞きやいいだろ」

かなり投げやりな事を言って倒れ込むように眠り込んだリュウだった

そして次の日

「ん〜と…ここ…か…?」

『随分と大きいですね』

渡してもらったメモを頼りに人に道を聞きながら辿り着いた

「そついや…執事とかいたしな…」

『かなりの資産家の娘、ということですね』

「何か誘拐とかされそうな響きだな…」

リュウ…フラグたてんなよ…

「これか？」

建物のでかさに気圧されながらもインターホンを押すリュウ

『はい』

「あ、昨日犬を発見した後連絡先を聞いた者ですが」

『ああ、昨日の』

声を聞くにもどうやら相手はあの執事らしい

「はい、犬の様子を見に来たんですが」

『もうすぐお嬢様もお帰りになさると思いますのでどうぞお入り下さい』

「どうもスンマセン」

門を開けて入るリュウ

『昨日保護した犬は庭の隅の檻の中で休ませております。かなり頑丈な犬でしたので命に別状はありませんでしたよ』

「ご親切にありがとうございます」

教えてもらった場所に行ってみると

「元気になったんか？」

「……………」

片手を挙げて挨拶するが返事はなくこちらを見続けるだけ

『アンタは…管理局の人間なんだろ？何でフェイトを庇ったんだい？』

『の中には念話と思ってね』

『何でって言われてもなあ…』

『あの時はリュウが何も考えずに突っ込んで行っただけですからね』

『そっぴやドラグーンはよく無事だったな』

『私の耐魔コーティングを舐めないで下さい』

『…お前って無駄に高性能だな』

『無駄とは何ですか無駄とは』

アルフそっちのけで話していると

『アンタ等…何しに来たんだい？』

『ああ…忘れてたな』

『……………』

呆れ顔のアルフ

『お前さんは一体何があったんだ？』

『その傷は魔法によるものようですが』

『…話したら…フェイトを助けてくれるって約束してくれるかい？』

『俺に出来る事は全てやろう』

疑問を投げかけてくるアルフに対して、真っ直ぐ目を見つめ応える
リュウ

『アンタがここにいるってことは管理局の連中も…』

『見てねえぞ？俺は休暇中だからな』

『…そうかい…分かった…話すよ…全ての元凶はプレシア・テスト
ロツサなんだ…』

『ふむ…じゃあ…フェイトは利用されてるだけで、この事件の首謀
者では無い…ってことか』

『ああ…そうなんだ』

『リュウ、どうやらなのはさんが近づいて来てるようですが』

『へ？なのは？何で？』

リュウが門の方を振り返ると

「何で…アンタがもういるの？」

「リュウ君！？どうしてここに？」

「なのはちゃんの知り合い？」

薄紫色の髪をした少女がなのはに尋ねる

「え〜と…」

「ああ、友達だよ」

「うん！そう！友達なの！」

リュウが出した助け舟を全力で肯定するのは

『全力だな…』

『仕方ないの！』

「へえ〜アンタがねえ」

「ああ、そついや自己紹介してなかったな、リュウだ。よろしく」

「アリサ・バニングスよ、よろしく」

「月村すずかです。よろしくね？」

「おつ」

名前を知らなかった少女2人とも自己紹介をし

「そついえば昨日の犬は？」

「元気になってるよ、ほら」

檻の前からどいて3人に見せる

「よかった！」

「おつきいね」

純粹に喜ぶ2人と

『何があつたんですか？アルフさん…』

念話でアルフに話しかけるのは

「あららら、元気無くなっちゃった」

後ろを向くアルフ

『なのは、彼女からは僕とリュウが話しておくから、アリサちゃん達と…』

『うん…』

なのは、アリサ、すずかの3人は屋敷へ向かっていき

リュウ、ユーノは留守番だった

『あのだ…ユーノ』

『何？リュウ』

『さっき話し聞いたからさ…二度も聞くのは…ちょっと…』

『え？』

その後クロノに見つかってて怒られたり、またリンディに説教の宣言をされたり、アルフがまた説明をすることになってうんざりしたり、と一悶着どころかなり揉めたけど、無事話しが終了しました。

『んじゃあユーノ、俺は行くわ』

『行くってどこに？』

『ちょっと予定があつてな、クロノ達には昨日よりは早く帰るって伝えといてくれ』

『分かったよ』

『後、これはアリサ達に、くわえとけ』

ユーノに伝言を伝え、メモをくわえさせて去っていったリュウ

『どこに行く気ですか？』

「はやてんとこ」

『ああ、昨日の少女ですね』

「そゆこと」

ドラグーンに応えながら走って行くリュウ
軽めに走ってますがバイクぐらいは出てんじゃねえかな

数十分後

はやての家の前に立つリュウの姿があった

「ふう…着いたか…」

『流石リュウ、あれだけの距離を数十分で完走してしまつとは』

「まあな、さて」

インターホンを押すリュウ

「……………」

『……………』

「出ないな…」

『出ませんね』

反応が無い八神家（はやての名字です）

「図書館か？」

『行ってみましょう』

図書館に行ってみると…

「…いねえ」

『いませんね』

「しょうがねえ、今日は帰るか」

『そうするのが賢明ですね、そろそろ日も暮れますし』

「…だな」

諦めてアースラに帰って行くリュウだった

主人公が何時でもフラグ立てを出来ると思うな！

場面が変わってここはアースラ、更にその内部の艦長室

「はあーやっと終わった…」

昨日よりも酷い様子で艦長室から出てきたリュウ

それもそのはず

帰ってきた時間は6時、帰って来いと言われた1時間以上早く帰ってきたリュウ、文句は無いだろ的な感じでリンディに言うがアルフの件で説教が

それでは一部始終をどうぞ

「よっしゃ！リンディ！これで文句ねえだろ？かなり早く帰ってきたんだ！」

「ええ、時間については問題無いわ」

「じゃあ、飯でも……」

食堂に行こうとしたが

「でもね、アルフさんの件で話があるのよ……？」

肩をガツと掴まれた

「あの…リンディさん？肩がものっそい痛いんですが…」

「さて、色々話しましょう？」

艦長室に引きずり込まれるリュウ

「うわあああ！助けてくれえええ！」

リュウの断末魔が聞こえた時、クロノは合掌していたらしい（エイ
ミイ談

6時から9時まで、3時間の間リュウは正座しっぱなしでした

そして現在

「うあああ……」

どっかのゾンビみたいな呻き声をあげて部屋を目指すリュウの姿が

「チ…チクシヨウ…せめて飯食ってからにしてくれよな…」

『大丈夫ですか？』

「無理だ…飯は明日の朝食えばいいだろ…今日も、もう寝る」

『そのほうがいいでしょう、真っ直ぐ歩けてませんから』

フラフラと歩いて部屋に帰って行くリュウであった

「最近…散々だ…」

次の日

なのはが早朝に走っている

「なのは!」

ユーノが示す先には狼の姿のアルフがなのはと併走していた

「アルフさん！」

1人と1匹が走って来た先が

「ここなら…！」

先日フェイトがジュエルシードを暴走させた海

「来て…！フェイトちゃん！」

その時だった

『S c y t h e f o r m』

フェイトがバルディッシュを起動させ、浮遊していた

「フェイト…もうやめよう！あんな女の言うこと…もう聞いちゃ駄目だよ！このままじゃ不幸になるばかりじゃないか！」

アルフが必死に説得を試みるが

「だけど…それでも私は…あの人の娘だから…」

フェイトは首を振り拒否する

「ただ捨てればいいってわけじゃ無いよね…逃げればいいってわけでも無い…きつとキツカケはジュエルシード、だから賭けよう！お互いのジュエルシードを！」

『P u t o u t』

なのはが自らの思いを口にし、自分が持ちうる全てのジュエルシードを賭けると宣言

『P u t o u t』

そしてフェイトも全てを賭けた

「それからだよ…全部…それから…！」

「私達の全ては、まだ始まってもない…だから…！本当の自分を始める為に！」

自分の決意を話し

「始めよう…最初で最後の本気の勝負！」

真っ直ぐに見つめ合い、デバイスを構え、なのはとフェイトの勝負が始まった

「……………最後のページ出番無し！？」

『リュウは空中戦が出来ませんから』

「シールドを…シールドを足場にすれば…！」

『フェイトさんは高機動型魔導士ですから、無理ですね』

「……チクショウ……」

束の間の休息（後編）（後書き）

無印の間は主人公の見せ場が全然無い…
いつその事虚数空間に落とすしか…！

「…オイ」

じゃあ皆さん、次回会いましょう！

ダッ 作者が走り出した

「待たんかコラアアア！ドラグーン！」

『ええ』

「『D - ダイブ！』」

こつちくんじゃねえええ！

「ヒヤッハアアア！待ちやがれえ！」

『…えゝこんな感じですが、これからもよろしくお願いします』

知らされる事実

フェイトが思い浮かべるのは遠い記憶。

優しい母親が自分に微笑みかけて名前を呼んでくれる、そんな記憶

「綺麗ね…アリシア」

花で首飾りを作って笑いかけてくれる母さん。しかし、記憶の母が自分を呼ぶ名はフェイトではなく、アリシア

「（アリシア？違うよ母さん…私はフェイトだよ？）」

「さあ、いらっしやい？アリシア」

記憶の母は優しく自分に微笑みかけてくれる。そして記憶の自分も楽しそうに笑いかける

「（まあ…いいのかな…）」

場面は変わり、なのはと対峙する自分に

「（私は…優しい母さんが大好きだから…）」

心の中で踏ん切りをつけ

「…っ！」

バルディッシュを構え飛び上がる

対峙するなのはとフェイトをモニターで見るのはクロノとエイミー

「戦闘開始みたいだね…」

「…ああ」

しかしクロノの視線の先はエイミーの寝癖

「しかし、ちょっと珍しいよね。クロノ君がこんなギャンプルを許可するなんて」

「まあ、なのはが勝に越した事は無いけど…」

話ながらスプレーを取り出し振るクロノ

「あの2人の勝負事態はどちらに転んでもあんまり関係無いからね」

「うーっす」

そこへリュウが入ってくる

「おはようリュウ」

「ふわゝあ…もう始まってんのか…」

「リュウ君…私より寝癖が酷いね…」

そうしてる間にエイミーの寝癖を直すクロノ

「次…貸してくれ」

「ほら」

「サンキュー」

早速スプレーを振って吹きかけるリュウ

「そういえば、あの事伝えなくていいの？プレシア・テストロッサとその家族の事故の事…」

「事故？」

状況が把握出来ないリュウ

「勝ってくれる事に越した事はないんだ…今はなのはを迷わせたくない…」

「ん？」

モニターを見上げるクロノとクロノを眺めるリュウであった

モニターが移す場所では

「…っ！」

『Photon Lancer』

2人がデバイスで打ち合い、フェイトがシューターの準備をする

「っ！」

『Divine Shooter』

それを見たなのはもシューターを展開し

「ファイア！」

「シュートッ！」

同時に撃ち出す

「っ！」

なのはは全てをかわし

「くっ！」

フェイト纏めてシールドで防ぐ

「っ!？」

フェイトがシールドを展開している隙に更にシューターを展開していたのは

「シュートッ！」

『Scythe Form』

デバイスの魔力刃の形状を鎌の形に変えシューターを切り裂くフェ

イト

「っ！」

シューターを切り裂いた勢いでなのはに突っ込むフェイト

「っ！？」

『Round Shield』

一瞬驚くがすぐさまシールドを展開し、フェイトの斬撃を受け止める

「っ……！」

突っ込んで来たフェイトを受け止め、待機させておいたシューターをフェイトの後ろから強襲させた

「っ！」

しかしフェイトもそのシューターに気づきシールドで防ぐ

「なっ……！？」

シューターを防いだ後なのはを探す、見当たらない

『Flash Move』

「せーっ！」

「あぁっ！？」

フェイトの上空から一気に急降下し、デバイスを叩きつけるのは
カッ！

ドガアアア！

フェイトが受け止めた衝撃で空中に散布していた魔力が発光

『Scythe Slash』

フェイトが魔力刃の形状を変えなのはに切りかかるが

「っ！」

切り裂いたのは胸元のリボンだった

「あっ！？」

『Fire』

なのはが退避した先にはフェイトの設置したシューターが

「あっ！くっ！」

なんとかシールドで受け止めたなのは

「ハア…ハア…」

「ハア…ハア…」

互いに息が切れてきた

「（初めて会った時は…ただ魔力の強いだけの素人だったのに…もう違う。速くて、強い、迷ってたら…やられる!）」

なのはの変貌ぶりに意志を固めたフェイト。

足下には巨大な魔法陣が、更になのはの周囲に大量の魔法陣が展開され

「っ!？」

『Phalnx Shift』

大量のシューターがフェイトの周りに展開される

「っ!」

「ライトニング…バインド!」

更に防ごうとしたなのはをバインドで押さえ込む

「不味い!フェイト、本気だ!」

「なのは!今サポートを!」

「ダメーッ!」

『アルフさんもユーノ君も手え出さないで!せっかく全開の一騎打ちなんだから!私とフェイトちゃんの勝負だから!』

『でも！フェイトのそれは本当にマズいんだよ！』

『平気！』

バインドに捕らえられたなのはユーノがサポートしようとするが、
なのはフェイトとの一騎打ちだから、と言って拒否する

「アルカス、クルタス、エイギアス」

「疾風なりし天神よ、今導きの下撃ち掛かれ」

「バルエル、ザルエル、ブラウゼル…」

「…っ！フォトンランサー、フランクスシフト！」

「打ち碎け！ファイア！」

フェイトの詠唱が終わり、撃ち出される大量のシューター

「っ！」

シューターが当たる前にレイジングハートが光り

フォトンランサーが次々と撃ち出されなのはに殺到する

「ハア…ハア…っ！」

最後の気力を振り絞りフェイトが魔力をかき集めシューターを作り
出した

一方アースラでは

「うわゝ流石だな、フェイトは」

「あれだけの儀式魔法はそうそう撃てないよ」

フェイトに感心している2人

「2人共随分冷静だね…」

「慌ててもしゃあねえしな」

「そうそう、今は待つだけだ」

2人してモニターを見つめていたが

「やっぱなのはあんくらいじゃ落ちないか」

「それどころか反撃しようとしているな」

動きがあつた為再び集中し始めた

「いったあゝ撃ち終わるとバインドつても解けちゃうんだね、今度は…こっちの…」

『D i v i n e ……』

レイジングハートの先に魔力が集中し

「番だよ！」

『Buster!』

集められた魔力が放たれた！

「ああ！」

シューターを砲撃に撃つが、あっさりと飲み込まれた

「今、フェイト怯えたように見えたんだが」

「…気のせいだろう」

アースラ内ではこんな会話があったとか

「ああっ！」

シューターが打ち消され、急いでシールドを展開した

「（直撃…！でも…耐えきる！あの子だって…耐えたんだから！）」

なのはのデイベインバスターに押され、バリアジャケットが手の先から裂けていく

「くっ…っ…」

なんとか耐えきるが

「っ!？」

視線の先には再び魔力を溜めるなのはの姿が

「受けてみて…デイベインバスターのバリエーション！」

なのはの足下に魔法陣が展開される

『Starlight Breaker』

更にレイジングハートに魔力が溜められ、魔法陣にも強大な魔力が

「くっ！」

急いで射線上から退避しようとするフェイトだが

「バインド!？」

なのはのバインドに抑えられる

「これが私の全力全開！スターライト…ブレイカー！」

なのはが魔力を放出すると同時に巨大な砲撃がフェイトに向かって放たれた

「な、なんつーバカ魔力！」

「悪魔か…アイツは…」

「フ、フェイトちゃん生きてるかな!？」

感想を言う2人と震えた声でフェイトを心配するエイミィ

「うゝん…駄目かもな…」

「不吉な事を言うな!」

まったくだ

「ハア…ハア…」

大量の魔力を一度に放出したため息切れのなのは

「フェイトちゃん!」

フェイトが気を失い、海に落ちていく

「ん…」

「気づいた?」

フェイトが目を覚まし

「私の勝ちだね?」

「…うん」

『Put out』

なのはが勝った事でバルディッシュがジュエルシードを放出する

「よし、なのは！ジュエルシードを全て回収して、その子を…」

「必要ねえ」

「え？」

クロノがなのはに指示を出していると険しい顔で否定するリュウ

「来た！」

フェイトの上空に魔力が集中され、雷となって降り注ぐ

「フェイトちゃん！？」

激しい戦いの後の次元魔法には耐えきれなかったのか、バルディッシュがコアだけになってしまう

「く…ああ…」

フェイトが魔法に攻撃されている間にジュエルシードはプレシアに回収されてしまった

「ビンゴ！尻尾掴んだ！」

しかし、やられるだけでなくエイミィが魔法を放ってきた座標を特定、プレシアの居場所を暴く

「よし…不用意な物質転送が命取りだ…座標の特定を！」

「もう割り出して、送ってるよ！」

クロノが指示を出すより早く作業をこなしたエイミィ

「武装局員、転送ポートから出動！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です！」

「…はっ！」「…」

リンディが指示を出すと同時にプレシアの居場所へと転移していく局員達

プレシアの居場所へと転移して来た局員達

「第二小队転送完了！」

「第一小队侵入開始！」

武装局員が侵入を始めた頃

「お疲れ様、それから…フェイトさん？初めまして」

「ん…」

リンディが話しかけるが待機状態となってしまうたバルディッシュ

を握り締めて黙り込むフェイト

「よう、フェイト？」

「あ…リュウ…」

そこへモニタールームからやって来たリュウがフェイトに挨拶

「クロノはいざという時の為に待機しとくつてさ」

「そう、分かったわ。ありがとうね」

どうやらクロノが待機する事を報告に来たようだ

「フェイト…ご苦労さん」

「うん…」

リュウがフェイトと会話している間に

『母親が逮捕されるのを見せるのは忍びないわ…なのはさん、彼女を何処か別の場所へ』

『あ、はい』

リンディが気遣ってフェイトを移動させようとするが

「フェイトちゃん…よかったら、私の部屋に…」

「総員、玉座の間に侵入！目標を発見！」

侵入した武装局員達がプレシアを発見する

「プレシア・テストロッサ！時空管理法違反、及び管理局官制への攻撃容疑で、貴方を逮捕します！」

「武装を解除して此方へ……」

武装局員が投降を促すが

「……ハッ」

それを嘲笑う

別の所へ侵入した局員は何かの実験施設を発見

「……ふえ！？」

「アレは……」

更にその奥にあるものに気付きリュウと　なのはが声を漏らす

「ぐわあっ！」

「私のアリシアに……近寄らないで！」

フェイトによく似た少女がカプセルの中で膝を抱えており、それに近付いた局員をプレシアが吹き飛ばす

「ぐっ……」

局員が横一列に並びデバイスを構え

「撃てえ！」

全員が攻撃を放つがプレシアに防がれる

「うるさいわ……」

「危ない！防いで！」

プレシアが魔力をチャージ、リンディが局員に攻撃の事を伝えるが

「……うわあああ！」

侵入していた局員全員が攻撃魔法にやられる

「フッフ……フハハハ……」

「いけない！急いで局員達の送還を！」

リンディがエイミィに指示を出す

「アリ……シア……？」

母が自分とそっくりの少女をアリシアと呼んだ事に困惑するフェイト

「もう駄目ね……時間が無いわ……たった9個のロストログアでは、アルハザードに辿り着けるか分からないけど……」

少女が眠るカプセルにすがりつくように手を当て、此方に語りかけてくるプレシア

「でも…もういいわ、終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を…この子の身代わりの人形を娘扱いするのを…」

プレシアが語る、事を起こした全ての真実。

「聞いていて？貴女の事よ、フェイト…せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ…役立たずでちつとも使えない私のお人形」

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロツサを亡くしているの…彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる…使い魔を越える人造生命の精製、そして…死者蘇生の秘術…フェイトって名前は…当時彼女の研究に付けられていたコードなの…」

エイミイがプレシアについて調べた全てをリュウ達に教える

「よく調べたわね…そうよ、その通り」

再びカプセルを撫でるプレシア

「でも駄目ね…ちつとも上手く行かなかった…作り物の命は所詮作り物、失った物の代わりにはならないわ…」

「アリシアはもっと優しく笑ってくれた…もっと私に優しくかった…フェイト…やっぱり貴女はアリシアの偽物よ…」

プレシアがフェイトを造った経緯、そしてアリシアの事を語る

「せっかくあげた記憶も貴女じゃ駄目だった…」

「止めて…止めてよ…！」

「アリシアを蘇らせるまで私が慰みに使うだけのお人形…でも…もう貴女は要らないわ…何処へなりと…消えなさい！」

「お願い！もう止めて！」

プレシアがフェイトを突き放し、なのはがそれに叫ぶ

「アーツハハハ！いい事教えてあげるわフェイト…貴女を造り出してからずっとね…貴女の事が…大嫌いだったのよ！」

「っ！？」

フェイトがその言葉にショックを受け、バルディッシュを取り落とすが

「おっと…」

リュウがそれをキャッチする

「あっ…」

フェイト自身も脱力して倒れ込み

「……フェイト…」

リュウがフェイトを抱き留める

「大変！大変！ちよつと見て下さい！屋敷内魔力反応！多数！」

「何が起こつてる！？」

モニターには大量の魔力反応、その何れもがAランク以上

「総数、60・・・80・・・まだ増えます！」

「プレシア・テストロッサ…何をするつもりなの…！？」

屋敷内ではアリシアを入れたカプセルを固定していた物を外し、プレシアが歩き出す

「私達の旅を…誰にも邪魔されたくないの…私達は旅立つの…！忘れられた都！アルハザードへ！」

「まさか！」

「この力で旅立つて…取り戻すのよ…全てを！」

全てのジュエルシードを一度に暴走させ 次元震を引き起こした

「次元震です！中規模以上！」

「振動防御！ディストーションシールドを！」

次々と問題が発生し、それに対処していく局員

「アル…ハザード…」

「馬鹿な事を！」

「クロノ君！？」

モニターを見ていたクロノが走り出す

「僕が止めてくる！ゲート開いて！」

「（忘れられた都…アルハザード…最早失われた禁断の秘術が眠る土地…其処で何をしようって言うんだ！？
自分が無くした過去を取り戻せるとでも思っているのか！）」

クロノがデバイスを起動する

「どんな魔法を使ったって、過去を取り戻す事なんか、出来るもんか！」

「私とアリシアは、アルハザードで全ての過去を取り戻す！」

『なあ…クロノ…』

『何だ！リュウ！』

『一応俺も作り物だよな？』

『君は黙ってろ！』

『緊迫感を和らげようとしただけなのに……』

『やかましい！』

知らされる事実（後書き）

ようやく次回からリュウが戦闘出来る…

次回！リュウのデバイスの隠された機能が明らかに！？
何か考えとこ…

プレシア、アリシアを助けるパターンとほぼ原作通りの2パターン
考えついているんですが、どっちがいいとかご希望あったら感想に
お願いします

では、次回お会いしましょう！

決戦 上

アースラの通路を走るクロノ

「あ！」

「クロノ君！何処へ？」

向こう側から走ってくるなのは、ユーノ、アルフと会う

「現地へ向かう、元凶を叩かないと！」

一人でプレシアの元へ向かうつもりクロノ

「私も行く！」

「え？」

「僕も！」

ユーノとなのはが自分達も行くと言い出し

「…分かった」

許可を出すクロノ

「アルフはフェイトの側にいてあげて」

「うん！」

「ついでにコレ渡しといてくれ」

ユーノの横から伸びる腕

「……リユウ!?」「……」

「おっす!」

「居なくなっと思ったたら……」

何かをしに行っていた様子
フェイトが落としたバルディッシュをアルフに預け

「まあな、とりあえず…俺も行くぜ」

「分かった!行こう!」

「うん!」「」

「おう!」

クロノが許可を出し、屋敷に向かう4人

「クロノ、リユウ君、なのはさん、ユーノ君、私も現地に出ます!」
貴方達はプレシア・テストロッサの逮捕を!」

「……了解!」「……」

艦内放送でリンディからの指示が入る

「リュウ！さっき技術班から預かってきたんだ！」

クロノが走りながら腕輪を投げ渡してくる

「解析が終わったのか、名前は？」

「ボレアス！形状はハルヴァートに近いらしい！」

「サンキュー！」

預けていたデバイスが戻ってきたリュウ、まだ他の奴も充分に扱えていないのに

「リュウ、それは？」

「俺のデバイスだよ！」

「リュウ君幾つ持ってるの？」

疑問に思ったのかなのはとユーノが色々聞いてくる

「話は後だ！急ごう！」

転送ポートで転移していく4人だった

医務室で眠り込んでいるフェイトとそれを心配そうに見つめるアルフ
そして医務室に用意されたモニターに映る侵入した4人

「うじゃうじゃいやがる…」

「クロノ君…この子達って…」

「近くの相手を攻撃するだけの、ただの機械だよ」

「そっか、なら安心だ」

そう言つてレイジングハートを構えようとするが

「この程度の相手に、無駄弾は必要無いよ」

クロノが制止する

「ハアッ！」

『Stinger Snipe』

クロノのデバイスから刃状の魔力弾が放たれ、傀儡兵を撃ち抜いていく

「は、早い！」

「スナイプショットオ！」

更に魔力弾を放ち、傀儡兵を貫く。そして操作し大型の敵に撃ち込む

「ハアッ！」

大型の敵が耐えきり、攻撃して来るがそれをかわす。そして相手の

上に飛び乗り

『Break Impulse』

直接魔法を叩き込み撃破する

「ボーっとしてないで！行くよ！」

「うん」

クロノの戦闘技術に驚いているのはとユーノに言い放つクロノ

「やっぱり俺との模擬戦じゃ本気出してなかったな？」

「当たり前だろ？」

軽口を叩き合いながら侵入していくリュウとクロノだった

「リュウ、なのは！黒い空間がある場所は気を付けて！」

「虚数空間！あらゆる魔法が発動しなくなるんだ！」

「飛行魔法も打ち消される！落ちたら重力で何処までも落ちていくよ！」

「き、気を付ける！」

2人に注意され、足下を見ているのはと

「俺は元々碌な魔法が使えんからな」

『初めから落ちたら終わりですね』

全然気にしていないリュウだった

虚数空間を避けながら先へ進むと広間に到達、大量の傀儡兵が

「ここからは二手に別れた方がいいな…」

「君達は駆動炉の封印を！」

「クロノ君は！？」

クロノが指示を出すとなのはが聞く

「プレシアの下へ行く、それが僕の仕事だからね…今道を作るから…」

クロノがデバイスを構え、魔法を放とうとすると…

「ドラグーン！」

『術式起動』

「消し炭にでもなっときな！テンペスト！」

リュウがボレアスを起動して飛び出しドラグーンがデバイスに内蔵された術式を起動、雷を纏ったボレアスを振るった瞬間傀儡兵が全て消し飛ぶ

「リュウ！？何で魔法が！？」

「話しは後だ！先を急ぐぞ！なのは！お前もプレシアの下へ行け！」

一気に話すと階段を上って駆動炉へ向かうリュウ

「まったく！なのは！行こう！」

「でも…リュウ君が！」

「リュウはほつといっても平気だ！それよりも早く次元震を止めないと！」

「う、うん！」

こうしてリュウは上で駆動炉の破壊、クロノ達はプレシアの確保と分担する事に

さて、何でリュウが魔法を使えるようになったかと言うと、こんな会話が突入前に

『リュウ、デバイスのプロテクトを解除してもらった事で、術式が発見出来ました』

「術式？んなもんがあっても使えないだろ？」

『今のままでは無理ですが、魔力球をほぼ一個分消費する事で発動出来ます』

「切り札みたいなもんか…」

『今のところ確認出来ているのはルファル、ボレアスですね』

「デュランダルは？」

『デュランダルは対人戦を目的とされているので、術式は組み立て
いない可能性が高いですね』

「そっか…分かった」

こんな感じで会話が繰り返されていたとか

「私も出ます！」

リンディが出撃する事を伝え

「あの子達が心配だからアタシも…ちょっと手伝ってくるね…」

アルフも出撃の意志を固める

アルフが転移していった後、フェイトがふとモニターを見る

「（…母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった…私が生きて
いたいと思ったのは、母さんに認めて欲しかったからだ…どんなに
酷い事をされても、笑って欲しかった…あんなにハッキリ捨てられ
た後でも…私はまだ母さんにすがりついてる…）」

傀儡兵を次々と破壊するリュウを援護するように現れたアルフ

「（ずっと私に着いてくれたアルフ…いきなり現れて…私を守ってくれて…少し成り行きだったけど友達になると言ってくれたリユウ…何度もぶつかった、真っ白な服の女の子、初めて私と対等に向き合ってくれた2人…私の名前を呼んでくれた…）」

フェイトが飛び起き

「（生きていたいと思ったのは、母さんに認めて欲しかったからだ…それ以外に生きる意味なんて無いと思っていた…それが出来なきゃ、生きて行けないんだと思っていた…）」

ふと、なのはと戦う前に言われた事を思い出す

「（捨てればいいってもんじゃない…逃げればいいってもんじゃない…い…）」

「邪魔だあああ！」

ルファルを展開し、両腕に炎を纏ったリユウが次々と傀儡兵を破壊していく

「ガラクタ共が！うざってえんだよ！」

「ガアアア！」

狼の姿になったアルフが傀儡兵を打ち倒して行く

フェイトが側にあったバルディッシュを持つと

「リュウからの…伝言？」

リュウが記録したようだ、音声が流れてくる

『フェイト…聞こえてるか？』

「リュウ…」

『お前の事だからもう終わりとか思ってた？ 終わりどころかお前は始まってさえもいねえよ…お前は人形なんかじゃない、お前は…フェイト・テストロッサだ！』

「…リュウ…っ」

フェイトがバルディッシュを起動する

「バルディッシュ…私は…まだ始まってさえもいなかったのかな？」

『Get set』

バルディッシュが自らの意志で起動する

「…そうだね…！お前も、このまま終わるなんて嫌だね…！」

『Yes Sir』

「上手くできるかぎり分らないけど…一緒に頑張ろう…！」

フェイトがバルディッシュに魔力を流しプレシアの魔法によって傷付いたボディを修復する

『Recovery』

「私達の全ては…まだ始まってさえもない…」

フェイトが自分のやる事を決め、バリアジャケットを作り出す

『Put out』

バルディッシュが何かをフェイトの手に放出する

「リュウの魔力…？」

コレ…リュウから？」

『Yes』

リュウ…魔力球とか…バルディッシュに入れとくなよ

「…飴玉？」

真っ黒に光る魔力球を恐る恐る口に含めフェイト

「…！？」

いきなり魔力が供給され始め一瞬驚くが

「…あつたかい…リュウの魔力…」

やっぱり何か変な成分でもあんのかな？リュウの魔力

「…本当の自分を…始める為に！」

足下に転移魔法陣を展開し

「今までの自分を…終わらせよう…」

金色に輝く魔力に包まれ、フェイトが転移する

敵の数が多くなった為、ボレアスに持ち替えて駆動炉へ一直線に突き進むリュウ

「鬱陶しいんだよ！ガラクタ共がぁ！」

『術式起動』

「消し飛べ！テンペスト！」

内蔵された術式を起動されたボレアスが一瞬にして雷を纏う

「オラアアア！」

雷を斬撃に乗せて傀儡兵を切り払う

「数が多すぎる！」

アルフも一体一体確実に仕留めて行くが、敵の増援のペースの方が早く追いつかない

「リュウ！」

リュウが正面の傀儡兵を破壊していると後ろから大型の兵が巨大な斧を振り下ろしてくる

「チイツ！」

リュウが防ごうとすると

『Thunder Rage』

リュウに迫っていた傀儡兵に雷が落ち

『Get set』

「サンダーレイジ！」

バルディッシュから雷に変換された魔力が傀儡兵を撃ち抜く

「フェイト？」

アルフが敵兵を倒しながらフェイトを見上げる

「フェイト…来たか…」

「うん…自分を…始める為に…！」

その時、巨大な傀儡兵が壁を破壊して接近して来た

「大型だ…バリアが強い…」

「背中の砲台も厄介だな…」

チャージを始めた敵の砲台を見て呟くリュウ

「だけど…2人でなら…」

「…ああ！」

フェイトから歩み寄って来た事に一瞬戸惑うが、すぐに再起動するリュウ

「行くよ！バルディッシュ！」

『Get set』

「やるぞ！ドラグーン！」

『Stand By Ready』

「何時もと違くない？」

『気にしないで下さい』

相手の砲撃の発射準備が整い発射される寸前に

「サンダー！バスター！」

フェイトがチャージした魔力を解き放ち砲撃を撃ち込む

フェイトの砲撃が傀儡兵のバリアに阻まれるが、相手もバリア維持

のため動けない

「猛れ…破壊の劫火！」

ルファルに内蔵された術式が起動、魔力が溢れ出しその全てが炎へと変換される

「クリムゾンノートオ！」

両腕に炎を纏い傀儡兵に突っ込む、溢れ出した魔力を全て右腕に収束し殴りつける。

ドガアアアン！

拳が直撃した部分が爆発、一撃で亀裂が入っていたが二撃目で爆散する傀儡兵

リュウとフェイトの魔法の余波で現場全体に衝撃が走る

「来たのね…でも、もう遅いわ…ねえ？アリシア…」

側に浮くカプセルにすがりつくプレシア

一方リュウ達は

「フェイト！フェイト！」

アルフが叫びながらフェイトに向かって走り寄る

「アルフ！心配かけてごめんね…ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ、本当の自分を…」

自分の決意をアルフに伝えるフェイト

「後もう少し…」

プレシア・テストロッサがジュエルシードを宙に浮かせて何かの準備をしている

「おらよお！」

リュウが壁を破壊して無理やり進む

「あそこから、駆動炉に向かえる」

「サンキュー、駆動炉は俺に任せてフェイトは母親の所に行け」

フェイトに道を教えてもらうつと母親の所へ行くように言うリュウ

「頑張れよ？」

身長差の関係からフェイトの頭を撫でるリュウ

「……うん」

初めて頭を撫でられたのだろう、少し顔を綻ばせながら頷くフェイト

「なのも向かってるからさ」

「あの子も…」

なのも向かっていると聞いて顔を引き締めるフェイト

「じゃあな！また後で！」

「うん…！」

デバイスを構えそれぞれの道へ向かう2人だった

「エイミィ！」

クロノがアースラに通信をとり、現在の状況を聞く

「リュウ君が単独で駆動炉エリアに突入！フェイトちゃんとアルフは最下層へ！大丈夫…行けるよきつと…」

「ああ！」

エイミィとの通信を終えたクロノが気を引き締める

「邪魔だああ！どけえええ！」

リュウが雷を纏ったボレアスを振るい、敵兵を次々と破壊していく

「テンペスト！」

纏っていた雷を密集地帯に放ち、一気に殲滅する

「コイツが！駆動炉かぁ！」

ボレアスからルファルに持ち替え、突貫する

爆散する駆動炉、中からエネルギー源となっていたロストロギアが放出される

「コイツか…」

『そういえばリュウは封印処理が出来ないのでは？』

「……大丈夫だろ」

『……だといいですけど』

ロストロギアを握りしめ、走り出すリュウ

リンディが現場に出て次元震を抑え、プレシアに話しかけていた

「忘れられた都、アルハザード…そして其処に眠る秘術は存在するかどうかも曖昧な、ただの伝説です！」

「違うわ…アルハザードは次元の狭間にある…！」

「随分と分の悪い賭だわ…」

「私達は取り戻す…！私とアリシアの…過去と未来を…！こんな筈じゃなかった…世界の全てを…！」

そこへ部屋の中に砲撃魔法が撃ち込まれる

「！？」

クロノとなのは、ユーノが部屋に入ってくる

「世界は何時だって、こんな筈じゃない事ばかりだよ！ずっと昔から…何時だって誰だって、そうなんだ！」

フェイトとアルフもやって来る

「こんな筈じゃない現実から…逃げるか…それとも立ち向かうかは個人の自由だ！だけど、自分の勝手な悲しみに…無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！」

部屋の中でフェイトとプレシアが対峙する

「ケホッ！ケホッ！」

「母さん…！」

咳き込むプレシアに走り寄るフェイトだが

「何をしに来た…！」

プレシアに睨まれる

「消えなさい…もう貴方に用は無いわ…」

「貴方に言いたいことがあつて来ました…」

プレシアに拒絶されるが立ち向かうフェイト

「私は…アリシア・テストロッサじゃありません…貴方が造った、ただの人形なのかもしれません、」

フェイトがプレシアに向き合い、自分の思いをぶつける

「だけど…私は…フェイト・テストロッサは…貴女の娘です！」

「フツ…フハハハ！アハハハハ！だからなに…今更貴女を娘と思えと？」

フェイトの言葉を笑うプレシアに

「貴女が…それを望むのなら…」

まったく気圧されず話すフェイト

「それを望むのなら…世界中のどんな事からも…貴女を守る…私が貴女の娘だからじゃない…貴女が…私の母さんだから！」

そういつてフェイトが手を伸ばした時

「ダラァァ！」

リュウが天井を突き破って出て来た

「やっと来れたか…」

『リュウ、どうやらそんな空気じゃ無いようですが…』

「へ？」

状況が呑み込めないリュウ

「リュウ…君って奴は…」

「リュウ…空気詠んでよ…」

クロノとユーノが呆れ

「にやはは…」

なのはが苦笑い

しかし、フェイトとプレシアはそれに構わず

「ハッ！くだらないわ！私は手に入れる！過去も！未来も！たった一つの幸福も！」

プレシアが拒絶するが

「グダグダうつせんだよ！」

「何？」

リュウがそれに口を挟む

「グダグダうぜえつつてんだよ！どうであろうと、フェイトはデメエの娘だろうが！」

「リュウ…！」

リュウがプレシアに叫ぶ

「デメエがやらかした事全てを否定して失った物を取り戻す？ざけんじゃねえ！デメエの自己満足に、フェイトを振り回すな！」

「何も知らない、苦しみを知らない餓鬼が！口を挟むなあ！」

プレシアが怒りを顕わにし、リュウに攻撃を放つ

「ラァ！」

しかし、魔力球を使用しているリュウの前には生半可な魔法は通じない

「うぜえって言うてんだよ！逃げればいいってもんじゃねえ…捨てればいいってもんじゃねえ…全てから逃げ出す前に！何もかもを投げ捨てる前に！全てに向き合ってみやがれ！」

「五月蠅い！五月蠅い五月蠅い五月蠅い！所詮貴方も作り物！作り物同時傷の舐め合いでもしてなさい！」

プレシアが闇雲に魔法を放つ

「知ってやがったか…」

「どこかで感じた事のある魔力だと思ったのよ！Project・Dの唯一の成功体にして失敗作！」

「Project・D…？」

「何？それ…」

「実験体…？」

「アンタ…もしかして…」

リュウの事情を知らない3人が首を傾げ
アルフがリュウの正体を感じる

「貴方龍の遺伝子が暴走しないでしょ？その代わり魔力も碌に扱えないから廃棄されたと思ったのだけ…」

「廃棄？」

「ええ…龍の遺伝子は暴走しないけど、魔力暴走を抑える為に殆ど魔力が引き出せないんだもの…誰でも失敗とみなすわよ」

リュウさえも知らなかったリュウの正体を語るプレシア

「随分と詳しいな…研究員の1人か？」

「ええ、そうよ…途中で益にないと感じて辞めたけどね」

「へえ…あの計画の犯人は全て捕まったのか？」

「いえ、何人かは逃げた筈よ」

「逃げた先は？」

「言うわけ無いじゃない！アハハハハ！」

「力尽くでも…」

リュウが再びルファルを起動するが

『待つて下さいリュウ』

「何だ？」

ドラグーンが制止する

『プレシア女史からロストロギア反応が微かに、おそらくその所為で負の感情が増幅されている可能性が』

「ふむ…聞いたか？クロノ」

クロノに問いかけるリュウ

「ああ、バッチリだ、後はロストロギアを確保出来れば問題無い」

「ok！全員！戦闘準備だ！」

全員がデバイスを構えたり、戦闘態勢を取る

「フハハハ！アハハハハ！アッハハハハ！」

狂ったように笑い続けるプレシアから強大な魔力が流れ出てくる

「来るぞ！」

「アハッアハハハハッ！アッハハハハハ！」

後編へ続く

決戦 上（後書き）

またまた長くなったので上、下に分けてみました

新たなリュウの力も発現して、次回はロストロギアとの戦いです！

では、次回お会いしましょう！

……………ヒロインどうしよっかな

決戦 下

プレシアが寄生型ロストロギアに取り付かれているとドラグーンが観測、全員でロストロギアをプレシアから引き剥がす為に今、本当の最終決戦が始まる！

…あらずじみたいな物と思って下さい

プレシアから強大な魔力が溢れ出し、部屋の中を満たす

「艦長は次元震を抑えるのに精一杯だ！ロストロギアは僕達だけで対処する事になる！」

クロノが全員に通達し、気を引き締める

「ドラグーン、プレシアに取り付いてるロストロギアの詳細は？」

『只今データベース検索中です………発見

名称：テスカポリトカ

効果：魔導士に寄生し、魔力、憎しみや悲しみ等の負の感情を増幅させる。暫くの間寄生され続けると本人でも気付かない内にロストロギアに思考を誘導されていく
以上です』

どうやら研究所で入手したデータに入っていた模様

「めんどくせえな…簡単に言いやあプレシアはテスカポリトカに操られてんだな？」

『それに近いですね』

「切り離す方法は？」

『それは…』

説明を箇条書きにさせてもらうので次のページへ

ロストロギア名称：テスカポリトカ

非魔導士の体や魔導士のリンカーコアに寄生し、魔力、憎しみや悲しみ等の負の感情を増幅させ、宿主の思考を少しずつ他人を傷つけたりするように誘導していく。

長期間寄生され続けると少しずつリンカーコアが衰弱していき、最終的には魔法が使えなくなるか最悪死に至る。

非魔導士に寄生した場合無理やり魔力を使用するため寄生された者の体に影響が出てしまう。

寄生された時の切り離す方法

1つは寄生された者に多大な魔力でダメージを与え、ロストロギアを体から無理やり放出する。

もう1つはリンカーコアの無い非魔導士が寄生された場合のみ可能。寄生された者ごと強力な封印処理を行えば無理やりロストロギアの活動を停止出来る。

プレシアに溜められた魔力に動きが

「来るぞ！全員散開しろ！」

「アハッハハハッハハハ！」

リュウ達が散らばると同時に雷が落ちる

「威力が上がってねえか！？」

『完全に主導権がロストロギアに移ったようですね』

どうやらロストロギアに完全に乗っ取られてしまったプレシア

「切り離すにはリンカーコアにダメージ与えるんだったか？」

『その通りですが、プレシア女史は衰弱しているので、下手をしたら死に至るか』

ドラグーンから告げられる最悪の一言

「だったらどうすりゃ！？」

『一旦プレシア女史のリンカーコアごとロストロギアを封印、その後少しずつリンカーコアの封印を解いていくしかないですね』

まだ解決法はあるようだ

「だけど…もし失敗したら魔導士としては再起不能だ…成功したとしても…魔力は元通りにはならないだろう…」

「死ぬよりはマシだろうが！」

「そうだよ！助けなきゃ！」

クロノが予測を立てたが、それを気にせず戦う気のリュウとなのは

「だが…封印するとしても、この魔力を封印するとなると、魔導士3人以上は詠唱をしないといけないぞ！」

「クロノ、なのは、フェイト、お前らしか使えん！任せた！」

「リュウ！」

自分が封印出来ないと知ると、クロノの制止も聞かずに、すぐさまプレシアの足止めに向かうリュウ

「アルフ！僕達もバインドで！」

「ああ！」

リュウに飛来する魔法の軌道を反らしたり、プレシアの腕などをバインドで一時的に抑えるなど援護するユーノとアルフ

「……………僕達は急いで封印魔法の詠唱を！」

「でも…リュウ君が…」

「リュウならやってくれる…リュウを信じて、私達は私達のやれる事を！」

「…そうだね！」

なのはがリュウの事を心配するが、フェイトがリュウを信じようとなのはに話す

「おつとお！」

紙一重でプレシアの雷を避けるリュウ

「まったく！次から次へと！魔法が自由使えんのは羨ましいなあ！」

全然羨ましそうじゃないリュウだった

「リュウ！左右から来てるよ！」

「後ろからもだ！」

アルフとユーノがバインドやプロテクションで援護するが、相手はロストロギア自信も魔力を生成、作り出した魔力をも引き出してくるので、事実上無尽蔵に近い。

「チイツ！ボレアス！」

装備をルファルからボレアスに変更し、魔法を打ち落とすリュウ

「術式起動！」

『Stand By Ready』

何か違うぞお前等

「薙ぎ払え！テンペスト！」

ボレアスに纏った雷をプレシアの魔法にぶつけて相殺する

『リュウ、魔力球のストックが残り少ないです』

「ガラクタ共に使いすぎたか！？」

ガラクタ「傀儡兵で御座います

「クハハハハ！消し飛びなさい！失敗作が！」

リュウの気がドラグーンに逸れた隙を狙ってプレシアが魔法を放つ

「がっ…！？」

今までとは比にならないくらい威力が高められた一撃を受けたリュウ、受け身もとれずに吹き飛ばされる

「アッハハ！フハハハ！クハハハハ！」

尚も狂った様に笑いながら魔法を放つプレシア

「ぐっ…が…あ…」

フラフラになりながらも立ち上がるリュウ

「封印はまだかあ！？」

「もう少しだ！」

クロノからの返事を聞いた途端に再び突っ込むリュウ

「魔力球のストックは残り幾つだ？」

『5個ですね』

理論上、あと術式が5回しか発動出来ない事になる

「残り5個…か…それだけで凌ぎきれんのか…っ！」

近寄れば近寄る程雷が激しくなり、迂闊に近づけないリュウだった

「ユーノ！アルフ！魔力をバインドで縛れるか！？」

「散布されて暴走してる魔力なら！」

「降り注いでる雷は！？」

「行けるよ…っ！」

バインドを展開し、リュウの近くの雷を縛り上げるユーノ

「ありがとよ！ドラグーン！魔力球を！」

『了解しました』

ドラグーンから放出される魔力球をキャッチし

「ウオオオオ！」

『リュウ！何を！？』

噛み砕くリュウ

『圧縮された魔力を一度に解放したら…只じゃすみませんよ！』

「構わん！」

自身から溢れ出る魔力を雷に変換しながら突っ込むリュウ

「セイツ！ハツ！ヤア！オラア！」

蛇のようにうねりながら飛来する雷を1つ1つ確実に打ち落とすリュウ

「ドラグーン！」

『術式起動』

「テンペスト！収束解放！」

雷に変換した魔力を飛ばすのではなく、ボレアスに纏わせて持続的な攻撃力を高めた。

一度に放つより攻撃力も範囲も落ちるが、魔力が続く限り雷は纏ったままなので今のプレシアのような持久戦では此方の方が効率がいい。

「オラオラオラオラオラア！」

次々と雷を打ち落とすリュウと雷を放つプレシア

このままこの状態が続けばリュウの体は勿論、プレシアの体も無理やり魔力を引き出している状態なので只では済まない

「ぐっ!？」

リュウの腕に一筋の傷が入る、酷使による疲労によって腕の限界が近づいているようだ

「まだまだあ！」

両腕から血が流れようが構わずプレシアの魔法を迎撃するリュウ

「アハハハハ!もう、死になさい？」

魔力をチャージし始めたプレシア

「まだ来やがるか…封印はまだかよ…っ！」

ぼやきながら雷をかわすリュウ

「リュウ!危ない！」

「なっ!?!しまった!?!」

リュウがクロノ達の方を一瞬見た隙に四方八方から飛来する雷

「こいつぁ…やべえな…」

リュウの目の前まで雷が迫り、リュウが呟いた瞬間

「があああああ！」

雷がリュウに直撃

「しまった！リュウが！」

「ああっ！リュウ！」

ユーノとアルフが慌てる

「くそっ！」

「ユーノ！？！」

リュウが倒れユーノが走り寄る

「リュウ！しっかり！リュウ！」

「あ…？ユー…ノ…か…？」

「そうだよ！しっかり！」

ユーノがリュウを抱き起こすが目の焦点が定まっていない

「ちょっと…離れてろ…」

「何を！？」

リュウが再びフラフラと立ち上がる

『リュウ…後の反動が辛いですよ?』

「知るか…!」

一気に3個の魔力球を口に含み、噛み砕く!

「うわっ!」

リュウから魔力が吹き出し、ユーノが余波によるめく

「クハハハ! 最っ高にHypeってやつだ!」

何かヤクを服用したようなセリフを吐くリュウ

「リ、リュウ?」

「どした? ユーノ?」

困惑するユーノの方を片手間の様に雷を退けながら振り向くリュウ

「アンタ…大丈夫なのかい?」

リュウが雷を退けているのでアルフも近付いてくる

「ああ、もう平気だ」

「……リュウ…傷が…」

大量に魔力を吸収する事によって龍の遺伝子が超再生を始めており、

どんどん塞がっていくリュウの傷を見て驚くユーノ

「アンタ…やっぱり…」

「今は何も言うな、プレシアの救出が先決だ」

アルフがリュウが実験体と気付くが、リュウがそれを言わずにプレシアと向き合う

「…そうだね…だけど、後で説明してもらおう?」

「ああ…!後でな!」

再びボレアスを構え突っ込んで行くリュウ

「アタシ達もやるよ!」

「うん!」

バインドとプロテクションを雷にぶつけて軌道を逸らす2人

「ハハッ!クハハハハ!」

プレシアが再び魔力をチャージし始める

「失敗作は所詮失敗作!貴方に出来ることなんて、ありはしない!」

「ハッ!自分がちゃんとした存在じゃねえのは自体が一番分かっている!けどな!失敗作だろうとなんだだろうと、出来ないことなんてのは…ありはしねえ!」

プレシアから言われた言葉を真っ向から否定するリュウ

「俺は！失敗作だろうとなんだらうと、俺として、此処にいる！」

「黙れ！そんな幻想は…すぐに打ち砕いてあげるわ…！」

プレシアのチャージが終了し、リュウもボレアスに全魔力を収束する

「ドラグーン！」

『術式起動！』

「収・束・解・放！」

ボレアス全体を雷が覆い、1つの雷の刃となる

「幻想を抱いているのはお前だ！真っ向から、テメエの現実と！向き合いやがれえ！」

「黙れえええ！」

リュウが雷の刃を振りかざし、プレシアが魔力を収束する

「リュウ！詠唱は完了した！プレシア・テストロッサの動きを一時的に止めてくれ！」

「あいよお！」

クロノ達3人が封印の準備を完了し、プレシアの周囲に散開している

フェイトの前にはアルフが立ち、なのはの前にはユーノが立ってプロテクションで魔法の余波から2人を守る

クロノはリュウの後ろで待機なので自然と壁が出来てる

「これで終わりだ…プレシア・テストロツサアア！」

「所詮失敗作は失敗作！何も出来ずに消え去りなさい！」

互いに限界まで高めた魔力を放つ

「テンペストオ！」

「エアイルミネント！」

収束された雷と共に突っ込むリュウと、カマイタチを伴った雷の奔流がぶつかり合う

「ウオオオオ！」

「ハアアア！」

互いに撃ち出した魔法がぶつかり合い

「がっ…！？」

「ぐっ…！？」

膨張した魔力が弾け、リュウとプレシアが吹き飛ば

「今だ！封印を！」

「「ロストロギア、封印！」」

クロノの合図で3人同時に封印魔法を発動する

プレシアの胸、丁度リンカーコアの辺りに魔法陣が浮き上がり

「うああああ！？」

プレシアがもがき、苦しむ

「がつ…あつ…」

「後少しだ！2人共頑張れ！」

プレシアの動きが弱まっていき、クロノが魔力を強める

「がああああ……」

そして、遂に魔法陣が消え去り、プレシアが倒れる

「母さん！」

「フェイトちゃん！」

フェイトが倒れた母親に駆け寄り、なのはが後を追う

「リュウ！大丈夫か！」

「うあ…クロノ…か？」

吹き飛んで壁に叩きつけられたリュウに駆け寄るクロノ

「しっかりしろ！すぐにアースラに連れて行ってやる！」

そう言ってクロノがリュウに肩を貸す

「ぐっ…プ…プレシア…は？」

「封印は成功した。今フェイトとなのはが側にいるよ」

「そっか…」

息を吐いて安心するリュウを見て

「自分よりも他人の心配…か…君は本当にお人好しだな…」

「何か言ったか？」

「何でも無いよ」

呟くクロノ

「クロノ君！フェイトちゃんのお母さんが目を覚まさないんだけど…」

「大丈夫だよ、恐らく過度の魔力消費による過労だ」

「よかったあ…」

クロノから聞いて安心するのは

「さあ、一旦アースラに戻ろう」

「そうだね、リュウも休ませなきゃいけないし」

クロノの言葉に同意しながらリュウが歩ける程度まで治療魔法をかけるユーノ

「フェイトの…姉貴？はどうすんだ？」

「何で疑問系なんだ？」

アリシアの入ったカプセルを示しながら言うリュウに突っ込むクロノ

「身体的にはフェイトのが上だけど、生まれたのはアリシアが先だろ？」

「ややこしい…ひとまずアリシア・テストロッサも確保だ」

アリシアの入ったカプセルも運びながらアースラに戻っていく一行だった

アースラ内の医務室ではプレシア、リュウがベッドに寝かされ、クロノ、なのは、フェイト、ユーノ、アルフが傷の手当てを受けていた

「あゝだるっ…」

『一度に魔力球を3個も使うからです』

ベッドの上でボーっとするリュウと説教するドラグーン

「しょうがねえだろ？あそこではああするしか無かったんだ」

『ストックも無くなってしまいましたよ？』

「それが痛いな…」

魔力球について話していると

「なあ…リュウ」

「どした？クロノ」

「魔力球って…何だ？」

クロノが魔力球について質問してくる

「ああ、アレは…何て言えばいいんだ？」

『リュウの魔力の塊…でしょうか？』

「ん…まあ…そんな感じかな」

かなり投げやりな説明

「魔力の塊って…危険じゃないか？」

「作る時に何回か暴発したな」

『吹き飛ばれてましたね』

「…やっぱり」

サラッと話すリユウとドラグーンに呆れるクロノ

「役に立っただからいいじゃねえかよ」

「まあ…そうだが…」

どこか納得のいかない表情のクロノ

「そういや、プレシアの処遇はどうなるんだ？」

「ロストロギアに操られていたんだ、多分軽い罰かお咎め無しで済むだろう」

「よかった…母さん…」

眠っているプレシアの側にいたフェイトが安心して息を吐く

「よかったね！フェイトちゃん！」

「うん…！」

「……………」

なのはは純粹に喜び、アルフはフェイトが喜ぶのはいいけどプレシ

アが今までフェイトに非道いことをしてきたから複雑な気持ちの様子

「アリシアは…どうなんだ？」

「死んではいないんだが…仮死状態だよ…」

「そう…か…」

医務室の中が暗く暗鬱な雰囲気になる

『1つ…方法があるかもしれません…』

「本当か！？」

『ええ』

そんな空気の中、ドラグーンの一言によって明るくなる部屋

『但し代償もそれなりですよ？』

「覚悟は出来てるさ…」

他の者達が安堵の空気の中、リュウにしか聞こえないように話すドラグーン

「方法は？」

『研究所で手に入れた魔導書の中に古代魔術の中でも禁忌中の禁忌、蘇生魔法がありました』

「魔力は魔力球で補えば問題無し…か…」

『ええ、ですがリュウ、貴方も只では済みません』

「構わん」

自分の身を投げ打って他人を助けるリュウ

まあ本当に死者蘇生を行うわけじゃないから少しは負担も軽くなるが

「早速行こうぜ？アリシアのところにさ」

「ああ、そうだな」

未だに眠っているプレシアを医務室に置いて治療室に向かうリュウ達だった

治療室で様々な配線に繋がれて生命維持を行われているアリシア

「一旦全部とつていいか？」

「ああ、少しの間なら問題は無い」

クロノから許可を得て配線を全て外す

「そういえば…どうやってアリシア・テストロッサの意識を戻すんだ？」

「見てりゃ分かるさ。ドラグーン」

『どつぞ』

クロノからの質問を流し、ドラグーンから魔導書を受け取るリュウ

「魔法は…リザレクション…か…」

『魔力球を』

「サンキュー」

魔導書を開いて魔力球をスタンバイ

「行くぞ…」

「うわっ…なんて魔力だ…」

「凄い魔力なの…」

魔力球を2つ同時に噛み砕いたリュウから溢れ出す魔力の奔流に怯むクロノとなのは

「…光の神イシュタルよ…闇に堕ちし死者の魂を救いたまえ…」

魔導書に書き記された詠唱をリュウが唱え始めると同時に

「綺麗…」

「うん…」

横たわるアリシアを中心に光り輝く魔法陣が浮かび上がる

「凄い魔力だ…これだけの魔力を制御出来るなんて…」

「一歩間違えばアースラも無事じゃ済まないね…」

「不吉な事言わないでくれよ…」

魔法陣を見つめるフェイトとなのはに膨大な魔力に不安がるクロノ、
ユーノ、アルフだった

「…リザレクション！」

リュウが最後の一節を唱え終わり

「…「うわあっ!?!」」

「…「きゃっ!?!」」

魔法陣が一際大きく輝く

「ハアアア…」

『後少しです…』

リュウとドラグーンが魔力を制御してアリシアの体に集めていく

そして…

「ふう…」

「終わったのか?」

リュウが息を吐いてクロノが成否を聞いてくる

「魔法は成功だ…後はアリシア自身が肉体に還りたいと願えば起きるさ」

「そうか…」

「ああ…俺は…少し寝る…」

「「リュウ!？」」

アリシアが望めば目覚めると言い残して倒れたリュウに駆け寄るクロノとフェイト

「またリュウは無茶をするね…」

「にやはは…」

ユーノが呆れなのはが苦笑い

「でも、それがアイツの良いところでもあるのさ…他人の為に無茶出来るところがさ…」

その横でアルフが微笑んでリュウを見ていた

決戦 下（後書き）

最終決戦終了！

プレシアとアリシアは原作と大きく変わりますがご了承を

今回出て来た詠唱や魔法名は基本オウガシリーズから頂きました
もう少しで無印も完結！ぶっちゃけ一番楽しみなのが闇の欠片の自
分とマテリアルとの邂逅だったり…
では、また次回お会いしましょう！

…リュウのフラグ立てどうやろう

改めて…名前を呼ぼうか

リュウがアリシアの蘇生を試みてから1日

「う…ん…？」

『気がつきましたか？リュウ』

「ドラグーン…ここは？」

『医務室ですよ。リュウがアリシアの蘇生を試みてから1日が経ちました』

大規模の魔力量を放出したことにより前後の記憶が朧気な様子

「そっ…か…クロノ達は？」

『クロノ執務官は事件の後処理、なのはさん達は事件での功績を称えて表彰があるとか』

「随分頑張ってたからな」フェイト達は？」

『フェイトさん、アルフさん、プレシア女史は事件の重要参考人と首謀者ですから、暫くは隔離されるそうです』

「そうか…まあ…ロストロギアが殆ど原因みたいなもんだし、それ程重い罪にはならないと思うんだが…」

「ああ、軽くしてみせるさ」

そこへクロノが医務室に入ってくる

「言っ…クロノ執務官？」

「ああ、口先には自信があるんだ」

『2人共、なんか黒いです』

笑みを浮かべて挑発するリュウに対し、此方も笑みを浮かべるクロノ

「そついやなのは達が表彰されるんだってな？」

「なに他人事みたいに言ってるんだ、君も表彰されるんだぞ？」

「へ…？俺も？」

自分も表彰されると聞いて困惑するリュウ

「殆ど気絶しかしてないんじゃない？」

『同意ですね』

ドラグーン…少しはマスターを労ってやれよ…

「そついうことだから、今から行くぞ？」

「急だな、オイ」

「ほら、みんな待ってるんだ」

「ちょ、ちょっと待てっ！」

ベッドに腰掛けていたリュウの腕を掴んで引っ張っていくクロノ

「ったく…体が上手く動かせねえってのに…」

『そう文句を言わずに』

「じゃあねえ、行くか」

ドラグーンを手にとってクロノの後をついて行くリュウだった

「……と、言うことで此処に、略式ではありますが功績を称え、表彰いたします。高町なのはさん、ユーノ・スクライア君、リュウ君、おめでとう」

アースラの乗組員全員の前で表彰される3人

「やるじゃんかよ！リュウ」

解散した後でリュウに絡んでいったのはリュウより少し背の高い癖のある髪をした男

「よう、レンドル。また模擬戦でもやつか？」

この世界に着く前によく模擬戦をしていて仲良くなった武装隊の1人
遠距離主体の武装局員でリュウとはよく模擬戦をした仲、チームを
組んだ模擬戦ではリュウが前衛、レンドルが後衛のペアでよく組ん

でいて、本編には全然関わらないのにリュウとの連携はアースラ内で一番出来る

「それもいいな！だがな…先ずは先日的事件で負傷した連中の代わりに入った新人達を指導しなけりゃ…」

「ご苦労さん、戦闘関係なら手伝うさ」

愚痴り始めるレンドルを置いて行くリュウだった

「クロノ君…フェイトちゃん達はどうなるの？」

リュウがクロノと通路を歩いているとなのはがフェイト達についての処遇を聞いてきた

「事情があつたとはいえ彼女達は次元犯罪を起こしたんだ。重罪だし普通は数百年の懲役なんだが…」

「そんな！？」

なのはが思わず叫ぶが

「最後まで聞かんかい」

「ふえっ！？」

リュウがなのはにチョップする

「…続けるよ？今回は特殊だ、ロストロギアがプレシア・テストロ

ツサに寄生していたからね、奉仕活動を命じられるとかの軽い罰で済むと思う」

「よかったぁ…」

なのはが安堵の息を吐き

「もし裁判で不利になったとしてもなんとかしてみせるさ。□先には自信があるからね」

「…もしかして、クロノ君って優しいんだ…」

クロノが笑いながら言うとなのはが呟く

「し、執務官として当たり前だ！」

「「照れない、照れない」」

「照れてない！ってゆうかリュウ！君はうるさい！」

赤くなつたクロノをなのはとリュウがからかうとデバイスを持ってリュウを追いかけて回すクロノ

「おっとぉ！あばよ、クロノ！」

デバイスによる一撃をあっさりかわし逃亡するリュウ

「待て！」

半ば本気で怒りながらリュウを追いかけて行くクロノと

「2人共待つてよ」

おいてかれて慌てるなのは3人だった

次の日、アースラの食堂ではリンディ、なのは、ユーノの3人が集まって会話を

しており、リュウ、クロノ、エイミィの3人は食堂に向かっているのだった

「そっいゃ、クロノ」

「なんだ？リュウ」

「俺ってさ…殆どノリで参戦したんだが…この後どうなるんだ？」

「……………忘れてた」

「オイ…」

リュウが半眼になってクロノを睨むが

「そっいえば…リュウ君って次元漂流者だったんだっけ？」

エイミィも忘れていたようで

「お前等な…」

呆れるリュウだった

一方食堂では

「そうそう、次元震の余波は大分収まったから、なのはさん達の世界へは明日ぐらいには帰れるわ」

「本当ですか!」

「ええ、ただ…まだミッドチルダへの次元は安定していないから、ユーノ君はもう少し時間がかかりそうなの…」

リンディが申し訳なさそうに言うが

「まあ…スクライアー族は遺跡発掘で放浪してる人ばかりですから、そんなに急いで帰る必要も無いんですが…それまでこの艦にお世話になりっぱなしっていうのも…」

ユーノはあっさりと許容する。怒るところか申し訳なさそうにするのだった

「此方は全然構わないわよ?」

「でも…」

尚も遠慮するユーノだが

「なら…私の家に来る?」

「え?なのは?」

「それもいいかもしれないわね」

悩むユーノに声をかけるのはと同意するリンディ

「でも…」

「私はいいよ？」

「…じゃあ、お世話になります」

「うん！」

結局なのは家にお世話になることにしたユーノ

「もう昼だぜ」

「君はどれだけ寝てるんだ」

エイミイが目を擦りながら食堂に入り、後からツツコミを入れて入るリュウとクロノ

「2人共ひどい…3日も徹夜だったんだからね！」

「俺はアースラに保護される前、3日3晩寝ずにぶっ通しで戦った事あるからな？」

「うう…リ、リュウ君は遺伝子が凄いからだよ！」

少し意味不明な反論をするが

「龍の遺伝子があるって寝るわ」

「うっ…！」

真っ向から切って捨てられる

「あ、艦長。一緒にしてよろしいですか？」

「私はいけど…なのはさん達は？」

「大丈夫です」

「ならご一緒させてもらおう」

「何か飲むもん持ってくるよ」

「頼むよ」

「ありがとう」

クロノとエイミィがリンディの両隣にすわり、リュウが3人分の飲み物をとりに行った

「ほれ、紅茶でいいだろ？」

飲み物をとってきたリュウがクロノとエイミィの前に置き、みんなで色々な話を話した

「じ、じゃあ…君達は魔法の知識で戦っていたのか！？」

「0って言っても…ユーノ君が少しずつ教えてくれたし…」

なのはから告げられた事にクロノが驚愕し

「それでも、ちゃんとした魔法での戦闘訓練を受けたフェイトちゃん達を倒すなんて凄いよ！」

「確かに、凄い才能だわ」

エイミィとリンディが褒める

「そんなあ、才能なんて…」

若干照れて否定するのは

「俺に魔法の知識があってもなあ…」

『宝の持ち腐れですね』

「まったくだ」

「…なんで君達ってそんなにあっさり自虐的になれるの？」

リュウとドラグーンが呟いた一言を聞いてユーノが呆れたり

「そういえばなのはにはアースラでの最後の食事になるんだな」

「うん…」

リュウが尋ね、なのはが少し寂しそうに頷くと

「いつでも遊びに来ていいんだよ?」

「エイミィ…アースラは遊び場じゃないんだぞ…」

エイミィがなのはを誘い、クロノが呆れて窘める

「まあ、巡回中は暇なんだから、いいでしょ?」

「艦長まで…」

リンディまで許容し

「なら遠慮なく」

「君はアースラから降りないだろうが!」

「そうケチケチすんなって」

「だから降りないだろうが!」

「つたく…すぐキレる…だから最近の若い者は…」

「いい加減にしろおお!」

クロノとリュウのコントが始まる

「クロノ!俺はお前を倒す!」

「どっからそんな話になった!?!なんで倒されなきゃいけないんだ

「!?」

「ついでにユーノ！お前もだあ！」

「なんで僕まで!？」

ユーノを巻き込んだのドタバタ騒ぎ

その間他の3人はリュウ達をみて大笑いしていましたとさ

いろんな騒ぎ（主にリュウとクロノの漫才）があって…あつという
間になのは達の帰る日となりました

「今回は本当にありがとうね」

「協力に感謝する」

「ま、ご苦労さん」

リンディが微笑みながら、クロノが堅苦しく、リュウが片手を挙げて
ヒラヒラ振りながらそれぞれなのは達に労いの言葉をかけた

「ユーノ君、帰りたくなったらゲートを使わせてあげるから、言っ
てね？」

「何から何までありがとうございます」

リンディがユーノにゲートの使用を許可したところで

「「ありがとうございました!」「」」

「さよなら〜！」

なのはとユーノが声を揃えてお礼を言い、エイミィが手を振る

「……………なあ……………クロノ」

「……………なんだ？」

リュウとクロノが端からそれを見て呟く

「今生の別れみたいな雰囲気だけどさあ……………」

「……………ああ」

「……………またすぐに会えるよな？」

「言うな……………」

こんな会話があったとか

なのは達が帰って、少しの平凡な毎日を過ごしていたなのはの携帯に時空管理局から連絡が入る

「もしかして？高町なのはです」

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

連絡してきたのはクロノとエイミィ

「プレシア達が正式に本局に移動になった。本局の方で事情聴取と裁判が行われるが、全員ほぼ確実に無実だ」

「本当！？」

「ああ」

「あれからずっと証拠集めしてたもんね」

「エ、エイミィ！それに、リュウだって協力してくれたんだぞ！」

「知ってるよ〜だ」

クロノとエイミィがじゃれ始める

「リュウ君も…フェイトちゃん…よかったあ…！」

「それだけじゃないんだ、フェイトが本局に移動する前に君に会いたいらしい」

「フェイトちゃんが！？」

「ああ、今から来れるか？」

「うん！」

フェイトが自分に会いたがってる旨を聞いてドアを破壊しそうな勢いで転送ポートに向かうのはだった

…ユーノは？

注、ちゃんと肩の辺りにへばりついていきます（気を抜くと飛ばされそう）

「ハア…ハア…」

なのはが息を切らせて待ち合わせ場所に着くと

「僕とリュウにユーノ、アルフは向こうにいるよ」

そう言つてユーノを連れ、公園の隅の方に向かっていった

「フェイトちゃんに話したい事がいっぱいあったのに…フェイトちゃんの顔を見たら何を話すのか忘れちゃった…」

「私も…言葉に出来ないや…」

そして互いに見つめ合い

「でもね、嬉しかった…真っ直ぐ向き合ってくれて…」

「私も…話がしたかったから…友達になりたかったから…でも…これからお出掛けしちゃうんだよね？」

お互いに思っていた事を話し

「うん…少し長い旅になる…」

「また…会えるよね？」

「うん…少し悲しいけど…やっと始められるんだ…！本当の自分を…！」

自らの思いを伝えるフェイト

「今日来てもらったのは…返事を伝えたいから…」

「返事…？」

「君が言ってくれたよね？友達になりたいって…その返事をしに来たんだ。だけど…私は…どうしたらいいか分からない…」

リュウの時はかなり強引に友達にされました

「友達になるのは簡単だよ？」

「…どうやるの？」

「友達になりたい人の…目を見て名前を呼ぶんだよ？初めはそれだけでもいいんだよ。私は高町なのは！」

「…なのは」

フェイトがなのはの名前を呼んだ時、なのはが少し涙を流した

「…分かった事があるよ、友達が泣いてると…こっちも悲しくなっ

てくる…」

なのは泣いている所を見て、悲しい顔をするフェイト

「私達が次に会った時も…名前を呼んでいいかな？」

「もちろんだよ！」

「次に会った時は、名前を呼ぶから…なのはも私の名前を呼んで…」

「うん！」

こうしてなのはとフェイトが友達になり

「ユーノ、なのははいい子だね…フェイトがあんなに笑ってるよ…」

「クロノとリュウのコントを見せたらもつと笑ってくれるさ…」

ユーノがボソツと呟き

「ん？何か言ったかい？」

「いや…何でも無いよ…」

何だかお疲れ気味のユーノだった

「よう、アルフ」

「ああ、リュウ」

さつきまでクロノと話していたリュウがアルフに挨拶をしに来た

「まあ…俺もすぐに本局に行くことになりそうだな」

「何でだい？」

「身元不明だからな、俺」

サラツと言いました

「へ？」

「いや、身元不詳でミッドチルダで戸籍作って来ないと」

あつさりと重要な事を言う。これがリュウクオリティ！

「え…？じゃあ…家族は？」

「いねえよ、つーか俺の事話してなかったな…出身はどっかの研究所、Project・Dって名称の既に凍結された研究の実験体だ」

「え…」

かなり重い事実を簡単に言われてフリーズするアルフ

「そう…だったのかい？」

「気にすんなよ？俺が気にしてないんだし」

「でも…」

「別にいいって…今は、フェイトを支えてやってくれ」

「…うん」

気にするなと言われてもやっぱり少ししょぼくれるアルフだった（
具体的には耳と尻尾が垂れております）

「すまないが、時間だ…」

「フェイトちゃん！」

クロノが時間がきた事を告げると、なのはが自分のしていたリボンをフェイトにあげ、フェイトがなのはにしていたリボンをあげていた

「フェイト！受け取れ！」

リュウもフェイトに向かって何かを投げる

「これは…」

「魔力球だ、御守りぐらいにはなるだろ」

『微妙ですね、寧ろ呪われそうです』

激しく同意

「んだとコラ？」

「リュウ！ありがとう！」

リュウがドラグーンを握り締めているとフェイトがリュウに笑顔でお礼を言う

「アルフ、お前さんにもやるよ」

「いいのかい？」

「御守りだ」

「…ありがとう」

フェイトとアルフが顔を綻ばせ転送ポートに歩いていった

「じゃあな！フェイト！」

「またね！フェイトちゃん！」

「うん！またね！リュウ！なのは！」

フェイト、アルフはミッドチルダへと転移していったのだった

改めて…名前を呼ぼうか（後書き）

テスト週間なのに小説書いてる*です

これで無印編は終わりました！番外編で少しずつ設定を補完してから、第二部かな…番外編でやりたい事もあるし…

シスコン共也との死闘もいいかな…

ひとまず目先のテストを倒してきます。

前回の数？が2点という自分でも予想の斜め下の点数を叩き出したので、進級が危ないです。マジで数学の単位が取れません

では、逝ってきます！

番外編：……マジで？

ある日のアースラ内での出来事

「これが例のロストログアか？」

「ああ、何かを破壊したりはしないから本局に持って行くのは後回しになったんだ」

ふーん、とロストログアを指で弄ぶリュウ

大きさは指でつまめるくらいで、ぱつと見宝石

「これが、ねえ……」

「リュウ、それってロストログア？」

シミュレーションルームで話していたところにユーノがやって来る

「ああ、見るか？」

「うん、見せて欲しいな」

「じゃあ、僕はやることあるから後で返してくれよ」

クロノはそう言って去っていった

「どうだ？」

「うん…魔力を通したりして使うみたいだね」

「へえ…」

ユーノがロストロギアをまじまじと見つめる姿をのんびり眺めるリ
ユウ

「使ってみつか？」

「ええ！？駄目だよ！」

「冗談だって」

笑いながらロストロギアをユーノから受け取り

「返してくるわ」

「僕も行くよ」

リユウがクロノの元へ行こうとしたとき、ユーノもついてきた…その
時だった…

「あ…」

「どうしたのさ？」

「いや、魔力球が落ちちまって」

拾い上げようとしたとき

「何て言っただ？」

「あ…オイ…」

ユーノがよく聞こえなかったらしく、走り寄ってきたため、魔力球が踏みつぶされる

「うわあっ!？」

「クソッ!」

外部からの衝撃により圧縮されていた魔力が解放される

「不味い!ロストロギアにまで…!」

魔力が解放された余波でロストロギアを取り落としてしまい、ロストロギアがモロに魔力を受けて起動する

「うわあああ!？」

「ユーノオ!」

ロストロギアの近くにいたユーノが巻き込まれてしまい、リュウが助けようと突っ込むが

「があっ!」

ロストロギアが無差別に放っていた魔力の塊が直撃し吹き飛ばされる

「ユ…ユーノ…」

打ち所が悪く脳に衝撃が走り気絶してしまうリュウ

「チ…ク…シヨウ…」

「……ウ！リュ……！……！」

「あ……？」

「リュウ！」

「うおっ！」

ユーノに起こされて飛び起きるリュウ

「あれ…ここは？」

『アースラの医務室ですよ』

「…ああ！そうだ！ユーノは！ユーノはどうなった！？」

すぐにロストログアの事を思い出して取り乱すリュウ

『落ち着いて下さい』

「僕ならここにいるよ」

「あれ…いたのか…ん？」

隣に立っていたユーノに気付くが、何か違和感を感じたリュウ

「…ユーノ…だよなあ？」

『ええ、ユーノさん本人です』

「そっだよ？」

リュウが首を傾げる

「そんな事より大丈夫？吹き飛ばされてたみたいだけど」

「ああ…無事だが…」

まだ腑に落ちない表情のリュウ

「ああ！」

「どうしたの？」

リュウが何かに気付く

「お前って…そんなに髪長かった？」

「え？」

そう、ユーノの髪は短かったはず。なのに今は腰に届くぐらいの長さになっている

「ああ…後で纏めて説明するから、とりあえず官制室まで来てくれる？クロノも待ってるからさ」

「あいよ」

ベッドから起き上がり、官制室へ向かうリュウと後からついていくユーノだった

官制室にはリュウ、ユーノ、クロノ、リンディ、エイミィ、他の局員達が集まっていた

「結局何が起きたんだ？」

「単刀直入に言おう」

「なんだよ…そんな畏まって…」

リュウが疑問を投げかけると顔を引き締めたクロノ

「ユーノが女になった」

「…ハイ？」

真面目な顔で言われしばしフリーズするリュウ

「…ふざけてる？」

「いや、真面目だ」

「これがふざけならどれだけいいか…」

念のため確認するがクロノもユーノもふざけてるところかユーノが

マジで嘆いてる

「…………マジで？」

「ああ」

「…………マジかよ……」

思わず天を仰ぐリュウ

そして

「クソッ！」

壁を殴りつける

「あそこで俺が魔力球なんて持って来なきゃ……」

「リュウは悪くないよ……僕が足元をよく見てなかったから……」

「だから俺が持って来なきゃユーノが踏む事も無かったろうが……」

自分のやったことを悔やむリュウ

「謝ってどうにかなるわけじゃ無いが……すまない」

「別にいいよ、死んだ訳じゃないんだからさ」

「でも……スマン……！」

「だから…別にいいよ…」

悔し涙を流すリュウと泣きそうな顔のユーノ

「ひとまずスクライアの集落に帰ったらどうだ？部族のみんなに話さなきゃいけないだろう」

「うん…」

「その間にユーノ君を元に戻す方法を調べておくわ」

クロノとリンディからの提案に頷くユーノ

「でもユーノ君は魔法がしばらく使えないんじゃないかなかった？」

体が変化してしまった為リンカーコアが異変を起こして魔法が使えなくなってしまったのだった

「だったら俺が集落まで護衛をするよ」

「でも、リュウに迷惑が…」

「俺の不注意でこうなったんだ、迷惑なんて思わないぜ」

「じゃあ…頼める？」

「おう」

リュウが護衛の任を買って出て、ユーノをスクライアの集落まで連

れて行くのだった

そして出発の朝

昨日ユーノがなのはに呼び方を「ユーノ君」か「ユーノちゃん」のどっちがいいかを聞かれてクロノにからかわれたり
街を歩いていたら妙に注目されたり

知らない少年に告白されたり

変態に誘拐されかけたり（実際誘拐されたがリュウが速攻で犯人をボコボコにした）

一部の局員がユーノのファンクラブを作ろうとしたり（人数がかなりいたためユーノが嘆いていた）

リンディとエイミィに着せ替え人形にされたり

一悶着どころか6悶着ぐらいあったが無事？出発を迎える事が出来た

「じゃあ、行くか」

「うん…頼りにしてるよ？」

「おう…大丈夫か？」

「多分ね…」

転送ポートの前で出発前から疲れきった表情のユーノを心配するリュウだった

「えっと…スクライアの集落ってどこにあるんだ？」

無事目的地に着いたりリュウが向かう場所を聞くが

「スクライアは基本的に遺跡を転々としてるからね…遺跡を辿っていけば会えるね」

「果てしないな…」

「大体ルートは決まっているからいつかは会えるよ？」

笑顔で言うユーノに逞しいな…と感じるリュウだった

「じゃあ行こうぜ？」

「うん！」

2人で並んで歩いて行った

しばらく歩きながら話していると

「うおっ！？」

「うわっ！？」

地中からイソギンチャクがデカくなったような生物が出現
イソギンチャクの口の部分から触手が大量に出ている

「何なんだ！コイツは！？」

「沢山ある触手で相手を絡め取って無理やり捕食する危険生物だ…
！何でいきなり…！？」

基本的に危害を加えない限りは小動物等を捕らえている

「何かやる気だぞ…オイ…」

「うわぁ…」

イソギンチャクの岩に張り付く部分がナメクジやカタツムリのように這って動ける造りになっている為ゆっくりと接近して来る（その間メチャクチャ触手が蠢いてる）

「気色悪い…」

「気持ち悪くなってきた…」

『リュウ、あの生物についてデータを探してみました』

2人が顔を青くしているところにドラグーンからの報告

「何か弱点は!？」

『弱点らしいものはありませんが…1つ情報が』

「なんだ!？早くしろ!」

接近して来る化け物から後ずさるリュウとユーノ

『この時期のあの生物は繁殖期のように、人型の雌の生き物を捕獲して卵を産みつけるようです』

「……………」

ドラグーンからの最悪の情報に固まる2人

『オマケに仲間内でしか分からない周波で仲間を呼び寄せる習性があるので早く逃げた方がいいかと』

「さっさと言ええ！ユーノ！早く逃げ…」

ユーノを連れて逃げ出そうと振り返ったリュウが見たものは

「マジかよ…オイ…」

大量に蠢くイソギンチャク（大）

「アハハ…ハハ…」

『どうやら巣の方に向かってしまっていたようですね』

「冷静に分析してる場合かあ！」

ユーノが涙目で乾いた笑いを出しドラグーンが状況を分析する

「ほら、ユーノ！逃げるぞ！」

「逃げるってどこにさ…ボクが行っても足手まといだから…置いてつてよ」

ユーノが諦め

「ドラグーン！」

『術式起動』

「テンペスト！」

リュウが雷を前方に放つ

範囲を絞った事により威力が増したため道が開ける

「脱出路は…俺が作る！」

ボレアスを片手でふるい片手でユーノを抱き上げる

「わっ！？」

「掴まってるよ！」

再びテンペストを放った後に全力で跳躍、近くの岩場に着地する

「オラァ！」

それを延々と繰り返した結果

「ハァ…ハァ…」

「大丈夫？リュウ…」

体力が尽きて四つん這いになっているリュウと側に座っているユーノの姿が

「なんとか…抜け出したか…」

「うん、もう見えないよ」

『危なかったですね、あのままだったらユーノさんが触手陵辱プレイでしたよ』

「ゾツとすること言わないでよ…」

ドラグーンの言葉に思わず体を抱くユーノ

「でもな…なんでアイツ等はユーノの事をすぐに感知したんだ？」

『おそらくロストログアの影響でユーノさんの女性フェロモンが大量に放出されているからですね』

「それ…本当？」

『ええ』

「遂に体が完全に女になったか…」

「そんなあ…」

ドラグーンの言葉に

orz こんな感じになるユーノ

「とりあえず周りを警戒しながら行こうや。ドラグーン、近くの遺跡を探してくれ」

『了解しました』

無事にスクライアの集落まで行けるのか？

ユーノの貞操は守れるのか？

「初めてが化け物とか嫌だあ！」

そして数日後

この間にも様々な繁殖期の生物が襲ってきた

人型のトカゲや4翼の巨大な鳥、ヒトデのような生き物や二本足で歩くトラ（オマケに両手に剣を持ってる）体長は大人の腰辺りまでしかないが、動きが素早い小人（コイツ等に一回ユーノが捕まったがリュウが殲滅した）

「ここにいるといいな…」

「そうだね…」

遂に8個目の遺跡に辿り着いた頃には2人共ボロボロだった
（ユーノが途中で服を破かれた為リュウに至っては上半身裸）

『多数の魔力反応です』

「よっしゃ！遂に見つけたか？」

『ですが、何か巨大な魔力反応と戦闘中ですな』

「何！？」

「っ！」

「ユーノ！」

ドラグーンから戦闘中と聞いて走り出すユーノ

「クソッ！ドラグーン！戦闘区域は！？」

『遺跡に入って真っ直ぐ行っ たところの広間ですね』

「了解い！」

すぐさまルファルを起動させて走り出すリュウ

「ハア…ハア…」

遺跡の内部を走るユーノ

「みんなが…戦ってる…スクライアの部族は戦闘手段なんて持っていないのに」

戦うぐらいなら遺跡調査やロストロギア発掘、という部族なので覚えるのは基本的にサポート魔法のみ

「ハア…ハア…」

「ユーノ！」

ユーノが走っているとリュウが追い上げてくる

「リュウ…！お願いだ…みんなを！」

「勿論！」

更に加速して、挙げ句の果てに壁を足場にして跳んでいくリュウだった

「よかった…ひとまず安心だ…」

最強の殲滅兵器が投入されました

遺跡内の広間では

「クソオ！チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「『結界！』『』」

なにやら魔法でドラゴンを抑え込んでいる様子

ガアアアア！

体を締め付けられ鬱陶しそうに体を動かす竜

「クソツ！このままじゃ保たない…！避難はまだか！」

「今外に何人が向かっている！」

「不味い！バインドが！」

竜が二、三度体を震わせただけで壊れてしまうバインド

ガアアアア！

「しまった！結果まで…」

「うわあああ！」

結界が破られてパニックになってしまう

「クソッ！我々も逃げるぞ！」

散り散りになって逃げ出すスクライアの調査隊…だが

「う…うわあああ！」

1人の老人が逃げ遅れて追い詰められる

ギャオオオオオ！

竜が腕を振りかぶったその時

「クリムゾンノート！」

リュウが炎を纏った拳を竜の横つ面に叩き込む

グギヤアアア！？

「へっ！ざまあ！」

「ア…アンタは…!？」

「あ？スクライア一族だよな？アンタらって」

急な助けに困惑するのを無視して尋ねるリュウ

「あ、ああ…そうだが」

「よし！ユーノが外で待機しているはずだから逃げてくれ！」

「ユーノが？アンタ…一体…」

「いいから逃げな！」

またも老人のことを無視して竜に突っ込んでいくリュウであった

「ユーノか…無事だったのだな…！」

リュウに言われた通り走って外に逃げ始めた老人だった

広間で対峙するのは巨大な竜と小さな人

竜は怒り狂って咆哮を放つ

人は静かに自らの魔力を集める

ガアアアア！

「うるせーよ…ドラグーン！」

『術式起動』

「クリムゾンノート！」

リュウの両腕に纏われるのは荒々しく猛る炎

「うおおおお！」

何時もと違い、纏う炎の形が変化していく

「叩つ斬つてやるよ！」

両腕に纏われていた炎が全てリュウの右拳に集まり剣を象る

ギャオオオオオオ！

「オラアアア！」

真っ向からぶつかり合う人と竜

そして

ギャオオオオ……

竜の首が斬り飛ばされ、胴体が横たわる

「ハッ！プレシアの方が強かったぜ！」

竜の死体を一瞥したあと踵を返して行くリュウだった

その頃外では

「みんな！」

ユーノが中から出て来た調査隊に駆け寄る

「えーと…アンタは…？さっき俺達を助けてくれた奴の仲間か？」

「え？あ…えーと…は、はい…」

自分の姿が女になっていると忘れていたユーノが声をかけたが気付いてもらえず寂しそうな顔になる

「ところでさっきユーノが外にいるって聞いたんだが…どこにいますんだ？」

「あーと…えーと…あの…その…」

ユーノが狼狽していると

「疲れた〜」

『それ程強くなかったでしょう』

「魔力を制御したからな…何時もより疲れた」

『そうですか』

「リュウ！」

「お、ユーノか」

リュウが遺跡から出て来る

「ユーノ？アンタが…？」

「あ、はい」

「…そうか…すまなかったな…前ロストロギアを追っていった奴がユーノって名前だな、勘違いしちゃったよ」

「いえ…あの…」

「おっさん、アンタらがスクライアなんだよな？」

老人の勘違いを正そうとしたユーノを遮ってリュウが話しかける

「ああ、そうだが…何か用なのか？」

「ユーノ・スクライアを連れてきた」

「は？この子がユーノ？アイツは男だぞ？」

「ロストロギアと俺の所為でな…性別が変わっちゃったんだ…」

拳を握りしめて話すリュウに

「…嘘だろ？」

「本当だよ」

老人が啞然とする

「お前さんが…ユーノ？」

「はい、ユーノ・スクライアです」

「はあ…ま、まあとりあえず長老のそこに行つてこい。挨拶して来なきゃな」

「はい…」

半信半疑の老人に勧められて長老の元へ行くユーノ

「アンタはついて来てくれ、恩人だからな、もてなさせてもらつよ」

「ありがたい」

番外編：……マジで？（後書き）

はい、というわけでユーノ君のTSでした

番外編でキャラとのカップリングやTS、閑話で本編に繋がる話をやっていたこうと思います

今回書いた番外編をいきなり前編、後編に分ける事になるとは…

基本的に番外編は1話完結型で要望や作者が暴走した場合その先を書いたりします。

何か番外編や閑話で「〴〵な話を書いて欲しい！」等の要望があればドンドン感想板にどうぞ！

では、次回お会いしましょう！

番外編：そしてユーノは…（前書き）

前回書くの忘れてた…

キャラ崩壊&TS注意！

番外編：そしてユーノは…

ユーノの状況をじいさんに教えたリュウ

「ふむ…性別を変えるロストログア…か…すまんが分かんのお…」

「むう…ユーノはどうしたら元に戻るんだ…」

2人で頭を抱えていると

「お爺さん、今夜宴会を開くそうですから手伝ってくれて長老が」

「宴会をねえ…また余計な事をしんといいがな…」

よっこいしょ、と腰を上げてテントを出て行くじいさん

「じゃあ俺も何か手伝う事は…」

「ボクの帰還とリュウを歓迎する宴会だからボク達は休んでろって」

「じゃあそうするか…道中色々あったし…」

「ホントにね…」

『ユーノさんの貞操が散るところでしたね』

「うわぁ…」

「頑張ったな…ユーノ…」

思わずユーノがリュウに寄る

「なんか仕草もだんだん女に近付いてるな……」

「ええ！ホント！？」

少しずつ女になってると言われショックを受けるユーノ

「まあすぐに治るだろうよ」

「だいいけどなあ……」

なるべく楽観的に見ようとするリュウと諦めかけているユーノだった

「宴会まで寝るわ……」

「ボクも……」

ここまでの疲れが一気に出たのか2人共寝入ってしまう

そこへ様子を見に来たおばさんが

「アハハ！仲がいいねえ、付き合ってるのかねえ」

笑いながら去っていったとか

リュウ達が寝始めてから数時間後

「ふわ～あ……」

『起きましたか』

「ああ…」

リュウが欠伸をしながら伸びをして寝ぼけ眼でドラグーンに返事をする

「まだユーノは寝てんのか…」

『はい、故郷にきたこともあるのでしょう。この世界に来てから一番よく眠っています』

「ならまだ起こさなくていいか…にしても」

寝ているユーノを覗き込んで

「よく寝てんな」

ユーノに掛け物を掛けて微笑みながら外に出たリュウだった

「体動かしたいな…」

『でも模擬戦も出来ませんよ』

「むう…狩りでも行くか…?」

『ここらで食べられる生物ですか…』

道中遭遇したのはグロテスクなモノや爬虫類が二本足で立ってたり

毒を体液に含んでいたり危険なモノや食べるのを躊躇いモノばかり

『発見しました』

「結構いんのに何で俺達はあんなにしに遭遇しなかったんだ…？」

ドラグーンから提示されたデータには人を襲わない生物も結構な数が載っていた

『ユーノさんのフェロモンの所為かと』

「…そういやここは平気なのか？」

ユーノに集まって来るんじゃないか心配するリュウだが

『人が沢山いるので何時もより襲ってくる化け物が少し多い程度で済むでしょう』

「なら安心…なのか？」

不安そうに聞くリュウに

『…大丈夫でしょう』

「じゃあ近くにいます奴を狩りに行くか」

そう言ってドラグーンを首から外し

「ユーノの側にいてくれ」

『伝言でも？』

「いや、いざとなったらプロテクションで守ってくれ」

魔力球をドラグーンに内蔵する

『了解しました』

「じゃ、頼んだぞ」

リュウは狩りに、ユーノは未だに眠っているのだった

数時間後

「こんなもんか…」

リュウの側には結構な数の生け捕りにされた生物がいる

「コレは…食べんのかな…」

巨大イソギンチャクが襲ってきた為倒したが処分に困るリュウ

「まあいいか」

とりあえず全部持って帰ることに

一方ユーノは

「ん…ああ…？」

艶めかしい声を出しながら起きる

『殆ど女性ですね』

「いきなりだね…あれ…リュウは…？」

苦笑いしながら目を擦りリュウがいないと分かると不安そうになる
ユーノ

昼間も夜間もリュウが守っていたため随分とリュウに依存している
様子

『狩りに行ってます。直に戻ってくると』

「そっかぁ…」

座り込むユーノ

『完全に女性の仕草ですね』

座り方が女座りになっており、男時より背が伸びている為普通の女性に近い

「え？うわわわ！？」

『完全に無意識ですか…』

自分のしていた事に気付いて慌てるユーノと若干呆れ気味のドラグ
ーン

「とりあえず…みんなのここに行こつか…宴会の準備が始まる頃だろっし」

ドラグーンを身に付けてテントの外に行くユーノだった

外に出るとスクライアの大人達が宴会の準備をするために走り回っていた

「あの…何か手伝う事って…」

「ん？嬢ちゃんにはこっちは無理だろう。あつちで調理の下拵えしてっから行ってきな」

そういつて再び走っていくおっさん

「料理は…したこと無いね…」

自分に出来ることが無いと悟り大人しくリュウの帰りを待つ事に

「まだかなあ…」

頼杖をつきながら待っているユーノに近付く影

「お前さんは…わしらを助けてくれたもんの連れじゃったな…」

「え？はい…」

スクライアの老人がユーノに話しかけてくる

「あ奴は何者じゃ？長年生きているとな…その生き物の気配と言う

か…魂のようなものを感じる時があるんじゃないよ…」

「魂？」

「ああ…じゃが、あ奴からは複数感じられた…」

「リュウから…？」

老人に語られる話に聞き入るユーノ

「あ奴自身のモノ以外に…とてつもなく巨大なモノを感じたのじゃ…」

「巨大…？」

「ああ…奴自身にも制御できるか分からんモノがな…」

語り続ける老人

「あ奴は周りを遠ざけようとしてはおらんか？何かを悔やんではなかったか？」

「……！？」

ユーノには思い当たる事が幾つかあった

まずはリュウの力、確かに何かが宿っていればロストロギアの寄生したSクラス魔導士にも勝てるだろう

そしてなのはが家に連れて行くと言っても遠慮していた事、基本的にドラグーンというか1人で行く事

誰も近付けようとせずにいる

自分が女になった時はかなり悔やんでいた、まるで過去に大切な何

かを無くしてしまったように

（ユーノとじいさんの深読みです。実際リュウはこんな事微塵も考えていません。ユーノの事については只の責任感から）

「リュウ…っ！」

思わず泣きそうになるユーノ

自分をもっと早く気付ければ…相談を受ける程仲良くなれていれば…リュウの悲しみを一緒に分け合えたのに…

そう思い落ち込みユーノ

「今からでも遅くはない…あ奴の側にいてやりなさい」

「…はい！」

はい、勘違い&ユーノちゃんフラグ立ちました

そんな会話がされていれとは全く知らないリュウは

「へつくし！…うゝ風邪か？ここら特有の細菌とかだったら厄介だな…」

獲物を引きずりながらスクライアの集落に向かっていた

リュウがスクライアの集落に帰ってきて（ユーノが若干涙目で抱き付いてリュウが困惑してたり）獲物を渡して休憩、そしてスクライア一族の宴会が始まりました

みんなの楽しそうな笑い声、遺跡調査が無事に済んだ喜び、誰一人欠けずにロストログアを回収出来たこと、調査隊を助けてくれたリユウに対するお礼（女性からお礼を言われてるのを見たユーノが少し不機嫌に）ユーノも自覚はしてないがかなりの美人なので男衆からガン見されたり、声をかけられたり、酔った長老に流されてリユウも酔っ払ったりと、だんだん宴会も終盤に近付いてきた頃

「あそこで俺がドジ踏まなきゃな」ユーノは女にならなかったのに……」

「ほう？つまりユーノが女になったのはお主の所為だと？」

「長老！別にリユウの所為じゃ……」

長老にリユウは悪くないと伝えようとしたユーノだが

「いや、俺が悪い！言い訳なんざしねえ！」

「ほほう、じゃあ責任もお主にあるんじゃない？」

長老の目が妖しく光る

「ああ！責任でも何でも取ってやるよ！どんな事してでも償ってやらあ！」

注、リユウは今かなり酔っばってます

「リ、リユウ！」

「だったら、ユーノに恋人が出来なかったらお主が貰え」

「ち、長老!？」

長老の一言に顔を真っ赤にするユーノ

「どうした? あ奴と結婚すれば少なくとも生活は出来るぞ? あの腕っ節なら管理局に入っても囑託でも食っていけるだろう」

「そっいつ問題じゃ…」

「いいぜ」

「へ?」

ユーノが長老の言葉を否定しようとする

「ユーノ」

「え、あ、な、何? リ、リュウ」

「お前は俺が嫌か?」

「い、いや…別に嫌だっわけじゃ…」

「じゃあいいだろ? 他に好きな奴がいるわけでもないんだしよ」

注、マジでリュウは酔ってます

「なあ…ユーノ…?」

そしてゆっくりと接近するリュウの顔

「え、ちょ、ま、り、リュウ…何を…」

「何って…ナニだよ…」

ユーノの言葉をはぐらかして近づくリュウ

「え、あ、ちょ、ちょっと…」

そして…

「~~~~~！」

ユーノが目を瞑り

ドサッ

「へ？」

「すー…すー…」

「ね、寝てる？」

ぶっ倒れて寝るリュウ

よくみたら周りの大人達も酔いつぶれて寝ている

「……ハア」

少し安心したように息を吐くが

「リュウのバカ…」

顔を赤らめて呟く

『完全に女性の思考になってますね…』

そんなドラグーンの呟きも聞こえてなかったとか

そして次の日

「ふわゝあ…」

目を擦りながら起きるリュウ

「あれ…昨日布団に入ってたっけ…？」

ボーっとしていると

「あ、リュウ！起きたんだ」

「おう、ユーノか」

テントの中にユーノが水を持って入ってくる

「水飲む？」

「ああ、貰うわ」

「はい」

「ありがとうございます」

水を受け取り一気飲みするリュウ

『そう言えば昨日長老が来てくれと言っていましたか』

「長老が？一体なんだ？」

「とりあえず行こうか」

こうしてユーノに連れられて長老の所に向かうリュウ
因みにドラグーンはまだユーノの首に掛かったまま

「リュウって…昨日の事覚えてるのかな…？」

『おそらく忘れてますね』

『「はあ…」』

デバイスにまで呆れられてるリュウは

「何か言ったか？」

欠伸しながらユーノの後ろを付いてきていたのであった

「さて、来てもらったのは他でもない…ユーノの事じゃ」

長老の家に来たユーノ、リュウの2人はお茶を出されて座っている

「ユーノの事…か」

「そうじゃ」

「さつさと元に戻す方法を見つけ出さなきゃいけないな…」

リュウが考え込んでいると

「やっぱり忘れてる…」

『我がマスターながらアホですね』

ユーノが落ち込みドラグリーンが呆れる

デバイスに馬鹿にされるリュウって…

「いや、違うぞ」

「は？じゃあ何だよ？」

長老の言葉に首を傾げるリュウ

完全にユーノを貰う発言を忘れている模様

「お主が何時ユーノを嫁に貰うかじゃ」

「……は？」

「やつぱり……」

長老の言葉に固まるリュウと呆れ始めたユーノ

「え？ユーノを貰うって…誰が？」

「お主じゃ」

「はい？」

「昨日宴会の時に言ったじゃろうが？ユーノを貰うと」

「……………ああ！」

ようやく思い出したリュウ

「アレ本気なの…？」

「何を言つとるユーノ、当たり前じゃ」

「むう……」

長老はユーノをリュウの嫁にする気満々

「俺はいいけどよぉ…ユーノはいいのか？」

「へ？」

「いや、だから俺でいいのか？」

「え、えつと…リュウはいいんだよね…？」

まさか自分に来るとは思ってたのか、リュウに問われうるたえるユーノ

「別にいいぜ？ユーノの事嫌いじゃねえし」

「え…と…」

リュウからはokを出され迷うユーノ

思い浮かべるのは今までのリュウの言動

P・T事件のときは時空管理局でもないのに協力してくれた。

遠距離は全然戦う術が無いのに接近戦では無類の強さを誇るり、強い力を持つのに近寄り難い事なんて無かった。寧ろリュウから寄ってきた。

女になった時は真っ先に自分の護衛を買って出てくれた。（責任感からです）

ここに来るまでに何度も危険な目にあつたのに、自分は諦めかけたのにここまで連れてきてくれた。

昼間も守ってくれたし夜間も殆ど寝ずに守ってくれていた。

スクライアのみんなが危険だった時、自分の身を省みずに竜を倒してくれた。

「……………」

「どうした？ユーノ？」

「いいよ…」

「え？」

「リュウと…結婚しても…いいよ」

「マジでか」

多分断られると思っていたのだろう。思わず停止するリュウ

「ヒヤッハー！祝言じゃあああ！宴じゃ宴会じゃあああ！」

顔を真っ赤にしているユーノの隣でバカ騒ぎするジジイ

「アンタ…バカ騒ぎしたいだけだたんじゃねーの…？」

「それ…本当？長老…」

復活したリュウが呆れながら言い放つとそれに反応したユーノが黒いオーラを放つ

某魔王のOHANASIの様に

「待て待て待て！ユーノ！お主らを祝うだけじゃ！他意など全く無い！」

「本当…？」

「勿論じゃ！孫のように可愛がってきたユーノを祝いたいだけじゃ！」

「それならよかった！」

「本音はどうなんだ？じいさん」

ユーノをがあっさり納得したためリュウがジジイに呟くと

「んなもん決まっとするじゃろうが！酒が飲みたいんじゃないじゃああ！」

「やっぱりな…」

「へえ…そうなんだ…長老…」

再び黒いオーラを醸し出すユーノ

「い、今のは冗談じゃ！本音はさっきの…」

「問答無用！」

「ちょ、やめ、ギアアアアアアアアアア！……！」

「くわばらくわばら」

断末魔が聞こえるテントから逃げ出すリュウであった

まあ色々あってリュウとユーノは結婚する事に（年齢的に正式では無いが）

もともと魔法適性等からリュウとの相性も良かったユーノ

リュウとユーノのコンビは止められないらしい（ユーノがバインドで捕らえてリュウが瞬時に潰す、一瞬油断しただけで戦場からさようなら）

その後リュウは囑託魔導士、ユーノはやっぱり無限書庫の司書長リュウは犯罪者の間で恐れられ、「死神」「魔法使つてねーのに何であんなに速いんだよアイツ」「攻撃通らねーんだけどマジで」「

終わったな、アレが来たらマジ終わったな」

など大半が何故か感想になっていたりするがこんな感じで呼ばれてたりする

ユーノがリュウの仕事を手伝った時、犯罪者達は全員逃げ出したらしい（後から全て捕まったが）

ユーノはリュウにぞっこんでリュウもそれなりにユーノに応えている先日偶然ユーノが犯罪者の人質になった時はD-ダイブを使ってまで犯罪者の組織ごと潰した

リュウがクロノに頼まれて書類を取りに來たりした日などはユーノがリュウにべつたりの為書庫に甘い空気が広がり、最近司書達がブラックコーヒーを好むようになったとか

クロノはリュウといいコンビだったので少し寂しいらしい

リュウがフラグを立てた金色の人はしばらく元気がありませんでしたミッドが一夫多妻制を導入していると聞いて一気に元気になりましたが

そして数年後：闇の書事件も終わり、なのは達が六課を設立する一年前、遂に籍を入れる事にした2人だが…

「やっぱり納得出来ない！」

金色の死神が脱ぐ（バリアジャケット的な意味で）

「結婚などさせるかぁ！」

気付いたらフラグを立ててたヴォルケنزを代表して烈火の将が立ち上がる

「リュウ兄さんは…渡さない！寧ろ私が貰う！」

何時の間にか妹ポジションにいたティアナ

「私もこのままじゃ気が済まない！」

まだあの頃は分かっていなかったけど、今なら分かる…自分はユーノが好きだったと！
思い人を取られた魔王が龍を狙う（抹殺的な意味で）

龍は誤字ではありませんぬ

今式場で死神vs辻斬り侍vs凡人vs魔王の死闘が始まる！

その頃リュウは…

「うるせーな…あいつら」

ユーノと一緒に離れた森の中に転移していた

「やっと2人だね…」

「ようやく静かになったな…」

落ち着くリュウと寄り添うユーノ

「そう言えば何で最近構ってくれなかったのさ？寂しかったのに…」

耳があつたら垂れてそんな程落ち込むユーノ

「ほれ、コイツの為だ」

「え…？これを…ボクに？」

「お前以外に誰にやれと」

リュウが差し出したのは、ユーノの指に丁度いい大きさの指輪
（見た目はご自由に…ご想像下さい）

「ありがとう…！」

「おう、大事にしるよ？」

「うん！」

箱を受け取り指輪を取り出すユーノ

「付けてやるよ」

「ありがとう…」

ユーノの指に指輪を嵌めるリュウ

「大事にするね！」

「おう」

その後2人はしばらく無言で寄り添っていましたとさ

番外編：そしてユーノは…（後書き）

やっとグダグダでキャラ崩壊な話しが終わった…
番外編は基本i fなので本編には関係ありません
では、また次回お会いしましょう！

閑話：母として

これはフェイト達が本局に転送される少し前のこと

「プレシアはどうなった？」

「変わらないよ、裁判が終わったらフェイトを突き放すつもりだ」

アースラの一室でリュウとクロノが話をしている

「アリシアの方は？」

「意識は覚醒したんだが、状況が把握出来てない
現在少し混乱してるな」

「そっちはすぐに治まるな……」

「ああ……」

「ハア……」

アリシアとプレシアの事についてため息を漏らす2人

「とりあえず俺はプレシアんところに行ってくるわ」

「何しに行くんだ？」

「色々聞きたい事があるからな」

「分かった、監視員には伝えておくよ」

「ああ、頼んだ」

軽く手を振りながら部屋を出て行くリュウ

「…上手く行くといいが…」

頬杖をつきながらもう一度ため息をつくクロノだった

リュウがやってきたのはプレシアが拘束されている拘置所

「お？レンドル、お前がここの見張りだったのか」

「それでもそれなりの位置にいるんでね」

拘置所の前に待機していたのはレンドル、デバイスは待機状態で一応何時でも動ける状態

「別に見張りなんぞ要らんとと思うがな…」

「まあそうだろうが、それなりに対処はしておかなきゃな。立場つてもんがあるしな」

「そつだよなあ…」

歯痒そうな表情で拘置所に入っていくリュウを見て

「出来るのかねえ…執務官殿が何回言っても聞いてねえのに…
まあ…あいつなら出来そうかな」

誰にでも分け隔てなく接するリュウの姿を思い浮かべて笑みを浮かべるレンドルだった

「おっす、元気か？」

「貴方が…」

拘置所とは言ってもプレシアを拘束などはしておらず、部屋から許可無く出てはいけないというだけ
流石に部屋は一緒に出来ないのかフェイトやアルフとも別の部屋に宛てがわれている

「今日は聞きたい事が幾つかあってな」

「Project・Dの事ね？」

「ああ、話してもらうぜ？」

戦いの時には話さないと断っていたのでそれなりにクロノと相談してはいたのだが

「ええ、何から聞きたいの？」

「え？教えてくれんの？」

あっさり承諾されて拍子抜けのリュウ

「あの時はロストログアに乗っ取られていた、オマケに感情や思考を負の方向に持って行くのよ？」

「ああ…そっぴやそうだったな…」

ま、あの時はロストログアのせいだった、ということだ

「んじゃあ早速…先ずは研究者は全員捕まったのか？」

「私が知る限りでは数人が逃れたわね、だけど逃れたのもすぐに殆どが捕まったわ」

リュウの問いにプレシアは淀みなく答え、その返答に少し考え

「じゃあ捕まってない人数と、研究員としては位はどの辺りだったんだ？」

再び問いかける

「1人ね、研究主任でJ・Sの複製品とか名乗ってたわね…」

分かる人は分かりますね

「J・Sう？誰かのイニシャルか？」

「有り得るわね」

そして再び思案顔になるリュウ

「分かった、他に思い当たる事があつたら教えてくれ」

「ええ、あの計画についても思い出してみるわ」

ここで実験についての質問を終えて

「次に…何故フェイトを拒絶する…？」

「……………」

リュウに投げかけられた質問に黙り込むプレシア

「フェイトはアンタの娘だ…アンタもそんな事分かってんだろ？」

「分かってるわ…分かってるけど…今更親面しろって言うの？今まで酷いことばかりしてきたのに？」

フェイトの事は娘だと思っている。

しかし今までは自分はロストログアに寄生されていたとはいえ、酷い事ばかりしてきた。

「今ままで酷い事しかしてこなかったんだろ？」

「だったらこれからは親らしく接してやればいいじゃねえか」

「ずいぶんと簡単に言うのね…」

リュウを睨みつけるが

「そうか？それが親つてもんじゃねえのか？」

「俺は親がいないから知らんがな」

「そうね…あなたもフェイトのような境遇だったわね…」

ふと気づいたように目を伏せるプレシア

「あいつはまだ親がいる。お前が親なんだろう？」

「それは…そうだけど…今さら出来るわけ無いじゃない！」

私はあの子を愛する資格も…あの子に愛される資格も無いのよ！」

心の中では愛したい、愛されたいと思っているが

今までの自分の言動をはっきりと覚えているため、行動に移せないでいる

「…アホかお前は」

「何ですって？」

自分の思いをあっさりとアホ呼ばわりされてムッとなるプレシア

「誰かに愛されるのに…誰かを愛するのに…資格なんざいらねえ！お前は分かってないだけだ…フェイトとの接し方を！」

「……………っ！…！」

自分の思いを当てられて動揺する

「お前はフェイトを愛してやりたいんだろ！？だったらそうすりゃいいじゃねえか！フェイトはお前に愛されたいとずっとずっと思っていたんだ！望んでいたんだ！！！」

「私は……っ」

プレシアが唇を噛み締め手を強く握る

「いいじゃねえか…今までは確かにヒデエ事をして来たんだろうよ…
…ならさ…その分これから思い切り愛してやれよ…！家族での思い
出を…偽りじゃない…コピーじゃない本当の思い出を…作っていつ
てやれよ…！」

「だけど…私は…私は………」

「まあ…よく考えろよな…俺は行くから」

そう言い残して部屋から去っていくリュウ

「……………フエイト」

悩みながら無意識に呟くプレシアだった

「おっす、どうだった？」

「ああ、聞きたいことは聞けたよ」

部屋を出ると同時にレンドルが声をかけてくる

「よかったじゃねえか！んで…あの娘の事は…？」

「まだ分からないな…考え直してくれるといいんだけどよ…俺はクロノんところに行くから」

煮え切らない表情で戻っていくリュウ

「お前なら出来るさ…きつとな」

そんなリュウを見送りながら呟いているレンドルだった

クロノのところに向かう途中

『ところでプレシアさんにはアリシアさんが生きていた事を伝えたのですか?』

「…あ」

『まったく…あなたはいい加減というか…適当というか…』

「そっいうなって…次あった時にでも伝えりゃいいだろ」

説教臭い事を言っけていても相変わらず適当な性格のリュウだった…

閑話：母として（後書き）

今回は少し説教臭いリユウでお届けしました。

アリシアについてはまた次の機会という事で…

後何話か閑話と番外編やったらA・S編行こうかな…

少し長くなるけどやりたい話があるんだよな…

まあ、考えておきますので、次回もよろしくお願いします！

閑話：すっげー疲れた…

唐突だがみんな、君達はいきなり自分よりも年が低かったり、精神年齢が低い…簡単に言えば子供だな

もしもその子供に懷かれたり、遊べと言われたらどうする？
え？何でいきなりそんな事を聞くなって？それはだな…

「今まさにそんな状況だからだよ！」

「す…す…す…」

現在俺のベッドを占領して眠っているのは金髪の少女…え？フェイトじゃねえよ

フェイトよりも小さいな…みんなも忘れてんじゃね？

アリシア・テストロッサだよ…今は寝てるから静かだが…起きるとうるっせーんだよな…

妹？のフェイトはかなり落ち着いてるのに…何でアリシアはこんな騒がしいんだ…？

え？何で俺がアリシアと一緒にいるかって？それはダイジエストにお送りしよう、あまりグダグダと話しても長いだけだからな

みんなもダラダラと長い話を聞くのは嫌だろう？

じゃあ、どうぞ〜

前回プレシアに説教した俺、一旦クロノンとこに行ってからアリシアの病室へ

病室では相変わらず自分は死んだのに、まだ生きてると混乱しているアリシアが

自分が死んだ時の状況を臆気ながら覚えているらしい

混乱してるアリシアに状況説明

しかし簡単には納得しない、つーか夢だと思ってる

めんどくさいので在り来たりな方法（頬を抓る）で夢じゃない事を教えてやる

まさか本当に信じるとは思ってなかったが、夢じゃないのかと聞いてくるので、もう自棄になってプレシアに会わせてみた

プレシアにアリシアが生きていた事を、話すのを忘れていたのを忘れていた俺はアリシアを見たプレシアに突き飛ばされて壁に叩きつけられる（邪魔！みたいな感じで俺を突き飛ばしてきたプレシア、本当にロストロギアに寄生されて体力衰えてんのか？）

そんな俺をシカトしてプレシアとアリシアは感動のご対面

2人共泣きながら抱き合ってる中、俺は鼻と額をさすりながらそれを眺めていた

ようやく2人が落ち着いたので、夢じゃないことをアリシアに認識させた後、もう一度現状説明

やっとの事でアリシアに分かってもらえた

話に出て来たフェイトについてアリシアが聞いてきたので事細かに説明

すると今度はアリシアがプレシアに説教を

曰わく妹を苛めるな！だそうだが
見た目ではお前が妹だけだな…

プレシア、アリシアに怒られてあっさりとフェイトと向き合う事に
んで色々はなした後、何故かアリシアに遊べと言われ俺の部屋に
散々遊んだ挙げ句、アリシアは疲れて俺のベッドを占拠して眠りに
ついた 今ここ

「はあ…」

だから何で俺がアリシアの遊び相手なんだよ…
他にもいるだろ…フェレットとかフェレットとかフェレットとか…
(ユーノの事です)

アレは子供に与えたら最高の囲になるんだから…呼んでこいよな

「うゝん…」

「ん？起きたか？」

「あ…リュウ？」

寝ぼけてんのか？俺以外の誰に見えるんだよ

「おう、ここにいるぞ」

「リュウ」

「ハイハイ…」

俺の胡座の上に座ってくるアリシア
プレシア曰わく、側に居れない自分の代わりに側に居てやって欲しいらしい
1人ぼつちで死んでいった事に加えて、ずっと目を覚まさずにいたんだ
誰かに甘えたいんだろ

「えへへ…」

リュウは…居なくならないでね
1人ぼつちは嫌だから…」

「俺はちゃんとここにいますぞ？」
大丈夫だ、勝手に居なくならないからさ…な？」

「…うん！」

笑っていたかと思うと急に寂しそうな口調になってしよぼくれる
…ずっと1人で居たようなもんだからなあ…不安なんだろう
俺に背を預けてくるアリシアの頭を撫でてやると、こっちは顔が見えないが、多分笑ってんだろ…頷いた後機嫌良さそうに鼻歌を歌い始めたのだったとさ…
もう…お前は1人じゃねえからな…

「リュウ…ありがとね」

「ん？何がだ？」

「何でもないよ」

「何じゃそりゃ…変な奴…」

閑話：すっげー疲れた…（後書き）

1日遅いけどあけておめでとうございませう

すっかり忘れてたアリシアさんの登場でございます

ちょっと短い気もするけど…

今年も頑張りますので、よろしくお願いします！

閑話：誘拐は犯罪です

S i d e アリサ

何でこんな事になっちゃったのよ…

「おい、確か用があんのは月村の娘だけじゃなかったか？」

「何かアイツ等がバニングスグループの娘も誘拐して更に金を手に入れようって話らしいぞ？」

私の目の前で2人の男が柱にもたれ掛かっていて、片方の男が向こうの方で集まってる男達を示してる

「悪いな嬢ちゃん

とりあえず金さえ入れば解放してやっからさ」

今日は迎えが無いから近道しようなんて考えたのが馬鹿だったわ…私とすずかが歩いて帰っていると、突然車に連れ込まれてこの廃倉庫に連れてこられた…

さっさとこんな所潰しておきなさいよっ！

すずかは2階に連れて行かれて、私は10人ぐらいの男達に見張られてる

猿轡を噛まされて喋る事もままならない私を向こうにいる男達が二

ヤニヤしながら見てくる…気持ち悪い
私が悔しさと恐さで震えていると…

「へへっやっぱ幼女っていいよな」

1人の男がニヤつきながら寄ってくる…いやっ！来ないで…！

「おいおい…ロリコンかよ…」

「確かコイツ女に振られて趣味がおかしくなったんだぜ」

2人の男が呆れながら話しているけど…助けなさいよっ！
目的はお金だけじゃないの！？

「夢にまで見た…子供を犯すのを…」

正真正銘の変態だ！

触らないでよっ！

しかし、私の願いも虚しく男はニヤつきながら私の服に手をかける

「人質を汚すなよ…」

「大丈夫だつて、すぐに済むさ
ちよっと早いけど大人になるだけだつて」

どんなに嫌がろうと縛られている私は身をよじるくらいしか出来ない
遂に男は私が着ていた制服の上を引きちぎる…

「じゃあ…早速処女をもらおう」
「クリームゾンノートオ！」

「な、何だあ!？」
扉が爆発しやがった!？」

目の前の男がズボンを下ろしながら私を嘗めまわすように見ていると…

突然倉庫の扉が爆発した…一体今日は何なの…?

わけわかんなくなってきたわ…

S i d e O U T

え〜と、みんな

まずは前回と同じ様な感じで質問するのを許してくれ

目の前で知り合いが誘拐されたらどうする?

警察に連絡して無事なのを祈るか?それとも連絡した後で犯人を追跡するか?

一言で言つと

「目の前で知り合いが誘拐されたらどうすればいいんだ…?」

さつきやることが無いからブラブラ歩いてたらアリサとすずかを見かけたんだ。

最後にあったのがアルフを保護してくれた時だから挨拶ぐらいしておこうと思って近づいたら…

「何よあんた達!？」

「嫌…放して…!」

声をかけようとした俺の目の前で黒い車に乗った男が2人を無理やり車の中に押し込んで連れ去ったんだ
それをすぐそばで見ていた俺に銃弾を撃ち込んで…

「いつてえ」

とっさにかわそうとしたんだが、左の脇腹を撃ち抜かれちゃった
確かにここは人通りが少ないが…町中で人を撃ち殺すなんて正気じゃねえな

「えーとここら辺か？」

ん？何だ？

腹からの出血を止めようと止血をしていたら後ろから人の声が

「あ、いたいた…って…ちゃんと撃ち殺せてねえじゃねえかよ…
死体処理だけでいいっつーから武器なんざ持ってきてねーってのに…
まあこんなガキ…コイツで十分か」

そう言つて男は足元に落ちていた鉄パイプを拾い上げてこちらに歩み寄ってくる

「悪いな、恨むならここに偶然居合わせたテメエを恨めよな」

そして何の躊躇いもなく鉄パイプを振り下ろしてきた…が
そんなもんに殴られたところで死なねえし、当たつてやる義理も無いので相手が踏み込んで来るのに合わせて足払いを
すると俺をただの無力なガキだと侮っていた男はあっさりとバランス崩し前のめりに倒れ込んできたので相手が倒れ込むのに合わせて

男の鳩尾を蹴り上げてやった

すっげえ簡単に言うとな男は、自分が倒れ込む早さと俺の蹴りの強さが合わさった衝撃を鳩尾にピンポイントに受けたわけだ

「があっ!？」

「ただのガキだと思って舐めてんじゃねえぞ？」

結構力を抑えたつもりなんだがな、鳩尾を押さえて転げ回ってやがるいきなりだが、魔導士のプロテクションは例えEランクやFランクだとしても結構な耐久力を持ってるんだ

恐らく同じ魔力なら簡単に破られちまうが、純粹な物理的衝撃なら壊れないだろう

例えばCランク魔導士の一撃はEランク魔導士のプロテクションを破れるとする

だが、Eランク魔導士のプロテクションにCランク魔導士の一撃と同等の衝撃を加えても、それが物理的な物なら耐えきるだろう

別に魔力が万能ってわけじゃないが、物理的な力で魔力による物を破壊するなら相当な力が必要ってわけだ

だが、俺はAランク魔導士のクロノのプロテクションを素手で破れる確かに少しは魔力を使っではいるが、俺の魔力なんざたかが知れてるつまり、俺はかなりの筋力を持ってるって事だ

恐らく龍の遺伝子による産物だろうけどな

オマケに魔力を体に通せば筋力増加の効力まで起きる

っわけだから、俺が本気で一般人を殴ったら内蔵破裂なんかじゃ済まねえって事

「テ、テメエ…何者だ」

「あ? まあ…見た目相応じゃないガキってとこだ」

年齢不詳だし、身体能力は大人を子供扱いだし（何時もはちゃんと手加減してるぞ？）

「く、くそっ…」

「んなことよりも、テメエ奴らがアリサ達を攫った場所を教えろ」

「へっ…教えるわけねえだ「勘違いするなよ？」…！？」

ふざけた事を抜かそうとするから殺気をぶつけてやったら硬直しがった

「これは《お願い》じゃねえんだ

《命令》だよ

選べ、俺に情報を提供して仲間と共に豚箱行きか、情報を提供せずに無惨に死んでいくか」

「へっ…殺せるもんなら殺してみやがれ…」

多分簡単に人殺しなんか出来ないと思ってんだろっな…だが、俺は敵意や悪意をぶつけてくる奴には容赦しねえぜ？

「いいんだな？」

確認しながら足の骨を踏み砕いてやった

「ギャッ！？」

「誰も簡単に殺すなんて言っていないからな？」

精々苦しみながら死んでいけ」

もがきながら絶叫する男のもう片方の足の骨も踏み碎いてやる

「グアアアア!？」

た、助けてえ……」

涙と鼻水で顔をグシャグシャにしながら懇願してくる男を見ながら
俺は言つてやった

「だからさっき確認したろ？了承は得てないけどな
選択肢だつて与えてやったじゃねえか
生きる道と死ぬ道を」

言いながら次は手を踏み潰してやると

「ギアアアア!？」

た、頼む…助けてくれえ…

何処に連れてかれたか教えるから……」

再び絶叫しながら懇願してきた

「おせえんだよ屑が

選択肢つてのはな？大抵選り直せないんだよ」

「たつ頼む！

ガキ共は港にある廃倉庫に連れて行かれた筈だ！」

俺が男の願いを却下して再び足を上げると焦りながら勝手に喋り出

した

「勝手な情報提供ありがとうございます
もっと早く喋ってればよかったのにな？」

「そ、そんな…
や、止めてくれえええ！」

今更遅いんだよ
人生つてのはやり直しが効かねえんだよ
ま、運が無かったと思って諦めな

「恨むんなら愚かな選択をした自分を恨みな
あばよ」

「ギャツ!？」

顔を蹴つ飛ばしてやると奇声をあげて気絶しやがった
流石に殺しはしねえけどな、後始末がめんどくせえ
え？後始末が簡単なら殺るのかって？
当たり前だろ

「さて…港の廃倉庫だったな」

『地図にマークしておきました』

「ありがとよ」

ドラグーンが提示した地図には…結構遠いな…全力で行けば数分つ
てとこだが…

さっさと行きますか！

*

さて…廃倉庫の前に来たのはいいが…

既になのはに連絡して応援は送って貰ってる…が、廃倉庫内から微弱だが魔力反応が出てる…

ドラグーンによると恐らく昔にこの世界に流れ着いた魔法関係の技術がこの世界の住人が独自に流用したものらしい

普通の応援じゃ太刀打ち不可能だろうな

つーか…んな技術を持ってるって事は…ぜってえただの誘拐犯じゃねえな

なんつー事に巻き込まれてんだか…あの2人は

「…これ以上応援を待っててアイツらに何かあつたら冗談じゃ済まねえな…

今の状況も状況じゃ済まねえか」

さてと…さっさと助け出しますか

「行くぞ、ドラグーン」

『術式起動』

俺がルファルを起動してドラグーンに合図を出すとルファルに内蔵された術式を起動するドラグーン

両手に装着したルファルが高熱の炎を纏っていく

「さあて？準備はいいな？誘拐犯共」

倉庫に向かって走り出し、扉を殴ると同時に術式を解放する

「クリムゾンノートオ！」

閑話：誘拐は犯罪です（後書き）

えゝと、少し中途半端に終わりましたが次回に続きます

また次回でお会いしましょう！

閑話：倉庫内殲滅戦

「クリムゾンノートオ！」

爆炎に包まれて吹き飛ぶ倉庫の扉

いきなり扉が爆発したからな、犯人共も戸惑ってやがる
さうてアリサは…変態に襲われてるよ…

「死ねえええ！」

変態があああ！」

アリサの目の前でズボンを下ろしかけてこっちを見ながら固まってる
変態の顔面に跳び蹴りをかましてアリサから離し

急いでアリサを縛ってる縄を切つてやる…が、アリサはポカーンと
口を空けたまま動かない
はしたないぞ

「大丈夫か？アリサ」

「えっ…と…何でアンタがここにいるの？」

「そこについては気にするな
とりあえず…」

出入り口は奴らに固められたか…
訓練された奴らだな、組織的犯行だろうな。人数も多いし

「こっから逃げる」

アリサを護りながらじゃ分が悪い、護りきれないかもしれんしな壁をぶっ壊して逃がそうとすると

「……え？

何でアンタ壁壊せるの？

それにさっきの爆発も…

何でここにいるのかも説明してないし！何が気にするなよ！
気にするわ！」

「落ち着けアリサ

キヤラが壊れかけてる

多分もうすぐ援軍が到着するはずだ、外を一通り見て回ったが連中の仲間と思わしき奴はいなかった

俺がアイツ等を足止めすっからさっさと逃げる！」

「あ！ちよつと！

待ちなさいよ！」

えゝつと、数は…命令を出してるのが2人に、下っ端らしき奴らが14人が…多いな

「おい、奴らを呼んで来い！

奴らならあの化け物にも対抗出来るはずだ！」

人を化け物呼ばわりするとは…

にしても…奴ら？

コイツらとは別の組織が動いてんのか？

更に数が増えるとなると…面倒だな

「まあいい…覚悟は出来てんだろうなあ？
クズ共お！」

叫ぶと同時に一番近くにいた奴に接近
いきなり近寄られたので驚いて怯んだ隙に顎にアッパーカットを
か
ます

「ぐへっ！？」

マヌケな悲鳴をあげながら後ろに倒れ込むクズ
さつきまでアリサの傍に立っていた奴らは俺が突入すると同時に距
離をとった…か

人質を置いて？普通は人質に銃を突きつけるなりすればいい…
だったら、アリサは目的じゃなかった…？
だったら目的は…すずかか！？

「クソッ！さつさと退くか気絶でもしてやがれえ！」

邪魔なんだよテメエラア！

S i d e アリサ

アイツは…確かりユウだったわよね

私が怪我した犬を見つけた時に傍にいたヤツ…

あの時の会話ものりくらりでわけ分かんないヤツだった…

今だってるくに説明も無いまま逃げろって…足で纏いかもしれないけど…アタシだってすずかが心配なのよ!?

まあ、今言っても仕方ないか…

確か援軍が来るとか何とか言ってたけど…

「アリサちゃん!」

この声は…なのは!?

「なのは!?!」

「アリサちゃん!

よかった…無事で…」

アタシが振り向くと走ってきた勢いで抱きついてくるなのは

「アンタ…何でここに…?」

もしかして…応援ってなのは?

子供が来たぐらいでどうにかなるわけ…

「さっきリュウ君から連絡があつて、アリサちゃんが誘拐されたって…

誰か応援が欲しいって言ってたからお兄ちゃんに話して来てもらったんだよ」

恭也さんが…?

確かに凄い身のこなしだけど…銃を持った人間に勝てるのかしら?

とにかく早くリュウの応援に行ってもらわないと

「でも…その恭也さんは？」

姿が見えないけど…まさかまだ来てないとか？

「お兄ちゃんならもう中に入って行ったの
扉が凄い事になってたけど…何があったの？」

ああ…あれね…

「リュウの奴が倉庫に入ってくるときに扉を爆破したのよ
一体何をしたのかしら…？」

両手に鉤爪みたいなのを嵌めてたし…オマケにそれで簡単に壁を壊
すし…」

ホントになんなのかしら…アイツ

「そ、それは…（リュウ君…やりすぎだよ…）」

*

まったく…無駄に数だけ多い奴らだな…

つってももう半分は殺ったか…？（注、気絶してるだけです、殺し
てはいません）

チィッ！ハンドガンだけじゃ無理と悟ったか？

マシンガンなんか持つてくんじゃねえ！

「鬱陶しいんだよ！」

足元に落ちてた鉄パイプを足に引っ掛けて手に取り
マシンガンを乱射してる野郎に向かって全力で投げつけてやると
見事に顔面にヒット！仰向けに倒れて行きやがった

「クソツ！まだ奴らは来ないのか！？
もう全滅するぞ！？」

「さっき上に呼びに行かせた奴もまだ帰ってきてなくて……」

「ええい！どいつもこいつも！
こうなりややけだ！全員特攻！」

ハンドガンを片手で撃ちながら短刀を懐から取り出して構えながら
突っ込んでくる連中

ハッ！テメエら如きに俺がやられつかよ！

次々と突っ込んでくる奴らの短刀をルファルで受け流して急所に攻
撃を叩き込んでいく

俺に突っ込んでくる奴から順に気絶していく

確かにさっさと終わらせたいけどよ……流石に数が多いっての！

「ハア……ハア……
やっと終わったか？」

それから少しした後
辺りを見回しても立っているのは俺一人だった
じゃあコイツらの処理は後回しにしてすずかを助けに行きますか

何か奴らの会話からすると身体能力が高いらしいな…
まあ気をつけて行きますか

*

S i d e ずずか

今私は攫われている…

私の目の前には私と同じ一族の男、氷室遊がいた
指名手配犯、テロリスト、犯罪者、直接会ったことは無いけどさく
らさんから聞いた事がある

「やあ夜の一族が党首の妹、月村ずずか

初めましてかな？さくらから聞いた事があるかもしれないけど？」

何でかな…自分がこれからどうなるのかな…？

そう思ったときに…ふとあの男の子の顔がよぎった

初めて会ったのがアリサちゃんの家、それ以降は会った事もない
会話だって自己紹介をしただけ、なのに目の前でアリサちゃんの事を
のらりくらりとかわしている姿を見て少し可笑しかった

クラスの男の子は少し苦手だけど、リュウ君は普通に話せた
最後にもう一度会ってみたかったなあ…

*

何なんだこの黒ずくめの男は！？

身のこなしが只者じゃねえ！何で魔力も使わずに壁とか走ってんだよ！？

急に加速してきたりしやがるし、気がついたら後ろにいやがる！
こんな奴にかまってる暇は無いつてのに！

「クソツ！」

ルファルで攻撃を繰り出しても両手に持った小太刀で難なく防いで
きやがる

コイツ…他の奴らとは格が違い…

「（飛び込んだところにコイツがいたからつい斬りかかったが…子供…？

けど只の子供じゃない…俺の攻撃を受け止める上に神速にまで反応
してくるか…！）」

うおっ！？また早くなりやがった！？

何なんだコイツは！？

「俺はさっさとすずかを助けに行かなきゃいけねえんだ！
さっさと失せろお！」

「！？」

何だ？すずかの名前を出した瞬間動きが止まった？

「今…すずかと言ったか？」

「ああ…ここに攫われた筈の月村すずかだ
この階に捕まってたアリサは助け出したんでな
すずかを助けに行こうとしたらお前が襲いかかって来たんだ」

「…味方だったのか」

ん？今コイツなんだった？味方？いきなり斬りかかってきて？

「俺は高町恭也、高町なのはの兄だ」

「…なのはの？」

「ああ」

何だろう…なのはの兄とかいう奴の声を聞いた瞬間脳裏にグリリバ
って浮かんた

まあ電波は置いといて、コイツがなのはの兄…ねえ
戦闘民族ってところはあってんのか？

「アリサちゃんは助けたと言ってたが…何処に？」

「あそこの穴から外に逃がしたよ
これから2階に向かうところだったんだ」

「む…すまなかった、なら急ごう
相手が厄介な奴だからな…早めに助けるに越したことは無い」

相手に心当たりがあるのか？

「相手が誰か分かってんのか？」

「ああ、大体だが予想はついている…」

何か気難しそうな顔してんな…

ワケ有りなら詮索はよしとくか

「まあ何かワケあんなら詮索はしねえよ
さっさと行こうぜ」

「すまない、助かる」

こうして心強い味方？と共に2階へ向かっていくと…

「ほら、遠慮しないで血が飲みたいんだろ？」

明かりの点いた部屋から話し声が洩れてくる
血が飲みたい？何を言ってるんだコイツは…

訝しみながら部屋を見回すと中には縛られているすずかに、すずかの正面に立って話しかける男

そして…アイツは…さっき命令されて上に向かった奴だが…首を掻
っ切られてんのか？

横たわって首から血を流してらあ

男の手に目をやると爪が普通の人間よりも明らかに鋭い
そして手に大量の血が付着してやがる…状況から察するに奴があ
の男を殺したってとこか

仲間割れか？確か下の奴らはあの男の事を化け物と呼んでいた…

元から互いが互いを利用するために組んでいた？

だったら…下の奴らの目的は身代金…ならコイツは…？

「くっ！」

「待った！」

隙間から覗いていた恭也が部屋に飛び込む寸前で待ったをかけた作戦無しに飛び込むなっつの

「何だ！？早く助けなければ…」

「いきなり突っ込んでもすずかには奴のが近い
なら小太刀を構えたアンタよりも見た目がガキの俺が行った方がいい」

「む…」

敵を倒すよりもすずかの救出の方が優先だ
ん…？そうこうしてるうちに話が進行してるな

「そっか、そうだね。こんなおっさんの血なんて飲みたくないよね
考えが足りなかったなあ…今から下にいる子を連れてくるから少し
待っててね」

マズイ…奴が部屋から出てくる…って別にすずかから奴が離れるん
だからいいか
よし！出てこい…

「待って！アリサちゃんには何にもしないで！
飲むから…その人の血を飲むから…」

さつきから奴は何ですずに血を飲む事を強要してんだ？

「とにかく…恭也、俺が先行すつからタイミングを見計らって出て来てくれ」

「分かった…気をつけろよ」

「ああ、ありがとう」

さて…行きますか

S i d e ずずか

氷室が冷たい笑顔を浮かべながら血に塗れた手を近付けてくる…
部屋に充満する血の匂いが私をオカシクする…

普段なら気持ち悪くなる匂いが今はとてもいい香りに感じる…
だけど嫌だ、私は人を殺してまでこの体の欲求を満たしたくない
化け物になんてなりたくない…！たけど充満する血の匂いが私の喉
を渴かす

「ほら、飲むんだ。

そして、君は正しく夜の一族になる。悲しむ事も、苦しむ事も何も
無い。所詮は劣等種…餌に過ぎないのだから」

気持ち悪い、気持ち悪い、あの自信に満ちた目が気持ち悪い。その
自信が何なのかを私は知っている。私の中に在る欲求の大きさがソ
レを肯定する。

氷室は私を本物の吸血鬼にするつもりだ。嫌だ、成りたくない。嫌

だ嫌だ嫌だ！！

お姉ちゃんに嫌われる、恭也さんに嫌われる。なのはちゃんに、アリサちゃんに、皆から嫌われる。

（嫌だよ…嫌われたくないよお…誰か…助けて）

蚊の鳴くような音だった。自分で自分が嫌になる

何で私は強くないんだろう…お姉ちゃんみたいに…恭也さんみたいに…

抗えないんだろう…

氷室が私を縛っている縄を解き、私に血を飲む事を促そうとした時…

「何だ！？」

「きゃっ…！？」

突然この部屋の扉が吹き飛び

「よお、すずか。元気だったか？」

私が出会った男の子が部屋の入口に立っていた

S i d e o u t

部屋に侵入した方がいいが…あの氷室とかいう男、只の人間じゃねえ…俺の龍の本能の部分が反応している…奴は違う…人間じゃない、他のナニかだ…と

「なんだい？こんなところに…何しに来たんだい？」

口は笑っているが目が笑ってねえ

何なんだコイツは…？

「迷子になったのかな？それとも…」

食べられに来たのかな？」

氷室とかいう男が冷たい笑顔で見下ろしてくる

リュウとしての部分がコイツを警戒し、龍としての部分が臨戦態勢をとる

コイツは危険だとささやく声と、蹂躪しろと叫ぶ声が頭の中で反響する

だが、コイツにかまつてる暇はねえんだ

「すずか」

「リュ…ウく…ん…なん…で…？」

何だかずいぶん具合が悪そうだが…

真っ青な顔で体を押さえて蹲まっている…

とにかくさっさとこっから逃がさねえと

「動けるか？さっさとここから逃げるぞ？」

目の前の男からは目を離さずに後ろにいるすずかに手を伸ばす…が

「だ…め…む…りだ…よ…」

逃げ…て…！お願い…い…逃げ…て…！」

何でだ？別に前会った時は普通だったが…

別に男性恐怖症って事は無いよな…？

それだったら学校に行ってないはずだ

「目を逸らさないのは立派だがな…後ろに気をつけるよ？」

「やめ…て…言わ…ない…で！」

「そいつは…吸血鬼だ」

閑話：倉庫内殲滅戦（後書き）

ども！*でございます

いやゝ何か今回も中途半端に終わっちゃって…

オマケにあと2話ぐらい続きそう…

すぐにつて訳じゃないけどオリジナルストーリーも少しやりたいの
に…

うわっ！？ちょっと！

石投げないで！さつさとA's編やれって？

もうすぐ始まるんでマジ勘弁して下さい！

お願いします！

では、また次回お会いしましょう

…え？もう読まねえって？

ゝ（、、）ノウワアアン！

閑話：一件落着…？

「そいつは…吸血鬼だ」

氷室とかいう男が笑みを浮かべながら俺に言い放つ…吸血鬼だと？
そんなバカな…だが、ここでそんな下らないハツタリをかましても
全く意味がない…まさか本当なのか？

「すずか…本当なのか…？」

「う…ん…」

むう…まあハツタリなんざ意味が無いとは思っていたが…まさか本
当とは…

「血を吸われたり噛まれると吸血鬼になるのか？」

「ならな…い…お願い…リュウ君…逃げ…て…」

相変わらず顔が真っ青でうずくまりながら俺の問いに答えるすずか
多分血が飲みたいんだろ…うな…

氷室とかいう男はずっと俺を見ながら笑ってるし…一か八か目眩ま
しで逃げるか…？

恭也が上手くやってくれるのを祈るか

「すずか…逃げるぞ」

もし血が飲みたいなら…全部終わったら俺のを飲んでいいからさ」

氷室からは目を逸らさずに後ろ手にすずかの手を握る
一瞬ビクツとなるがすぐに落ち着く
そしてポケットから用意しておいた魔力球を取り出し…

「おらよ！」

床に叩き付けてやる

すると外部からの衝撃により、圧縮されていた魔力が解き放たれる

「なっ！？」

「うおっ！」

部屋の中は俺の魔力、つまり漆黒に染まり暗闇となる

すずかを魔力の衝撃から庇い、吹き飛ばされた勢いで窓を破って脱出する

「クソ餓鬼があ！」

「恭也！しばらく任せた！」

暗闇となった部屋から氷室の叫び声が聞こえ、恭也に呼び掛ける

「ああ！」

「ぐあっ！？貴様っ…御神の剣士かつ！？」

俺が地面に着地すると同時に部屋の中で恭也と氷室の戦いが始まっていたらしい

「大丈夫か？」

「…う…ん」

相変わらず自分の体を抱いたまま震えているすずか
近くになのはが来ている筈だが…

「リュウ君！」

「なのは！…と、誰だ？」

なのはと一緒にこっちに走ってくる恭也と同じぐらいの女性が1人

「お姉…ちゃん…！」

「すずか！」

ああ、姉か

俺の手を握っていたすずかは弱々しく姉を呼び、それに気付いた姉
が走り寄る

「アンタ…何者なの？」

なのは達と一緒に走ってきたアリサが訝しげに此方をみるがそんな
暇は無い

さつさと恭也に加勢して氷室の奴を葬り去らねば

此処で逃がしたら奴は再びすずかを狙う、そんな気がするからな

「悪いな、質問に答えるのは後だ」

「何だよ！もうすずかは助けたんだからいいじゃない！」

俺がアリサの質問を後回しにしようとしたら詰め寄ってくるが

「リュウ君…だったわね？」

「ああ、アンタは？」

横からすずかと抱き合っていたすずかの姉が俺に質問してくる
質問ばっかだな…

「私は月村忍、すずかの姉よ
すずかを助けてくれてありがとう」

「目の前で知り合いが誘拐されてそのままって訳にもいかんだろ」
それで何かあったら胸糞悪いしな

「ところで…恭也は？」

「まだ氷室と戦ってる
今から加勢に行くところだ」

さっさと決着付けて家に帰らせてえし

「氷室…！アイツが…！」

氷室の名前を出した瞬間顔付きが険しくなる忍

「じゃあ俺は行くから」

「え？ちよつと待つ…」

俺が地面を蹴ると同時に忍が何かを言いかけたが後で聞きゃいいだろ
とにかくさっさと行つて氷室を仕留めなきゃな

*

「行っちゃった…」

忍さんがリュウ君に何かを言いかけたんだけど
それを聞かずにリュウ君は行っちゃった

「大丈夫かな…氷室は只の人間じゃない…
御神の剣士でも苦戦するほどの奴なのに…」

多分大丈夫だよ、リュウ君なら

色々は無茶苦茶な所あるし…にやはは…

けど、すずかちゃんは大丈夫かな？リュウ君に助けられた時からず
っと顔が真っ青…

それに人間じゃないって…それ程に強いから？それとも本当に人間
じゃない？

リュウ君にお兄ちゃん…大丈夫だよ…

*

リュウ君…何で助けに来てくれたの？

吸血鬼と言われた私を怖がるどころか助けてくれた

私がある場で我慢できなくなったら氷室の思う壺なのに…

私の誰にも言えない悩みを《その程度》のような扱いをして私の手

を握ってくれた

何で助けに来てくれたの？

何で怖くないの？

何で此処が分かったの？

何でそんなにも強いの？

彼の事が知りたい…自分を見失っていた私に温もりをくれた彼を…

（お姉ちゃんも恭也さんに助けられた時はこんな気持ちだったのかな…）

私の危機に駆けつけてくれたリュウ君…

私は彼の事が好きなんだ…たとえ嫌われたって私は彼の事が好き…

私が…自分自身で見つけられた思いだから…！

*

「恭也！」

「リュウか！」

俺が倉庫に入って恭也に加勢に向かうと、明らかに人間離れた戦いが繰り広げられていた

恭也は普通に壁を走り、氷室は爪で小太刀を受け止める

「オラァ！」

恭也と俺の間に氷室を挟むように移動して2人で攻撃をするが簡単に受け止める

「貴様は…あの餓鬼か…」

劣等種の餓鬼だと思って油断していたよ…
殺す…苦しみながら死んでいけ！」

吸血鬼つてのは嘘じゃ無いらしい
急所に向かつて的確に鋭い攻撃を繰り出してくる
だがな…怒りに身を任せると…死ぬぜ？

「ぐっ！」

「なっ！？貴様っ…離せ！」

「リュウっ…！？」

氷室の攻撃を急所からズラして腹に受け、その腕を掴む
普通の人間なら腹に穴が空いたら死ぬかもしれんが、俺なら平気だろ

「恭也あ！今だ！殺れ！」

「っ！分かった！」

「糞餓鬼がああ！離せええ！」

俺を引き剥がそうと爪を振るってくるが既に俺は捨て身
致命傷になりうる攻撃以外は無視して全身から血を流しながら氷室
の腕を抑える

「雄オオオオオ！！！」

「ぐうっ！！！」

殺ったか！？氷室の首に恭也の小太刀の一閃が入ったが…

「がはっ！？」

コイツ…まだ死んでねえのかよ！？

死んだと思って油断した俺の手が緩んだ隙に蹴りを放ち、その衝撃で俺の腹から腕を引き抜いた氷室

「知らなかったか？」

首を斬られたぐらいじゃ死なんよ！」

「それでも頭を潰せば死ぬだろう！」

右手を俺の血で染めた氷室と、小太刀が氷室の血で赤くなった恭也がぶつかり合う

どうやら氷室は俺にはもう何も出来ないと思ってるらしいな
まあ普通の人間ならそうだよなあ？普通ならな

「ドラグーン…！」

『リュウ、流石に貴方でも無茶だと思いますが…』

んなこと言ってられるか！

「殺るなら…今しか無いんだよ…！」

正直喋るだけで吐血しそうになるが…今なら確実に氷室を殺れる…！

「ドラグーン…！」

『…術式…起動』

ドラグーンが俺の両腕に装着されたルファルの術式を起動した事で、俺の両腕に炎が渦巻く

「ウオオオオ！」

「何っ！？まだ動けたか！」

恭也と戦っていた氷室が突っ込んでくる俺に向き直そうとするが

「させるか！」

「チイツ！邪魔だ！」

恭也が釘付けにして動かさない

「くたばりやがれえ！」

「があっ！？」

恭也と切り結んでいた氷室の背中にルファルを突き刺し

「非殺傷設定解除！」

『了解しました』

コイツは今此処で殺す！

「猛れ！破壊の劫火！」

クリムゾンノートオオオ！」

「グガアアアア！？」

非殺傷設定を解除された事により、俺の両腕を渦巻く燃え盛る炎が容赦なく氷室の内側から焼き尽くしていく

「此处で…灰になれ！」

「糞餓鬼があああ！」

まだ動きやがるか！

腕を振りかぶり、爪を突き刺そうと攻撃してくる氷室

「やらせるか！」

だが、恭也がその振りかぶった腕を小太刀で一閃
呆気なく切断され宙を舞う氷室の腕

「劣等種如きに…殺されるとは…」

「人間は劣等種なんかじゃねえよ

力はテメエに劣っていてもな、他の部分で補う力を持つてるからなあ！」

一気に焼き尽くす！最大火力！

口に含んでいた魔力球を2つ同時に噛み砕き、一気に放たれた魔力を全て炎へと変換する

「グギヤアアア！」

「あばよ！」

こうして氷室は燃え尽き、腹に穴が空いた俺と氷室との戦いで満身創痍の恭也が残された
そして…

「血…流しすぎたか？」

もう無理だ…目の前がだんだんぼやけてきた俺は、そのまま倒れ込んで気を失った

閑話：一件落着…？（後書き）

ども！皆さんお久しぶりっす！

今回で決着がつかしました！

次回では…まあ事後処理みたいな感じで色々ゴチャゴチャやりますね（オイ

そしてA・sに突入：かな？

では、また次回お会いしましょう！

閑話：夜の一族ねえ…何か胡散臭いなオイ

「此処…は？」

え…と…確か俺は…氷室に腹を貫かれて、捨て身で氷室の奴を燃やした後に気絶したんだよな…

「そうだ！すずかとアリサは！？」

『大丈夫ですよ

2人共無事に保護されました

貴方が蹴散らした誘拐犯は全員警察に取り押さえられましたよ』

俺がベッドから飛び起きようとすると、ドラグーンが事件について話してくれた

しっかし…此処…何処だ？

やけに部屋が広いんだが…

『此処はすずかさんの家ですよ』

「あ？すずかの？」

へえ…やっぱり金持ちなんだな…

俺がそんな事を考えいると

「にゃあ」

「んあ？」

ドアが少し開いていたらしく、隙間から猫が入ってきた
猫は少しも俺を警戒することなくベッドの上に飛び乗ってくる
随分と人に馴れてるんだな

「にゃあ〜」

「おう」

目の前に座り込んで此方をずっと見て来る猫
しばらくそんな感じでボ〜っとしていると

「にゃあ〜」

「うにゃ？」

「にゃあ」

「どんだけいるんだ？」

先ほど鳴き声が聞こえたのは3匹だけだが、ベッドから溢れんばかりに猫が部屋に入ってきた

…あ、数匹落ちた

「なあ、ドラグーン」

『どうしました？』

「何でこんなに猫が集まってくるんだ？」

数匹なら可愛いもんだが、これは数十匹いるだろ…ぶっちゃけ鬱陶しいんだが…

『前にリュウが常に魔力を放出してるって話をしましたよね？』

「ああ」

そっぴゃそんな設定あったな
少しずつ魔力を周りに放出してるんだっとな

『大量の魔力はリンカーコアを持たない生物には体に異常をきたす物にもなるんですが、少量の魔力が常に供給されるのは体に安らぎを与えるようです』

「つまり…俺は…」

『休憩所みたいなものですね』

相変わらずの道具扱いかよ…別にいいんだけどさ
そして…すずかはどんだけの猫を飼ってるんだ？
数が多すぎだろ…

「みんな何処に行ったのかな…」

ん…？あの声はすずかか？

みんなって事は…俺以外にもこの家に來てる奴が居るのか、この大量の猫達が…おそらく後者だろうな

「みんな…何処行っただの？」

さすが猫を探す声が聞こえるが…声を出そうにもあまり大きな声が出ない…喉をやられた覚えは無いんだが…

『無茶をしすぎです。』

腹部に穴が空いた上に血液を多量に流した状態で魔力球を使うなんて…全身にガタがきてますよ』

「むう…流石に無理をし過ぎたか…」

左腕が動かねえし…下半身はピクリともしねえ
感覚はあるから半身不全にはなつてねえと思うが…

『今はゆっくり休む事です。アースラからの呼び出しもありません』

「あゝ…そうだな、ゆっくり休ませて貰いますか
どうせ目が覚めたら質問攻めだしな」

流石に魔法を使いすぎたよなあ…恭也の目の前で氷室の奴を燃やしたし…アリサの目の前で壁をぶち抜い…アレは自前の力か
まあ何にせよ質問は来るだろうしな、二度寝でもさせて頂きますか

*

はあ…みんな何処行つたのかなあ…もうすぐご飯なのに一匹も見つからないって言うのはおかしいよね…

まさかリュウ君の部屋に？でも、家の猫とリュウ君に接点なんか全く無いし…

でも、リュウ君が家に来たらみんな居なくなつたし…

「すずか、見つかった？」

「あ、お姉ちゃん

うつん、まだ見つからないよ」

角を曲がると同じく猫を探してるお姉ちゃんに会った

お姉ちゃんもリュウ君に色々聞きたい事があるらしいけど…ちなみに恭也さんはお姉ちゃんの部屋で眠ってる

リュウ君はお腹に穴が空いてたし、恭也さんは全身に傷を負っていて血だらけだった…2人共ありがとう

「変ねゝ家の猫が一気に居なくなるなんて…もしかしてあの子の部屋に居たりしてね」

「まさかあ、そんなわけないよゝ」

「あはは、そうだよね

私はもう一度庭を探してくるわ」

お姉ちゃんも私と同じ事考えてる…もしかして本当に居るのかなあ…一回行ってみようかな…

*

「ふう…」

二度寝しようと思ったのはいいが…

「うつるさくて眠れん…」

周りで大量の猫が鳴いてるわ、ベッドから落ちた猫がもう一度飛び乗ってくるわで目が覚めたわ

『そろそろ起きたらどうです？ずっと寝ていても退屈でしょう』

「むう…そうだな

もう足も動かせるようになったし」

少しは歩いて運動すのと、人を探して話を聞かなきゃな
恭也の奴はどうなったんだ？結構頑丈だったし死んじやないだらうけどさ

「ふわあゝ…」

何時間寝てたんだ？

動く度に関節がバキバキ鳴りやがる
伸びをしたら背骨が…！

「ぐおお……！」

『いきなり伸ばすからですよ、少しずつ動かさないと』

あゝ…痛かった…

背骨が変な音鳴らしたからな

さて、そろそろ部屋から出ますか

そう思っただけを開けようとしたんだ
俺が扉に手をかける前に扉が動いて

「みんな此処にい…！？」

「よう、すずか」

俺を見た瞬間硬直したすずかを目の前に、俺は普通に挨拶してみたんだ

*

「よう、すずか」

私の目の前に居る男の子は片手を挙げて何も無かったかのように挨拶してくる

数時間前に一命は取り留めたけど、数日は目覚めないって言われてたのに…僅か数時間で起きてきた不思議な男の子

何でキミは私の居場所が分かったの？

何でキミは私を助けてくれたの？

私を氷室から庇うようにして立つキミに…私は不思議な感覚がしたんだ

体が温かくなるような、安心するような気持ち

あの時も思っただけど…こうして目の前で立つキミを見てやっぱり分かったよ…私はキミが好き

*

え〜と…どうすりゃいいんだ？

いきなり部屋に入ってきたと思っただけですずかがいきなり固まって、何も話さないんだが

「すずか？どうした？」

「えっ？あつ、ごめんなさい！」

再起動した、何でこんなに慌ててんだ？意味分かんねー
そっぴゃ恭也の奴はどうなったんだ？聞いてみるか

「いや、別にいいけどさ

ってか何で謝ってんのか分からんし

それよりもさ、恭也ってどうなった？

確か全身から血を流してヤバそうだったんだが」

「う、うん

えーっと…恭也さんだよな？

リュウ君よりは傷が浅かったし、恭也さんはちょっと一般の人とは
違うから今は普通に寝てるよ」

まあ確かに腹に穴が空いてた俺のが重傷だったのか？

一般人とは違う？そりゃそうだろ

吸血鬼と互角に戦える一般人が居てたまるか

「……そう言えばリュウ君動いて平気なの？」

心配そうな顔をして此方を見てくるすずか

別に平気だが

もう体は痛くねえし

「ああ、別に平気だが」

「お腹に穴が空いてたのに？

普通動けないよ？」

まあ普通じゃねえからな

後、お前の友達にも普通じゃねえの居るからな？

具体的には魔砲少女（誤字に非ず）

友達になりたいって相手に極太の魔砲をぶちかますんだぜ？
おっと、話が逸れたな

「んゝ普通じゃねえからなゝもう普通に動けるぜ？」

「それならいいけど…無茶はしないでね？」

また傷口が開いたら危ないから」

「心配してくれんのか？」

ありがとな」

俺のが背が高いので口元を軽く緩ませながら頭を撫でてやると

「普通心配はするよゝ」

朗らかに笑いながら猫のように目を細めて受け入れるわずか
さて、そろそろお暇しますか
出来れば質問をされる前に帰りたいんだが…

「そうだ、ちょっと聞きたい事があるんだけど…
お姉ちゃんも質問があるって」

「あ、ああ…分かった
案内してくれ」

「うん、こっちだよ」

…無理でした

こつから質問攻めかあ…めんどくせえな…なのはに押し付けられないかな…

こうしてる間に部屋に通された俺

すずかは姉を呼んでくると言って部屋から出て行き、今この場に居るのは俺、ドラグーン、大量の猫

ソファ―に座らされてボーっとしていると先ず部屋にすずかが入ってきて、忍、恭也と続き俺の正面に座った

…何か尋問みてえだな

*

さて、私達の目の前に座ってる男の子、リュウ君には色々聞きたい事があるのよね…

先ずは、何故あの氷室どころか、恭也と互角に戦える力を持つているのか

氷室にお腹を貫かれた筈なのに何事も無かったように動けるのか

これは目の当たりにした訳では無いけど、恭也が教えてくれた事

彼が氷室の腹を手甲？爪？まあ武器でいいか

武器で氷室の腹部を貫いた後、彼が何かを唱えると同時に彼の腕から炎が上がり氷室を燃やし尽くしたって事…

俄には信じがたいけど、あの場に氷室の死体が無かったし、生きていたとしたら気絶していた2人の息の根を確実に止めていた筈

そしてこれが一番重要…すずかの話によると、氷室の奴はリュウ君に私達夜の一族の事を話したらしい

彼がもし誰にも言わないと約束してくれるなら今まで通り

けど、もし彼が約束しなかったら…私達の持ちこたえる力全てを出し切つてでも彼を始末しなければならぬ…別に侮蔑の目で見られたりするのはいい

けど、大勢の人に知れ渡るのは何としても阻止しなくちゃ

じゃあ、早速聞いてみるとしますか

「ねえ、リュウ君と言ったかしら？」

*

しばらく思案顔をしていた忍が話を切り出してきた

「ああ、リュウだ
名字は無い」

「そのことも聞いてみたいけど、先ずは…貴方何者？」

「俺は俺だが？
別に何も企んじやいない」

何者と聞かれてもホイホイと答える訳にはいかんからな
そんな簡単に魔砲…じゃねえや
魔法について話せる訳がない

「少し質問が漠然とし過ぎたかしら？
けど、それ以外に尋ねようが無い気がするのだけど？
貴方は何故あんなに強いの？」

「氷室と互角に戦えることか？」

確かに見た目がガキの俺が吸血鬼と互角に戦ってたら誰でも怪しむ
わな

だが、俺の出生（製造過程とも言つのか？）を話したら思いっきり
魔法に関与するからな…

「それもあるのだけど、恭也とも互角に戦ったわよね？
自慢じゃないけど恭也は普通の人間とは全然違うのよ
御神の剣士と呼ばれていてね？裏の人間なの」

「忍っ！」

「彼の事も聞くんだからコツチの事も明かさないと、ね？」

流石に話し過ぎだと思ったのか恭也が止めようとするが、忍がもつ
ともらしい事を言う

明かすなら月村家の素性を明かして欲しいもんだ
少なくとも、吸血鬼が誘拐しようとする子供の家は普通じゃねえな

「まあ…恭也の強さは俺も気になってはいたが、それより気になる
のがアンタ達月村家の素性だ」

「…まあ、そうなるわね」

氷室の奴がすずかも吸血鬼だと言っていた
そしてすずかもそれを肯定した
すずかが氷室に何か暗示を掛けられていたとしても、氷室が吸血鬼
というのは確実だろう

首を斬られても平然と動くのはどう考えても普通の人間じゃねえ
そしてこの話を切り出した瞬間忍の目つきが変わった
此方を警戒するようで、値踏みしているような
おそらく信用に値するか、話してもいいかを考えてんだろう

「氷室が吸血鬼だというのは奴自身から聞いた」

「吸血鬼を信じるの？」

有り得ない話とは思わないの？」

「首を斬られても平然と動けるの人間が居てたまるか
そして、その吸血鬼から……」

一応俺が信じてないかどうかを確認したんだろうな
残念だが、首から血を流しながら言葉を発する奴を俺は人間と認め
ない

忍に言い放ったあと、話しながらもゆっくりとすずかに目を向ける
と、俺の視線に気付いたすずかがビクつく
目を見ると俺が何を言うのか怖がっているのと、興味があるので半
々らしい

「すずかも吸血鬼だと聞いた
なら、月村一族は吸血鬼の一族なのか？
アンタ、月村忍も」

「……………だとしたらどうするの？
誰かに話してみる？」

此方を警戒しながら話してくる忍
おそらく、此処で誰かに話すとか言ったら俺と忍、恭也は敵同士だな
まあ別に話す気なんざねえけど

「こう言っちゃ悪いかもしれんが、月村の家系が吸血鬼だろうが別
にどうでもいい」

「…は？」

もっと真面目な答えを期待してたんだろうな

忍は此方を見ながら口を軽くポカンと開けてフリーズした
恭也の奴は此方を見続けてはいるが、もうあまり警戒もしていない
ようだ

さっきまでの刺すような視線が無くなった

「俺が気になるのは月村の秘密をしった俺がどうなるかだ
秘密保守の為に抹殺するか、何事も無かったかのように帰らせて貰
えんのか、何か特別な技術でも用いて記憶でも消すのか
一番最初なら悪いが抵抗はさせて貰うぞ？」

黙って殺されてやる程お人好しじゃねえし、そうになったら全力で逃
げ出してやるさ

しかし、恭也と忍を見るが殺気どころか警戒もしていない

「……さっきまで私が懸念していた事は何だったのかしら？」

「だから言っただろう

そんな事で突き放すような奴なら命懸けで助けには来ないさ」

ガツクリと肩を落とす忍の横で笑みを浮かべながら話す恭也
そして驚いた後、安心した気配のすずか

もし吸血鬼が化け物とか言う奴が居るなら聞いてみたいわ
俺はどうなんだ？つてな

見た目が人で、好戦的でも無いなら別にいいじゃねえか

「じゃあ、最後に質問ね」

「ん？ああ、何だ？」

何時の間にか気を取り直していた忍が真面目な顔になって向き直っ

てくる

何だ？急に真面目になって

「此処からは俺が聞こう

リユウ、お前が氷室を殺す時に使った炎は何なんだ？

何も火を起こすような物は無かったのにいきなり燃え上がり、お前から発せられるように見えたがお前は燃えるどころか火傷1つ無い
一体何なんだ？」

「手品って事ですましちや駄目か？」

「手品で吸血鬼が殺せたら苦労しない」

ダメ元で言ってみたがやっぱり無理か…こういうのってクロノとかに相談した方がいいよなあ…

一旦どうにかこの場を切り抜けて、後日事情を話すって事でいいか

「むう…スマンがややこしい事情があつてな、俺の一存じゃ全ては話せない

ひとまずこの事を話さないといけない奴がいるから、ソイツに話してから決めようと思う」

「この事っていうのは…」

「俺が他の奴の前で力を使った事だ
アンタ達月村家については他言する気は一切無い」

「ならいいわ

…改めてお礼を言っわ

すずかを助けてくれてありがとう」

「別にいいさ

じゃあ、話せるようになったらなのは通じて連絡するから」

「分かった

…にしても、なのはとどういう関係だ？」

何だ…？恭也の纏う空気が変わった…！？

両目の光が消えやがった…！

「別に…これといって特別な事はないが…」

「ならいいさ」

「あ、ああ…」

一体何なんだ…？

「じゃあ、また今度
じゃな、すずか」

「うん！またね、リュウ君」

すずかに見送って貰いながら月村家を後にする俺だった

……クロノに何て言おう

『説教は確実ですね』

「はあ…」

*

「……で、管理外世界の住民の前で魔法を使った？」

「はい」

正座する俺の前で仁王立ちで額に青筋を浮かべながら此方を睨む少
し背が小さめの少年はクロノ・ハラウン
こう見えて管理局執務官という役職に就いていて結構偉いらしく、
戦闘時等は戦線で指揮を執る

「…何か僕をバカにしたような事を考えなかったか？」

「滅相も無い」

以外に勘が鋭い事も、たったいま判明した
お前が出て来るのも久し振りな気がするから紹介しちゃったじゃね
ーか

「妙にバカにされてる気がするんだが……」

まあいい、君はまた面倒くさい事をしてくれたな……」

「勢いでやった」

後悔も反省もしていない」

「反省ぐらいしろ！」

つたく…長々と説教しやがつて…現在進行中だけど
クロノの話によると基本、管理外世界の住民に魔法は秘匿するもの
であり、迂闊に使用する事は許されてないとか何とか

とにかく、俺は管理局からすれば結構面倒くさい事をしたらしい
でもさ、バレちまった相手に頼んで黙って貰えばいいんじゃない？

例えソイツが周りに言いふらしたとしても、ソイツが頭おかしい奴
に見られるだけだし、何か証拠写真の物を握られたなら魔法で強
奪するか脅してやればいいじゃないか

生半可な覚悟で他人の弱みを握る奴は滅びればいい
っと、話が逸れたな

「なあクロノ、バレちまった相手に黙って貰うって約束してもらえ
ばいいんじゃない？」

「そんな簡単に約束出来たら苦労はしないよ…」

「いや、俺も向こうの秘密知ってから」

「は…？」

俺が問いかけるとこめかみを押さえながら呆れたように言うてくる
が、その後の俺の言葉に固まるクロノ

「本当か…？」

「嘘吐いたつてめんどくせえただけだろ

それを他言しない替わりに、魔法の事も黙っていて貰えばいいだろ
？」

「まあ、黙っていて貰える事に越したことは無いが…」

「ならそれで話を進めとくからな」

「むう…まあいいか
くれぐれも他の人間にはバレないようにしてくれよ」

「りょーかい」

微妙に納得していない様子のクロノだったが最後に念を押して転移して行った

じゃあ、なのはにも付いて来て貰いますか
出来れば説明も受け持ってくれるといいな…

そんな事を考えながらなのはに連絡して、再びすずか達と会う約束をしたのだった

*

そしてすずか達を助けてから数日が経った
なのはに連絡した俺は、なのは、アリサ、すずか、忍、恭也の全員の都合が合う日を聞いて再び月村邸へと訪れていた

「さて、何から話そうか
腹に穴が空いてもすぐに塞がる事か、人1人簡単に燃やせる炎を放出出来る事か」

「恐らく体の事も例の力が関係してるのだろう？
先ずは力の事について簡単に話してくれ」

全員が席に着いたところで俺が話を切り出すと恭也が答える
先に魔法についてか…っ！俺の体について聞かれても魔法について話してなきや無理じゃん

まあ魔法についてはなのはに丸投げします

先日、なのはと話し合ってたのはも魔法の関係者って事を話す事に

したんだ

丁度いい機会だしな

「それについてはなのはから説明があります」

「あ、うん」

「なのはから？」

「どういう事だ？」

「その事についても説明があつから、先ずはなのはの話を聞いてやつてくれ」

「ふむ…」

腑に落ちない顔をしながらもなのはの話を聴き始める恭也達

話の中身？先ずは魔法について簡単に説明して、なのはが魔法に出会ってから今までの事を話しただけさ

んで、親友や家族にそんな重要な事を黙っていたなのははというと

「へえ、アンタ…そんな大事な事黙ってたんだ…」

「酷いよなのはちゃん…」

私達親友でしょ？」

アリサとすずかに怒られ、さつき「家に帰ったら父さんと話そうか」
みたいな事を恭也に言われてた

部屋の隅に追い詰められて謝ってるなのはは置いというて

「まあ、大体あんな感じだ」

「魔法なんて物が本当にあるなんて…」

忍が信じられない、という顔をしているが本当なんだからしょうがない

こっちはこっちで話を進めさせてもらう

後は魔法については特に話す事は無いし、約束について話しますか

「んで、俺は月村家が吸血鬼の家系だとは他言しない
だからアンタ達も魔法については他言無用だ、いいな？」

「ええ、貴方が私達の秘密を守ってくれると言うなら私達も異存は無いわ」

俺と忍も互いの条件を飲み、約束した
こうして誘拐事件は幕を閉じると思われたが…

「そう言えば…あの誘拐犯達は何ですぞかとアタシを別々に拘束したのかしら？」

口振りからも、アタシを誘拐したのはついでにみたいない感じだったけど…」

「えーっと…それは…」

年のわりに鋭いよな、アリサって

事件の時の記憶を訝しみ、思案顔になるアリサと困った顔になるすずかと忍

隣ではなのはが何の事か分からない顔をし、恭也が苦い顔をしている

「むう…どうしたもんかね」

「どうにかして誤魔化す方法は無いか？
対象の認識を変えたり、記憶を変える魔法は無いのか？」

「んな便利なもんねえよ…」

不味い事になったな…すずか達は吸血鬼の事は黙っていたい…が、
アリサはあの事件の事を訝しんでいる

下手に誤魔化そうとしたところで勘の鋭いアリサの事だ
すずかや忍達の様子がおかしい事に気付くだろう

隣に移動してきた恭也が物騒な事を聞いてくるが、んな便利もんが
あったら真っ先にお前らの魔法に関する記憶を消去するわ

「観念するしか無いかなぁ…？」

「そんな簡単な事じゃ無いだろう」

だよな…いきなり「実は吸血鬼なんだ」とか言われても頭おかしい
奴にしか思えないしな

「……お姉ちゃん、私…話すね」

「すずか…貴方はそれでいいのね？」

「うん、だって親友だから」

しばらくアリサの疑問に答えられなかったすずかだが、何かを決意
した顔でアリサに向き合った

「あのね…実は私…アリサちゃん達にずっと隠してた事があるの」

「……何よ？」

「何なの？すずかちゃん」

すずかがなのはとアリサに向き合い、俺と恭也、忍が傍らで見守るすずかの真剣な顔付きを見て、普段はもつと高圧的な態度だが今は静かにすずかの話を聞こうとしており、そのアリサの隣ではのが真っ直ぐすずかの目を見ている

そしてすずかの話が終わり…すずかが怯えながらアリサ達の反応を伺うと

「それだけ？」

「アリサちゃん…私の事が怖くないの…？」

「べつにつく吸血衝動だったって飲まれた方が死んじやう訳じゃ無いんでしょ？」

それに危害を加えて来ないなら全然怖くないわよ
まったく…そのぐらいの事で怖がってるなんてバツカじゃないの？」

「アリサちゃん…ちよつと言い過ぎだよ…でも、そうだよ？」

すずかちゃん、私達親友でしょ？そのぐらいの事じゃ嫌いになんてならないよ」

「だって…私化けも…「はい、そこまで」…リュウ君？」

すずかが怯えていたのは何だったのだろうか

吸血鬼だろうが何だろうが気にしていない様子のアリサと諭すような雰囲気ですずかに笑いかけるのは

そんな2人を見て泣きそうな顔になったさすが自分が化け物と言おうとするが止めに入る俺

「リュウ君も…私が怖くないの？」

「じゃあお前さんは吸血鬼を燃やせる炎を出せる俺が怖くないのか？」

「それは…リュウ君が助けてくれたから」

さすが俺にも同じ事を聞いてくるが、はっきり言って俺の方が化け物だと思う

何とか人型を保ってはいるが、両腕両足とか人じゃねえし、その気になれば両腕に魔力を圧縮してそれをビーム状にして放出、周りの物を風ぎ払えるんだぜ？魔力を炎や雷、ドラグーンによると氷にも出来るらしいしな

身体能力も人間離れしてるし、素手で壁壊せるし

「けどお前は俺を怖がらなかつたろ？」

だったら俺が怖がってたらおかしいだろうが

それに多分俺のが化け物だしな

お前はお前、月村すずかだ、吸血鬼だろうと何だろうとお前の周りに居てくれる奴はいるんだからさ」

「うん…みんな…ありがとう…」

「今はとりあえず思いつきり泣いとけ

今まで我慢してた分、全部吐き出しちまえ」

「う…ん…！」

「うしうし、全部吐き出せ」

俺の言葉を聞いて遂に今まで我慢していた物が崩れたのか、その場にしゃがみ込んで泣き出すすずか
泣きじゃくるすずかの頭を撫でてやり、離れると入れ替わりにアリサとなのはが慰めに来る

「んじゃあ、後は任せた
俺は帰るわ」

「ああ、ありがとうな」

「俺は何もしてねえよ
ただ思った事を言っただけだ」

俺のする事は終わった
後ろ手に片手を挙げて恭也に挨拶をしていく
すると恭也が礼を言ってきた
別に何もしてねえよな？

「それでも、すずかの救いになった事には変わりはないわ
ありがとうね」

「まあ何でもいいさ
丸く納まったんならな」

挙げたままの手をヒラヒラと振りながら月村邸を後にした俺だった
… 最近はやてんとこ行ってねえな… そろそろ様子見に行ってみつか

閑話：夜の一族ねえ…何か胡散臭いなオイ（後書き）

ようやく更新：何だかやたらと長くなってしまいましたが、此処まで読んで頂きありがとうございます

最後にリュウが言っていたように、多分次回でA・S編突入だと思います

リインフォースIはどうしようかな…

多分生き残るとおもいますが、どっちがいいか意見あったらどうぞ

グダグダと長い間お付き合いありがとうございました
では、また次回お会いしましょう

何か久しぶり

「つー訳で、今日ははやてん所に行こうと思う」

『どついう訳ですか』

「知らん」

何か全然会ってない気がするからな、たまには会いに行こうという訳だ

何かお土産は…やれる物なんざ持ってねえし、何か買う金も無いからな…しゃあねえ手ぶらで行くか

「もしくはまた魔力球でもやるか」

『どんな影響があるか分かったものじゃありませんから止めて下さい』

「…はいよ」

まあ、確かに微量づつとは言え最終的に大量の魔力を放出する物なんか簡単に人にあげていい代物じゃねえか

「ま、図書館のが近いから先にそっち行って、居なかつたらはやてん家行こか」

『そつしましよつ』

図書館に向かいながらもドラグーンと雑談を

そういえば側に居るのがコイツだけってのも随分久し振りに感じるな俺が目覚めた世界ではコイツしか居なかったからなあ…アースラに拾われてから色んな奴と知り合って、誰かと一緒に居るのが当たり前になってたからな

「そっぴやフヱイトっていつ頃裁判が終わるっけ？」

『もうすぐ終わると先日クロノ執務官から連絡が入りましたよ』

「そっだっただか？」

『ええ、フヱイトさんの裁判とプレシア女史の裁判はほぼ同じなので、アリシアさん、フヱイトさん、プレシア女史の3人で揃って此方に来る予定だそうです』

「ようやくアイツらも解放されんのか」

「っかアースラもずっと此処に居ていいのか？」

「確か巡回任務だとか何とか聞いた事がある気がするんだが…」

「まあとにかく、もうすぐフヱイト達がこっちに来るのか…なのはとユーノが喜びそうだな」

「出来ればはやての事も紹介してやりたいな…時間があればだが」

「そんなこんなではやてんちに着いた訳だが」

『誰に言ってるのですか？』

「いや…何か言わなきゃいけないような気がしてな」

『？』

とりあえずはやては家に居るのか？
インターホンを押してみた

「はい」

「うっす

久しぶりだな」

インターホンからはやての声がし、それに返事をする

「もしかして…リュウ兄ちゃん？」

「おう」

少し間が空いた後、俺と確認する声が返ってきた

「ち、ちよつと待ってな！」

「あ、ああ…」

はやての奴は何をあんなに慌ててんだ？

そのままインターホンの前で少し待っていると勢いよく扉が開け放たれ

「ほ、ホントに兄ちゃんや…」

「久しぶりだな、はやて」

最後に会ったのが初めて会った時だったからなあ

あれから何日ぐらいだ？

1ヶ月ぐらいは経ってっかなあ

「うつ…うえええ…」

「お、おい？

何で泣いて…」

俺の顔を見た途端に泣き出したはやて
会ってなかった間に何かあったのか？

「もう会いに来ないかと思っ…ったわ…」

「ああ…しばらく来なくてすまなかったな
もう用事は終わったし、多分しばらくは何も無いだろうから会いに
来れるしき、泣き止めて…」

顔を歪めて涙を滲ませたはやての側によって頭を撫でながらあやし
てやる

少しの間泣いていたが、すぐに泣き止んで

「まあ…こうして会いに来てくれたんや
許したげる」

「ありがとさん
さて、今日は暇か？」

笑いながら俺を見上げるはやて
やっぱ和むな…つい最近まで次元犯罪者と戦って、それが終わった
と思ったら吸血鬼とか…意味が分からん

「うん！暇やな！」

「ならどっか行くか？
行きたい場所ってあるか？」

一気に元気になったはやてに、行きたい場所を訪ねると思案顔になり

「むう…とりあえず…」

「とりあえず？」

「食材とかを買いに行きたいんや」

食材？そついや1人暮らしだったっけか
金とかどうしてんだ？

「買い物か…んじゃ行くか」

「行こか！」

はやてに場所を聞いて家から財布を取ってきて、鍵を閉めた後はや
ての車椅子の後ろに回って押しながら会話をする

「そついや1人暮らしなんだよな？
金とかってどうしてんだ？」

「後見人のおじさんが居てな？
外国に住んでるみたいで全然会えんのやけど、偶に手紙とかくれる
んよ

ま、この薄幸の美少女に手を差し伸べてくれた親切なおじさんや」

「奇恃な人も居るもんだな…薄幸の豆狸に手を差し伸べるなんざ…」

「誰が狸やねん！」

「お前や、お前」

そんな感じで軽口を叩きながら歩いていくと、はやてがよく利用するというスーパーに着いた
平日の昼間なのにタイムセール間近でおばさん達が殺氣立ってるんだが…

「入るの怖いんだが…」

「兄ちゃん…頑張つてな…？」

スーパーの入り口で立ち尽くす俺の肩にそつと手を置きながら応援してくるはやて

「おうっ！」

…つて入るの俺かよ！？」

「こんな車椅子の美少女を殺氣立ったおばさん達の中に放り込むんか？」

兄ちゃん酷いわ」

「美は余計だ、美はにしても…」

再びスーパーに目を向けると視界に入るのは互いを牽制しあうおばさん達

「…しゃあねえ、行くか！」

「男を見せるんや！」

兄ちゃん！」

両頬を叩いて気合いを入れる俺と、激励するはやて死地に赴く戦士みたいだな…あながち間違っちゃいないが

「兄ちゃん！コレがメモや！」

「おう！行くぜえええ！」

はやてからメモを受け取り、スーパー内に突入！

俺が突入して、おばさん達の間を通り抜けて奥の方に着いた時

「タイムセール開始です！」

店員の声が…戦いの始まりを告げる声が鳴り響いた…

俺…只のスーパーで何やってんだろ…

*

「ハア…ハア…」

マジで死ぬかと思ったわ…」

「ご苦労さんやったな！」

兄ちゃん！無事で何よりや」

「全然無事じゃねえよ…」

何なんだよあのおばさん達…俺って見た目子供だよな？

ガキ相手に容赦無いんだが…

品物に手を伸ばしたら払いのけられ、身を乗り出そうとしたらエルボードロップ

品物を手にとって瞬間手から剥ぎ取られて、品物を確保してカゴの中に入れていたら盗られて…（実際にやるのは止めましょう）

そんな感じの死闘を繰り返し広げつつも何とか目的の物をかき集めて購入する事が出来た

普通のスーパードだよな？何でこんなに疲れてんの？

「兄ちゃん、今日は家で晩御飯食べて行かん？」

「ふむ…別にいつか

（クロノには後で連絡入れときゃいいだろ

まあ夕飯は食堂だし、連絡入れる必要があるかどうかも分からんが）

」

膝に手を当てて息切れしていたらはやてが俺に晩飯の誘いをしてきた別にいいよな？多分…

「ホンマ！？よっしゃ！

何かリクエストってある？」

「普通そついうのは買い物の前に聞くもんじゃねえか？

別に今日はやてが予定してた献立でいいって」

もう一度この戦場に飛び込むの嫌だぞ

それにもうセール品は殆ど残って無いだろうし

「それもそうやな…」

分かったわ！任せとき！

今日は何時よりも美味しく食べれそうやな」

「1人だと美味しいもんも味気ないしな」

まあ何とか無事？に買い物も終えて、はやてんちに帰る事に
しかし、まだまだ晩飯までは時間があるのでしばらくゲームなどで
時間を潰していましたとさ

「おまつ…バカヤロツ…こっち撃つなよ！」

「あちゃー…アカン、誤射してもうたか…」

「うおっ！？」

くそっ…やられたか…」

ん？今は何やってんのかって？

連合V S Z・A・F・T

分かる人はこのシリーズ結構好きだな？

たったいまアーケードモードで俺のソードストライクがはやてのバ
スターに誤射を喰らって敵の攻撃で落ちたところだ
チャージ射撃を敵に接近してる時に撃つなや…

そんなこんなで夕飯に、献立は鍋

そろそろ冬だなあ…

「あゝ…染みる」

「なんや兄ちゃん、おっさんくさいわ」

いやあ、鍋とか久しぶり…なのか？

多分この体になる前は食ったことあるんだろうよ
初めての感覚じゃないしな

「最後の肉もーらい」

「あつ！それはウチの肉や！」

鍋の具は豚肉、白菜、えのき、椎茸、豆腐、しらたき、大根
醤油ベースの汁だな

「早い者勝ちだ」

「ああ…」

はやてに取られる前に取り皿にはやての肉を奪い喰ってやると、も
のっそいがつくりするはやて

「セール品にしては美味いな、この肉」

「よくも最後の一枚を…」

そっこうしながらワイワイやって、メの雑炊に

「はやては鍋のメって雑炊派なのか？」

「うーん、どっちかっていうと雑炊のが好きやなあ…」

兄ちゃんは？」

俺か…別にこだわりとかは全く無いんだよな…

「美味けりやどっちでもいいや」

「あはは！兄ちゃんらしいわ」

失礼な、俺はそんなに適当に見えるか

『はい』

いきなり念話で入ってくんじゃねえ
っーかデバイスって念話使えんのか？

『他のデバイスはどうか知りませんが、私は使えますよ』

………普通使わんと思うけどなあ…
まあいいや、帰んのめんどくせえな…

「ふう…そろそろ帰るか…
洗い物ぐらいやってくよ」

「あ、別にええよ？」

「いいって
飯食わせて貰ったんだしな」

はやてが俺を止めようとするが、そのまま片付けを続行
皿や土鍋を流しに置き、食器洗いを開始

つつても洗うのはぼん酢を入れた皿と土鍋に野菜を置いた皿を洗うだけ

既にそんな作業は終わらせてこたつではやてとのんびりしている俺だった

「そろそろ帰らないとなあ」

「もう帰るんか…？」

寝転びながら呟くと寂しそくに聞き返してくるはやて
やっぱ1人は寂しいよなあ…

でもそろそろ帰んねえとクロノに怒られるんだよ

「悪いな…今度はちゃんと許可得て来るからさ」

「じゃあ、今度家に泊まってくれへん？」

「ああ、分かった」

「約束やからな！」

こうして、今度はやてんちに泊まる事を約束して急いでアースラに帰る俺だった

多分起こられるけど…

何か久しぶり（後書き）

どうも、こんにちは

実はこの話を書く前に、無印の終わりの時にチヨロツと出て来たレンドルってオリキャラ覚えてます？

アイツのキャラ作りと、紹介を兼ねて話を書いていたのですが…無駄に長くなった上に何が書きたかったのか意味不明…今までのもそうかもしれませんが

と、いうわけでレンドルの事が気になっていた方はA・s編が終わった後に閑話をしばらく書こうと思っているので、待っていてやって下さい

では、また次回にでも

誕生日かぁ……そういや…俺って何時なんだ？

前はやてんちから帰った俺は、クロノに怒られながらも次ははやてんちに泊まっついていいと許可を得たんだ

だけどその代わりに管理局の仕事を手伝ってくれて頼まれて…

ぶっちゃけこないだの事件で負傷した隊員の代わりとして使えねー

新人を回されたく、人手不足に近い状態らしい

別に資質に問題は無いんだが、考え方が一言で言つと「正義は必ず勝つ」らしいんだ

戦場では真っ先に死ぬんじゃない？

まあそんなこんなで俺も忙しく、ようやく暇がとれたんだ
クロノも付き合わせて悪かったな、とか

言つてたけどさ…もしかして報酬無し？まさか、それは無い…よな？
？ありそうだから困る

ま、んな事は置いといてさっさとはやてんちに行きますか

「ふう…そういやもうすぐはやての誕生日らしいな」

『何かプレゼントでも用意してあげたらどうです？』

「クロノから報酬が出りゃ出来るんだがな」

残念ながら俺は文無しなんだよ

ちったあ給料ぐらいくれてもいいじゃねえか

つっても地球の通貨で貰わないと意味ねえけどさ

ん？色々考えてるうちにはやてんちに着いたか

インターホンを押し、少し待つとはやての声が聞こえてくる

『はい？』

「うつす、ようやくこれたわ」

『リュウ兄ちゃん！

すぐ行くわ！』

何かいつものやり取りのような気がしてきたな…

ついでに言うところからいつもどおりだ

とりあえず夕飯の材料を買いに行つて、はやてんちでゲームやつて夕飯を食う

そういや今日は泊まれるって話をしたらすぐえ喜んでたやっぱり1人は寂しいよな

「はあゝ食つた食つた」

「お粗末様や」

夕飯も終わり、俺とはやては向き合いながらこたつでのんびりしていた

時間が8時半ぐらいになったころにはやてが風呂に入ると言い出したんだ

「んじゃ俺は後で入るよ」

「えゝ一緒に入らんの？」

「むう…車椅子に乗ってるし…構わんか」

こたつの電源を切つて車椅子を押してやるとはしゃぎだすはやてしかし、何かを思いついたようでニヤニヤしながら此方を振り返り

ながら

「襲ったらかんで〜？」

「寝言は寝て言え

10年はえーんだよ」

此方を見てくるにやけ顔をチョップをかましてやると頭を押さえて頬を膨らませる

「兄ちゃんいけずやわ〜」

「喧しいわアホ」

悪いな、俺はロリコンじゃねえんだ
そのあと、はやてと一緒に風呂に入ったんだが…落ち着き無さ過ぎ
だろ

いきなり抱きついてきて「当ててるんやで〜」とか言われてもさ…
絶壁じゃねえか

言ったら殴られたけどな

はやてを横抱きにして風呂に浸かったらはしゃぐはしゃぐ

腕を振り回してはしゃぐもんだから俺の顎に肘打ちがクリーンヒットしてぶっ倒れそうになったぜ…あれ？言われたからやったけど、別に抱えながら風呂に浸からなくてもよくね？

まあ、そんなこんなで時間も進んで寝る時間

「そろそろ寝るか？」

「一緒に寝よか」

「まあ…構わんか」

こたつから出てはやてを抱えて部屋に向かう

「明日一旦帰らなきゃいかんが…
また来ていいか？」

「勿論や！
…なるべく早く来てな？」

はやてを運びながら話をする
せめてはやての誕生日までに来れりゃいいな…
っ！か絶対来る
クロノを無視してでも来る！

「んじゃ、もう寝な
お休み」

「お休みな」

はやてをベッドに寝かせて毛布をかけ部屋の電気を消し、部屋に持ち込んだ布団に俺も入って寝る事に（流石に同じベッドに2人は無理でした）

しっかし…どうすっかなあ…
誕生日つつてもプレゼントなんかやれねえし…

前に俺の魔力球をやったときに御守りにしてたら病気の痛みが和らいだって言ってたからな、魔力球を『やめて下さい』
…いきなり入ってくんじゃねえよ

『言っただでしょう』

魔力球は危険だから止めて下さいと』

魔力が微量づつでしか放出しないようにクロノかユーノに封印処理を施して貰えばいいんじゃないかね？

『魔力が放出されないようにして貰えばいいのでは？』

もし魔力が充満した状態で何かのはずみに壊れたらどうするんだ？それこそやつべー事になるぞ？

『ふむ…確かにそうですね…』

でも、あくまでもそれは最終手段ですからね』

はいはい、分かってるって

ま、今日は寝るかな

『ええ、お休みなさい』

おう、また明日な

*

「ふわあゝあ…」

ふう…一旦帰らなきゃいけないのかよ…

めんどくせえな…

はやては…まだ寝てんのか

「つーか6時で…やけに早く目が覚めたな

「顔洗ってくつか…」

とりあえず昼前には帰ってこいって言うてたからな…
顔洗って来てから、はやてを起こすか

「おい、はやて…起きろーい」

「う、うーん…兄ちゃん？

何で居るんや？」

「コイツ…寝ぼけてんな

「昨日泊まっただろうが」

「ああ、そうやったね…

ふわぁ…今何時や？」

寝ぼけ眼で時間を聞いてくるはやて

「6時半だな」

「そつか、今日帰るんやっけ？

朝ご飯作るけど食べてく？」

そいつはありがたい

「ああ、ありがとな」

「任せとき！」

はやてが着替えるのを待つて、（勿論部屋の外だぞ？俺はロリコンじゃねえ！）車椅子を押してリビングへ

朝飯を食った俺達はこたつでのんびりしたり、ゲームやったり、少し散歩に行ったりとまったり午前を過ごしていたんな事をしてるうちに俺が帰る時間に

「もうそろそろ帰んなきゃな」

「もう帰るん？」

お昼食べてけぱいいのに」

…昼前には帰ってきて次の任務の打ち合わせやるって言うてたからなあ…

流石に今回も説教されたらもう泊まりに行けなくなりそうだよなあ…

「悪い、昼前には帰ってこいって言われてさ」

「そうなんか…」

しょぼくれるはやて

ま、またすぐに来れるよな

「はやての誕生日にはまた来るからさ」

「…約束やで？」

「おう！クロノの奴を振り切っても来るよ」

「…うん！」

若干涙目になってたが、撫でながらまた来る約束をすると笑顔になるはやて

「んじゃ、またな」

「絶対に来るんやで！
約束やからな！」

「分かってるって」

はやてに見送って貰いながらアースラへの帰路に着いた俺話があるつつてたけど、何の話なんだろ

確か話の後に任務について話すって言ってたな
まあ行きやあ分かるか

*

アースラに帰り、クロノと昼飯を食った後に部屋で待っていたら呼び出しがかかった

指定された部屋はモニタールーム

どうやら本局からロストログアの情報が送られてきたらしく、その事について話しておくとの事

「つまり…一度起動したらかなり厄介だって事だな？」

「ああ、一度起動したら所有者を取り込み辺り一帯を破壊し尽くす

だろう」

件のロストログアの名前は闇の書

守護騎士と呼ばれる4体の魔法生命体に管制人格と呼ばれる闇の書の機能を統制する人格プログラム（コイツも魔法生命体らしい）がプログラミングされており、守護騎士が闇の書に魔力を供給する事により闇の書のページが埋まっていき、666ページ全てが埋まると管制人格が現れる

管制人格が現れたら最後、所有者を取り込み辺り一帯を破壊し尽くす例え起動前に所有者の息の根を止めたとしても転生プログラムというのが組み込まれており、再び守護騎士諸其他の人間へと宿ってしまふ（コレを聞いたとき、魔法って何でもありだと思った）

「厄介なロストログアだな…」

「ああ…そして闇の書は…僕の父さんを殺したんだ…！」

クロノがまだ小さい頃（今も小さいじゃねえかと思ったんだが、言ったらデバイスを頭に突きつけられた）クロノの父さん

クライド・ハラウンがコイツの事件に対して出動したらしい

その時にクロノの父さんは闇の書を食い止め、クロノの父さんごとアルカンシエル（次元航行鑑に搭載されている砲撃

はつきり言ってヤベエ

着弾地点とその周りを跡形もなく消し去る）で消し飛ばしたらしいんだが、例の転生プログラムで再び闇の書は現れてしまったらしい

その後説明が終わり、俺は部屋に戻っていた

流石にあんな状態のクロノに掛ける声は無かった

歯あ食いしばってたからな

まあアイツには借りもあるし、支えてやるさ
借りなんざ無くても支えてやるけどよ
つかマジではやての誕生日プレゼントどうしょ…
あんな状態のクロノに金くれとか言えねーよ
しゃあねえ…誰かに封印処理を頼むか…

*

そして時は流れ…はやての誕生日
俺は紐の一点に魔力を固め、ネックレスのような形状にした魔力球
を片手にはやてんちに向かっていた
結局プレゼントは魔力球になっちまったが…

「しゃあねえだろうが
あんな状態の時に金くれとか言えねーよ」

因みに封印処理はレンドルにやってもらった
え？それ誰だよって？

アレだ、確か無印終了した時の話に2、3行出てたと思う
まあレンドルについては後々話すでしょう
とりあえず今ははやての誕生日だ
そっぴいや昨日ドラグーンに闇の書について聞いてみたら面白い事が
分かってな

*

「闇の書についてのデータは見つかったのか？」

『貴方が目覚めた研究所から入手したデータによると、闇の書の本来の名前は夜天の書です』

「夜天の書……？」

ドラグーンによる説明を簡単に纏めるとこんな感じ

本来闇の書は夜天の書と呼ばれる魔導書で、あらゆる世界の魔法を記す為に転生プログラムを組み込まれ、色々な世界を様々な主と共に渡り歩いていた

だが、ある主の手に渡った時にその主が夜天の書を改変し、転生プログラムだけを残した全くの別物へと改悪してしまった

闇の書は蒐集と呼ばれる魔力を集める行為を通してページを埋めていき、覚醒する

蒐集の過程で魔導士から魔力を蒐集した場合、その魔導士の扱える魔法を使う事が出来る

……以上だ

まあ一言で纏めるとかなりヤベエ代物って事だ

*

「さて、はやてんちに着いたか」

いつの間にかはやてんちに着いていた

因みにドラグーンはアースラでメンテナンス

2、3日再起動出来なくなっちまうらしいが、再起動したらすぐにクロノに夜天の書の情報を渡すように言っておいた

あ、因みにアースラは本局に戻ってる

フェイトの裁判が始まるらしい

え？こないだ終わりそうって言うてたって？

すんません…聞き間違いでした…

さて…誰かはやて以外に居るな…

友達？親戚？はやてと一緒にいるみたいだが

ま、いつか

インターホンを押すと何時ものようにはやての声…ではなく、おそらく成人、もしくはそれに近い歳であろう女性の声が聞こえてきた

『はい』

「あゝはやての知り合いなんだが…」

『ある…はやての？

少しお待ち下さい』

…ある？

何て言い掛けたんだ？

インターホンを切った音がして少し待つと、玄関から出て来たのは桃色の髪をポニーテールにした女性

「…貴方が？」

「あ、ああ…リュウが来たと伝えてくれれば分かってくれると思うんだが」「少しお待ちを…」

美人だったんだが、キツい

いきなりこつちを値踏みするように見て来やがった

っ！か殆ど睨んできた

俺何にもしてねえよなあ…？

「兄ちゃん！」

「うつす、約束通り振り切つて来たぞ」

またまた少し家の前で待つと、家の中からさっきの女性とは別の女性に車椅子を押されてはやてが出て来た

はやての車椅子を押してきたのはフワフワした金髪の女性

さっきの人とは違ってキツい感じではなく優しそうな感じだった

え？好みかって？

女がどうかの前にプレシアから聞いた逃げた科学者を捕まえないとなあ…

更に俺みたいなのが増えたら気の毒だ

「さっすが兄ちゃんや！」

「約束は守んねえとな

んで、お前さん家族居たのか？」

喜んでるはやてから目線を外し、此方をずっと見ている（片方殆ど睨んでる）2人について訪ねてみると

「え、あ、ああ！

えゝと…そうや！し、親戚なんよ！

実は今まで外国に居たらしくてな？昨日いきなり来てん」

「へえゝよかつたなあ

家族が出来てさ」

「うん！」

なぐんか裏がありそうだが…まあ追求しないでおいでやるか
家族が出来た事は本当に嬉しそうだったし、この2人もはやての返
事を聞いて嬉しそうに笑ってるしさ

「そうや、立ち話もなんやし中に入ってや
実はもう1人おるから紹介するで
そこで2人もな」

「おう、んじゃあがらせて貰うよ」

そう言つて家に入ると、リビングで赤色の髪を2つに結った女の子
がこたつに入つてテレビを見ていた

「あ、はやて！」

はやてに気付くと笑顔になって走り寄ろうとしてきたが

「…誰だ…お前」

はやての傍に立つ俺に気付くと睨みつけてくる

「ヴィータ！こんなんでも一応お客さんやで！」

「扱いヒデエなオイ」

「冗談やって」

この少女の名前はヴィータと言つらしい

俺とはやてが茶番をしているとはやてに怒られたからか、自己紹介をしてくれた

「…ヴィータだ」

「おう、俺はリュウだ」

若干不満げな顔で自己紹介するヴィータ
俺も自己紹介をすると俺の顔を一瞥したあとすぐにはやての傍に行
ってしまった

「ヴィータがすまないな、私はシグナムだ」

「私はシャルマルよ
よろしくね？リュウ君」

「ああ、よろしくな」

桃色の髪をポニーテールにしているのがシグナム
金髪の方がシャルマルか

はやての態度を見て睨むのは止めてくれたみたいだが、まだ警戒気
味のシグナム

笑うつつーよりも微笑んできると言っただ方がいいような笑みを浮かべ
ているシャルマル

んで、はやての隣で俺を睨んでるヴィータ
まあはやてが楽しそうだし、よかったよ

そんなこんなではやて達とゲームやったり飯を食ったりのんびりし
ていた（そっぴいやデカい犬が一匹居たんだが、何時飼いだめたんだ？
つーかあれ狼じゃねえか？

あと、はやてにプレゼントで例のネックレスをやったら何故かはや

て以外の奴らも反応してたんだが

シグナムが俺の方を見てシャルマルがネックレスを凝視してたな

時間もかなり経ち、気付けば夜中近い

そろそろ帰ると俺が言つと（アースラが本局に戻ってる間はなのは
んちに泊めてくれるらしい

…そこ！ヒモとか言ってるじゃねえ！）シグナムが送ってくれると
言い出し、断ろうと思ったんだがはやても勧めてくるので送って貰
う事に

そうして2人で夜道を歩き、少し開けた所でシグナムが急に……
人除けの結界を展開した

「…どういふつもりだ？」

「それは此方のセリフだ

貴様…：どういふつもりで我が主と闇の書に近付く…：返答によっては
…斬る！」

結界を展開すると同時に俺から素早く距離をとり、バリアジャケット
を展開するシグナム

そのまま剣を構え、切っ先を俺に向ける

主？闇の書？何の事だけわけが分からんのだが…：シグナムは闇の…

いや、夜天の書の守護騎士って事でいいんだよな？

…事はシャルマルにヴィータもか…？

だが守護騎士は4体の筈…：まさか俺を始末する為に潜んでいるのか？

…つか主って…：状況的にはやてだよな…？

アイツから魔力は全然感じ無かつたんだが…

「ち、ちよつと待て！

何で俺がお前の主を狙うんだよ！」

「とぼけるな！

貴様も闇の書の力を狙っているのだろうか！」

んなもん要らねえっての…

にしても…何でシグナムは夜天の書の事を闇の書って呼んでるんだ？
守護騎士達も闇の書と強制的に認識させられているのか？

「何で夜天の書を闇の書と呼ぶ！

お前は夜天の守護騎士じゃないのか！」

「夜天の…書？

何だ…？聞いた事は無いはず…だが…」

闇の書本来の名前を聞かせると頭を抱えてうずくまるシグナム
記憶の奥底で改悪される前の事を覚えている？

「シグナム！」

「今度はシャルカよ！」

頭を抱えているシグナムの傍に転移して来たシャル
封鎖結界を通り抜けたって事は…シャルも守護騎士だよなあ…

「惑わされないで！

はやてちゃんを守るんでしょ！」

「…ああ！我々が何であろうと…主はやてを守り抜く！」

やってらんねえ…

2体1かよ…

「別にはやてを狙ってなんかいねえっての…」

「ふん、あくまでとぼけるつもりか

確かに最初はただの一般人かと思っていた、貴様から感じられる魔力は一般人のそれと同等…いや、それ以下だったからなだが、主に渡した首飾りから膨大な魔力が感じられたのだ！」

俺の普段の魔力って一般人以下なのか？

まあ…いざとなったら前にドラグーンが緊急時用に組んだ転移魔法で逃げるか（自動で複数転移を行う為、探知に引っかけられない）使用する為に魔力球1つか…最近造ってなかったからなあ…転移用のを別にしたら後3つかよ…やってらんねえ

「行くぞ！」

レヴァンティン！」

「やるしかねえか…！
ルファル！」

シグナムは騎士剣の形状をしたデバイスを起動させ、俺はルファルを起動し、構える

「飛竜一閃！」

「オラアアア！」

こうなりややってやるよ！

誕生日かぁ……そういや……俺って何時なんだ？（後書き）

次回リュウとシグナムの決着

まあまだ始まったばかりだし、戦いはまだまだありますが
では、また次回にでも

龍と騎士（前書き）

三人称

龍と騎士

「ハアアア！」

「ラアアア！」

雄叫びを上げながらぶつかり合うシグナムとリュウ

両者共に一步も退かず、切り結ぶ

リュウがルファルを振るえばシグナムはレヴァンティンで受け流し
シグナムがレヴァンティンで斬りかかればリュウはルファルで受け止める

一進一退の攻防が続き…互いに疲弊してきた頃

「くっ…中々やるな…」

「ハア…ハア…たく…何でこんな事になってんだよ…」

息切れをしながらも警戒を解かず、相手に一瞬でも隙が出来れば仕掛けようと様子を窺う2人

一見互角に見え、このまま拮抗したままかと思えるが…リュウが不利だ

シャマルが離れた所でリュウの様子を窺い、隙を探している

「（チツ…このまま続けば泥沼…最悪シャマルに殺られるな…）」

「どうした…？」

来ないなら此方から行くぞ！」

レヴァンティンを構え、リュウに再び斬りかかるシグナム
それを受け止めつつ反撃をするも、バリアジャケットを少し掠めた
程度だ

「（このままじゃジリ貧だな…シグナムも疲弊してくるだろうが、
その後にシャマルを相手するのは流石に無理だ
魔力球を使うか…？）」

最近魔力球が必要にならなかったので造っていなかったのが拙かった
D・ダイブはおるか魔力球さえも使わないリュウの魔力はF・
はつきりいつて使えない

おそらく総魔力量はSSも越えるだろう

だが、その魔力が使えるければ宝の持ち腐れだ

リュウが一度に放出出来る魔力はFランク相当

今はシグナムがただ斬りつけてきているだけなので防げているが、
魔力を纏わせた攻撃を放ってくればリュウの障壁じゃ保たないだろう
斬撃自体は防げるだろうが、おそらく魔力でのダメージは直接叩き
込まれる

魔力球で障壁の強度を強くする方法もあるが、得策ではない

寧ろ愚策だ

その場しのぎをしたところでいずれは障壁を破られるのがオチ

この戦闘でシグナムとシャマルは守りに徹してリュウの魔力球を使
い切れさせれば

リュウは攻めに徹し、魔力球が切れる前に2人を倒せば勝ちとなる
リュウは魔力球の数が少ない為に技を出せずにいる上、ドラグーン
が居ないため起動出来る術式が限られてくる（練習風景はA・S編
が終わり次第記載します）

シグナム達は、普段は魔力が少ないが例の首飾りを見る限り魔力量
がこれだけのわけがないと勘違いしており、何時来るかも分からな

いリュウの魔力量上昇に備えて様子を見ている

両者互いに牽制のし合いになっており、決定打が一度も無いまま拮抗状態に

「（何故だ…？）

あの首飾りに籠められていた魔力は相当のモノだった…

何故その魔力を出さない…？

それとも…私には出す価値も無いと…？

だから奴も牽制しかしてこないのか…？

ならば…その魔力を引き出してくれる！」

「（どうする…？）

魔力球は3つ…牽制で使うのは愚策だな

一発も外せねえし…

バインドは使えねえから…カウンターで確実にぶち込むしかねえか…」

リュウは魔力球の使い方を思索し、シグナムは勘違いを暴走させていく

リュウが手加減していると思ったシグナムがレヴァンティンを構え、何かが来ると感じたリュウが両手を目の高さまで上げて防御姿勢を取る

「いいだろう…貴様が本気を出さぬと言っなら…出させるまで！」

「（コイツは何を勘違いしてやがる…！）」

「行くぞ！」

カートリッジリロード！」

腰を落とし、一瞬溜めてから一気に距離を詰めるシグナムと、出方を見るために足に力を込めて踏ん張る準備をするリュウ
シグナムが叫ぶと同時にレヴァンティンの柄の部分から薬莢が排出され、シグナムの魔力が跳ね上がる

「んな…!？」

俺の魔力球と同じ!？」

「ハアアア!」

刀身が分離し、鞭のようにしなる

シグナムがレヴァンティンを振るうとそれに合わせてリュウを取り囲む

「連結刃!？」

また厄介な武器を…!」

連結刃が次々と襲い来るが、リュウはステップやバク宙でかわし続ける

「クソッ!やるしかねえか!」

魔力球を素早く口に含み、魔力を上昇させるリュウ

「っ!来るか!」

「ウオラアアア!」

一気に魔力を練り上げて両手に纏わせる
対して近付かせまいと連結刃をリュウに放つシグナム

「ハッ！当たつかよお！

燃え尽きろ！クリムゾンノート！」

「ぐう…！」

かなりの速度で迫る連結刃を軽々とかわし、ルファルに纏われる劫火へと変換された魔力をシグナムへと叩き付ける
だが、素早く剣を元に戻してリュウの一撃を防ぐ

「ラアアア！」

「ぐっ…う…！」

先ずは左腕をレヴァンティンに叩き付け、衝撃でシグナムが後ろに弾かれた隙を狙って追撃の右腕を叩き込む

「ま…だ…まだあ！」

「チッ！」

しかし2発とも防がれ、逆に体の硬直時の隙にシグナムが押し返す

「（クソッ…残りの魔力球は2つ…

確実に当てなけりや殺られる…

オマケに使えんのはクリムゾンノートだけ…他のデバイスもドラグーンと一緒にメンテナンスに出しちゃったから手元にはルファルしかねえし…

もういいか…考えんのは止めだ）」

「（ハア…ハア…くっ…！

何だ…今のは…

カートリッジシステム？

だが何かが違う…

…フツ…どうした、烈火の将よ…相手が何だろうと…主の剣となるのみ…考えるのは止めだ！」

互いに思考を止め、相手に向き直り

「「こんな所で…」」

互いの得物を構え…

「「負けるわけにはあ…！」」

「いかねえんだよお！」

「いかんだ！」

走り出す！

「行くぞ！」

カートリッジリロードオ！」

「行くぜえええ！」

シグナムはカートリッジを使用し、リュウは魔力球を噛み砕く
レヴァンティンとルファル、2つのデバイスに炎が纏われる

「紫電一閃！」

「クリムゾンノート！」

火焰を纏ったレヴァンティンと劫火を纏ったルファルがぶつかり合い、2人の周りに焰が渦巻きだす

「ハアアア！」

「ウオオオオ！」

互いのデバイスに収束された魔力がぶつかり合い、逃げ場を求めて荒れ狂う

2人を中心に火焰と化した魔力が渦巻く

そして荒れ狂う魔力が逃げ場を無くして暴走し…爆発を起こした

「ぐっ…がっ…」

「ぐう………」

互いにボロボロになりながら吹き飛ばされる
バリアジャケットを装着していない分リュウのが傷付いてしまっている

「ク…クク……クカカ…」

「フフ…ハハ…フハハ…」

ボロボロの姿だが、互いに笑いながら立ち上がり

「そう言えば魔導士として名乗っていなかったな…」

私はベルカの騎士…ヴォルケンリッターが将、シグナム」

「俺はリュウ…ただのリュウだ
後は…コイツで語ろうか？」

「フツ…そうだな」

改めて魔導士として…

戦う者として名乗り合い、リュウがルファルを構えると微笑と共に
レヴァンティンを構えるシグナム

「行くぞ！」

互いの武器をぶつけ合う

シグナムがレヴァンティンをリュウに振り下ろせばリュウはルファ
ルで防ぎ、カウンターを入れようとする

リュウがルファルで切り裂こうとすればシグナムがレヴァンティン
の刀身で弾く

レヴァンティンながらリュウの頬を裂き、ルファルがシグナムの腕を
裂く

傷は浅いが次々と傷を負いながら尚、ぶつかり合う

最早互いにかわすこと等考えず、ひたすらに目の前の敵を倒す
ただそれだけを思い、武器を奮う

「レヴァンティン、カートリッジリロード！」

「まだ来やがるのか！？」

シグナムがカートリッジをリロードするのを見て、身構えるリュウ
だが

「何だっ！？」

突然両腕両足がバインドで縛られ身動きが出来なくなり、吊り上げられる

「シャマル…！テメエ！」

「さ、シグナム

早く止めを」

「…すまない、リユウ

出来れば違う形でお前と戦いたかった…」

叫ぶリユウなど意に介さずにシグナムを促すシャマル
少し躊躇うシグナムだったが悲しそうに謝り、弓状に変形したレヴ
アンティンを構えて弓を引く

「駆けよ…！隼あ！」

「くそっ…たれがあ！」

「そんなっ！？」

シグナムが矢を放つと同時に無理やり右腕のバインドを引きちぎったリユウ

しかし、シグナムの放った矢を止めるには片腕では不可能

「がっ…あっ…！」

止めきれはしないが何とか右腕を犠牲に急所から腹へずらすことは出来た…が

矢に射抜かれた衝撃でバインドが壊れ、衝撃により吹き飛びリュウ地面に叩きつけられた後、地面を転がっていく

やがて転がるのも止まり、傷だらけのリュウの体はピクリともしない

「やった…か？」

「多分…」

リュウを倒せたかどうかを確認するためにゆっくり近付いていく2人

「が…ああ…」

「！」

「ま、まだ！？」

よろよろと立ち上がるリュウを見て後ずさるシャマルとレヴァンテインを構えるシグナム

右腕がボロボロになり、腹に穴が空いて血だらけの状態のリュウそして魔力球を取り出し

「ぐ…があ…」

「！？

させるか！」

噛み砕いて魔力を一気に補給

その補給した大量の魔力を全てドラグーンの組んだ緊急時用の転移

魔法に注ぎ込む

「転…移…！」

「くっ…！」

「きゃあっ！？」

リュウが転移魔法を組み上げると同時に多大な魔力の奔流がリュウを取り巻き、シグナムを近付かせない

シグナムとシャマルが魔力によって巻き起こる衝撃に顔を覆うやがて魔力が収まり、2人がその場を見ると

「逃がしたか…！」

「そんな…ダメ、痕跡が多すぎて追跡出来ない…」

魔力により地面が抉れていたが、リュウの姿は跡形も無かった

「まあいい、傷を負わせただけでもよしとしよう」

「そうね…簡単には動けるようにはならないでしょうし…
その間に対策を考えなくちゃ…」

シャマルの魔法でシグナムの傷を治し、封鎖結界を解いて帰路に着く2人

一方多重転移で別の次元世界に逃げ延びたリュウは

「ぐっ…がっ…」

全身が血だらけになりながらもよろけながら歩いていた

「くそっ… やってらんねえ…

ヴォルケンリッター…？」

夜天の書の守護騎士達の名称か…

カートリッジ… 魔力球と似てたな… いや、俺の魔力球がカートリッジに似てんのか？

ドラグーンがアースラで再起動出来れば情報はクロノに渡る…

俺もさっさと帰らなけりゃな… カハッ…！」

血反吐を吐きながらも歩き続ける

仲間が居る世界へと帰る為に、先ずは体を休められる所を探すために

*

「リュウ兄ちゃん、次は何時来てくれるかなあ…」

「……………」

そろそろ寝ようとしている時、何気なく呟くはやて

そんなはやての呟きを聞いてやるせない表情になるシグナム

*

「早くリュウとなのはに会いたいな…」

「ふふ、すぐに会えるわよ
貴女だけだけど、地球に行くんでしょう？」

「いいなあ…フェイトだけ…」

「ごめんね…だけど姉さんもすぐに会えるよ」

管理局本局の一室で話しているテストロッサー家

フェイトは管理局所属の囑託魔導士として奉仕作業をする事を命じられ、プレシアは魔力がまだ扱えず、アリシアはリンカーコアが無いためにミッドチルダでお留守番

*

「リュウ君…遅いなあ…何かあったのかなあ…」

高町家でリュウの事を心配しているのは高町なのは
今日からアースラが地球に帰ってくるまで家にリュウが泊まる筈だったのだが、全く来る気配が無く、おかしいと思っていた

「何かあったのかなあ…」

明日練習の前にレイジングハートにリュウ君の魔力を探して貰おうかな…」

*

「ハア…ハア…此処…なら…」

あれからどれだけの時が経ったのだろうか

たまに見つける水場で水を飲み、落ちている木の実を噛み砕いて飲み込む

そうまでして今まで生き抜いてきたのは仲間の所に帰る、そしてはやてとの、また会うという約束を守る為

傷は既に塞がったが、代償として右腕がもう駄目になった

血反吐を吐きながら、足を引きずりながら、何とかして辿り着いたのは洞窟

かなり広く、奥行きもある

「何…だ？奥に…何か…居る？」

『我が名はアジーン』

「ア…ジーン…だと？」

壁に手を付きながら少しずつ奥へ進むと、其処に在ったのは巨大な龍の骸

その骸から聞こえた名前は聞き覚えのある名

死しても尚、生き続ける龍

細胞の一つ一つ全てがリンカーコアと同等の働きをする存在

そんな龍の細胞を移植し同調させた体を持つのがリユウ

『ほお…私の力をその身に受け入れつつも人の姿を維持出来るとはな…しかし、貴様…何故戦う』

「あ…？」

突然のアジンからの問い掛け

『貴様の記憶の断片を見た
紛い物として命を与えられ…目的も無く戦い…今こうして死にかけている』

「……………」

『貴様に得られる物等ありはしないというのに…
何時人としての自我を失うか分からない状況で、他人の為に戦い…
自分が消えていく』

「うるせえよ」

『何…?』

アジンからの問い掛けを一蹴し

「俺が何であろうと俺は俺だ
紛い物だろうと、造りモノだろうと構いやしねえ
俺は俺として生きる!」

『その為に貴様という存在が消えようともか?』

「ああ!」

例え何時か自分が消えようとも、全力で自分がやりたいことをやり
抜く
そんな道を選んだリユウ

『ククク…クハハハ！』

いいだろう、貴様に力をくれてやる
我に残りし力全てを！』

「おう…来い！」

アジーンの骸から赤色の魔力が湧き上がり、リュウの体へと集まっ
ていく

ピクリとも動かなかった右腕は動くようになったが肘から先は肌が
真っ黒になり、赤色の線のような模様が幾つも浮かび上がる

「俺は…俺だ…

どんな力を手にしようと…姿形が変わろうと…
俺はリュウなんだよ！アジーン！」

赤色の線のような模様が幾つも浮かび上がる

「俺は…俺だ…

どんな力を手にしようと…姿形が変わろうと…
俺はリュウなんだよ！アジーン！」

龍と騎士（後書き）

え？アジーンはこんなキャラじゃねえ？

キャラが掴めないんだよ！オリキャラ扱いなんだよ！

ようやくプレスオブファイアらしい所が出せたと思います
まあ今後修正したりすると思いますが

では、また次回にでも

鉄槌の騎士との激突

「チイツ…！」

舌打ちをしながら右腕を押さえているのはリュウ

アジーンに残っていた全ての力を体に取り込んだのはいいが

その大半が既に機能していなかった右腕に集中したため変異していた
取り込んだとは言ってもやはりD・ダイブ時でしか力は使えない模様
今は体にアジーンの力を慣らすのと、暴走しそうになる右腕を抑え
込むので精一杯な状態だった

「くそっ…さっさとアースラに帰らねえと…」

相変わらず食事は粗末な物ばかり

たまに捕らえられる小動物が貴重なタンパク源だった

「ぐっ…がっ…ぐああああ!？」

今までは痛みが走るだけだった右腕が突然疼き出し、真紅の魔力を
纏う

真っ黒の肌に浮き上がっている赤色の模様が光り出し、右腕が人以
外の何かに変異を始める

「何…なんだよ…」

右腕に集まっていた魔力の影響でこうなったのだろうか…何なのか
全くわからない

「アジーンの魔力をコントロール出来るようになるまでは人前に出れねえな…」

アジーンの魔力が暴走したのかわからないが、右腕が魔力に反応して変化するのには確実

ひとまず魔力を落ち着かせると右腕は元に戻っていく

急激に暴走を始めた魔力を抑えつけて普段の魔力に戻り、洞窟の外に出ると

「…マジかよ」

グガアアアア！

巨大な化け物が地面から飛び出して来ていた

体は長く蛇のよう

所々体が装甲のようになっており、触手を操って獲物を捕らえるようだ

幾つもの触手をうねらせている

「めんどくせえ…」

飛来する触手を避けながら呟くりユウ

「つーかシグナムん時もこんな感じで避けてたな…数は少なかったからこれよりかは楽だったが

これがフェイトとかなのは辺りなら飛行魔法で軽々と避けるんだろ
うなあ…

考えてたら悲しくなってきた…あれ、目から汗が…ハハ…」

うなだれながら化け物の攻撃をかわしていくリュウ

次第に化け物の攻撃が激しくなっていくが、物ともせず避けていく

「このままじゃジリ貧か…」

かと言って魔力球はねえし…D-ダイブは解除後にぶっ倒れそうだしな…少しずつ魔力を集めて

圧縮した魔力をぶち込んでやればちったあ大人になるだろ」

左の掌に魔力を集め始めたリュウ

化け物も触手で薙ぎ払ったり、叩きつけたりとパターンを変えてはきているが

リュウは全てを避け続けている

やがてリュウの左手に膨大な魔力を含んだ漆黒の球体が浮かんでいた

「こいつで…くたばりやがれ！」

次々と伸びてくる触手をかいくぐって化け物に接近

その体に膨大な魔力を撃ち込んで内部から攻撃する

突然自分が保有する魔力よりも大きい魔力を無理やり体に撃ち込まれた事により

苦しみながらのたうち回る化け物

やがて気絶したのか静かになった

「はあ…はあ…疲れてんのにいきなり襲ってくんじゃねーよ…」

息切れをしながら悪態を吐くリュウの後ろに降り立つ人影が

「オメーは…確かシグナムにやられた筈じゃ…」

夜天の書の守護騎士

鉄槌の騎士ヴィータが少し戸惑いながらボロボロの姿で立っていた

どうやらヴィータも他の怪物と戦っていたようだ

「確か…ヴィータだったな…」

「……………」

互いにボロボロの姿で相対していたが、やがてヴィータが動き出す

「テメーが…テメーがはやてを狙うなら…ぶっ潰す!!」

「ちったあ人の話を聞けよな…」

お前ら守護騎士はよ!!」

ヴィータがアイゼンを振りかぶってリュウに突っ込み

リュウは右腕に魔力を集中、その右腕でヴィータを迎え撃つ
右腕に魔力が通された事により、右腕に眠るアジーンの魔力が呼び
起こされ

再びアジーンに近付いたリュウの右腕は易々とアイゼングラフを
受け止める

「んなっ…テメー…その右腕は…!?!」

「はっ!んなこと気にしてる場合かよ!」

リュウの右腕の変貌ぶりを見て驚いたヴィータが力を緩め、
その隙を突いて魔力を纏わせた左腕でアイゼンを殴りつけ、ヴィー
タを仰け反らせる

「おらよお!」

「んなつ！？」

無防備に晒したヴィータの腹部を右腕で殴るリュウ

「ラァッ！」

「かつ…はっ…！」

腹を殴られた衝撃で渴いた声を出しながら吹っ飛ぶヴィータ

守護騎士と言えどもその体は小さく、ついさっきまでの化け物との戦闘で傷ついており

簡単に吹き飛んでしまう

「まだ…まだあ！」

「ち…くしょおっ！」

壁に叩き付けられたヴィータに追い討ちをかけるために

右腕を振りかぶりながらヴィータに向けて跳躍するリュウ

対するヴィータも流石は守護騎士

すぐさまアイゼンを構えてプロテクションを張る

例え見た目は子供だとしても幾つもの死線を潜り抜けてきた歴戦の騎士だ

さっきは簡単に吹き飛ばされてしまったが本調子で尚且つ

油断しなければ先程の攻撃にも対応出来ただろう

「チィッ…！（さつさとケリをつけねえと…！

こちらとらしばらく碌なもん食ってねえんだよ！）」

「…」の野郎…

舐めんじゃねえええ！」

プロテクション越しに睨み合う両者

リュウは既に満身創痍

ヴィータもかなり負傷している

リュウはプロテクションを破る為に左腕に魔力を纏わせて振りかぶるが

ヴィータが気合いで弾き飛ばす

「うおおお！アイゼン！」

『cartridge, reload』

「くそっ！」

弾かれて体制を崩したリュウに突っ込むヴィータ

ヴィータの呼び掛けに応えて薬莢を排出するアイゼン

そして薬莢に反応して防御姿勢をとるリュウだが

「オラァ！」

「がはあっ……！」

悲しいことに、通常時では紙のようなプロテクションしか張れないリュウ

あっさりとプロテクションを砕かれアイゼンでの一撃がストレートに入り

空中に打ち上げられるリュウ

「まだまだあ！」

吹き飛ばされたリュウに追撃をかけるヴィータ
アイゼンをハンマー投げの要領で振り回し、自分ごと回転する事で
遠心力を上昇させ
破壊力を高めてリュウの体へとアイゼンを叩き込む

「かつ…はっ…」

滞空していたリュウの体を捉えたアイゼンは正確にリュウの腹部に
叩き込まれ、
更にリュウにアイゼンが食い込んだまま回転を続け壁にリュウごと
叩きつけられる
ヴィータがアイゼンを戻してリュウから離れると、其処には力無く
腕を垂らしたリュウの姿が

「テメーのカスみてーな魔力を蒐集したって意味ねーや
せいぜい其処でくたばってな」

息切れをしながらリュウを一瞥してその場を去ろうとした時

「うわあああ!?!」

「ヴィー…タ…!」

地中から化け物が現れてヴィータを捕らえてしまう。両腕が触手の
ように伸縮し、獲物を捕らえるようだ
捕らえられて空中で身動きが出来なくなったヴィータに力無く腕を
伸ばすリュウ

さっきの化け物とは少し違い胴体に幾つも背びれのようなものがあ
り、

触手は両腕しか無いが先がアームのようになっている

「テメツ！この野郎！
放しやがれ！」

体を縛り付けられ、両腕が使えない状態のヴィータ
アイゼンも使えずに体を揺するぐらいしか抵抗の手段が無いという
状況

縛り上げられたヴィータに向けられる化け物のアーム

「チク…シヨウ…！
こんな…こんなところで！！」

ヴィータが歯を食いしばりながら目を瞑る

…が、何時まで経っても痛みは来ない
ただ、今までは縛られている感覚だったが今は何かに抱き抱えられ
ているような感覚

その何かから魔力が供給されており少しずつだが回復していく

「何が…？」

ヴィータがゆっくりと目を開くと…其処には化け物の血で右手の爪
を真っ赤に染めている何かが左腕で自分を抱きかかえていた
髪は真っ白だったのだろう

だが返り血で少し赤く染まっている

両腕両足がまるで御伽話に出てくるような龍の物

背中からは赤い魔力がバーニアのように噴出し、飛行魔法無しで飛
んでいる

そして感じられるとてつもない魔力
蒐集したら相当なページが溜まるだろう

だが、こんな状態では決して勝てないと本能で感じたヴィータ
化け物も自分との格の違いを感じたのだろうかヴィータを離し、す
ばやく地中へと逃げていく
化け物が地中に潜った影響で辺り一面に砂煙が立ち込める

「ケホッ！ケホッ！」

ヴィータが咳き込みながら例の何かを見ようと目を凝らす

「居ねえ…」

既にその場にはヴィータしか居なかった

ついでにリュウも居なくなっていたがヴィータの頭には化け物を撃
退した何者かの事しか残っていなかったようで、闇の書を抱え直し
てその場を去っていった

*

「はあ…はあ…グッ！」

アジーンの奴…大人しくしとけよな…！」

息を切らせながら右胸を抑えるリュウ

リュウの意識が薄れた為にアジーンの力が暴走してしまったようだ
自分の意志とは関係無くD・ダイブしてしまい、龍としての本能が
目の前の敵を倒そうとした様子

「まあ…ヴィータの奴を助けられたし、よしとすつか」

魔力が落ち着いたようで、息を整えてから歩き始めるリュウ

「この世界のどっかに次元転移が出来る装置がありやいいんだが…

もしくは救難信号だな」

とりあえずこの世界から脱出するために進むリユウ

「……ヴィータは転移出来るんだよな…何とか連れてって貰えねえかなあ…
無理だろうけど…」

こうして化け物が蔓延る世界を歩き回る事になったのだった

「さっさと帰らせてえ…」

鉄槌の騎士との激突（後書き）

あんまり更新期間を空けたら駄目だろうし、一旦更新

はつきり言ってもうしばらく地球にいるメンバーは関わりません
だって主人公が地球に帰れないんだもん

原作での戦いを期待していた人はごめんなさい…

ではまた次回でお会いしましょうー

帰還（前書き）

ようやく更新

もしも待っていていた人がいたら感無量

これからもスローペースですが精一杯頑張らせて頂きます

帰還

（更に数日後）

（時間的にはシグナム達となのは達の戦闘が終了して数日後辺りだ
と思っ下さい）

「……ヴィータから聞いていたが…
本当に生きているとはな…」

「んな簡単にくたばるかよ」

砂丘で相対するのはリュウとシグナム
だが2人共戦う意志は無いようで、お互いのデバイスを出さずにいる

「ふむ…何故、貴様は主はやてに近付く？」

「友達だからだ」

「その言葉に嘘偽りは？」

「無い」

真っ直ぐに向き合って話し合う2人
シグナムからの問いにシグナムの目を見据えて答えるリュウ

「まあいい、後は…」

「コイツで語るってか？」

「此方の方が相手の本音がわかるからな
心からぶつかり合えば語らずとも分かり合える」

「ったくよ…バトルジャンキーが…」

シグナムがレヴァンティンを構え、リュウがルファルを起動させる
シグナムはレヴァンティンを両手で持ち、剣の切っ先をリュウに向け
リュウは軽く前傾姿勢になりながらボクシングのような構えをとる

「行くぞ…」

「ああ…」

睨み会う2人

辺りに2人の闘気が渦巻く
片や主を護るため 片や友との約束を守るため
ぶつかり合う

「ハアッ！」 「オラァ！」

シグナムの剣とリュウの爪

2人の得物が激突する

レヴァンティンは刀身に焰を纏い

ルファルからは劫火が立ち上る

リュウとシグナム

2人が衝突する時、辺りに熱風が吹き荒れる

「猛れ！地獄の劫火！」 「カートリッジ…リロード！」

幾度か切り結び、長期戦は不利なリュウが勝負に持ち込み

シグナムがそれに受けて立つ

リュウがなけなしの魔力を全てかき集めルファルに溜めると、リュウの体中に炎が走る

シグナムがレヴァンティンを構え、カートリッジの薬莖を排出するとレヴァンティンの刀身が焰に包まれる

「ハアアア！」 「ウオオオオ！」

2人が衝突すると熱風が辺りに吹き荒れる

渦巻く魔力の中心ではリュウとシグナムがぶつかり合っており、高まり過ぎた魔力が暴走し2人の体を傷つけていく

「シグナアアム！」

「リュウウウウ！」

リュウとシグナムが叫ぶ

2人の咆哮と同時に込められている魔力が更に高まり巨大な物へと成っていく

辺り一帯に熱風が広がり、近くにいた生物は一斉に逃げ出していく拮抗する2人、暴走する魔力、吹き荒れる熱風

やがて高まり過ぎた魔力は逃げ場を無くし…暴発する

周囲に大量の魔力と炎を撒き散らし、爆発によって吹き飛ばす2人リュウもシグナムも全身に傷を負い、満身創痍

だが…2人とも立ち上がる

「ぐ…ああ…」 「くっ…うう…」

ボロボロになりながらも、膝が震え腕に力が入らず、自分の武器を落としそうになっても2人は立ち上がる

傷だらけの体で、震える手で武器を構えお互を見据える

「ハハッ……」 「フフッ……」

そして口元を緩めて笑い出す

「流石だな！リュウ！

これ程心が踊るのは久し振りだ！」

「そりゃどーも

体中が痛えけどな……俺も気分がいいぜ」

「フッ……あの時はシャルに水を差されたが……
今此処で決着を付けようか！」

「ああ！やってやるよ！」

既に頭の中は戦いの事だけ
自分の目の前に立っている強者を倒す
ただそれだけを思い、立つ

「ハアアア！」

相手を倒す為に立ち上がる
最後の力を振り絞り、満身創痕の体に鞭打って
残った力を全て引き出す
攻撃を防ぐ事など考えない
自らの攻撃で相手の攻撃をねじ伏せる
全ての魔力を次の一撃に寄せ、相手の攻撃を上回る攻撃を叩き込む
ただそれだけを思い全魔力を武器に溜める

「これで…終わりだ！」

焰と劫火

2つの炎がぶつかり、周りの岩を溶かす程に熱量が上昇する
再び炎の竜巻が巻き起こり、中心部では2つの魔力がぶつかり合う

「ハアアア！」 「ウオオオオ！」

シグナムはバリアジャケットが殆ど削れ

リュウは既に上半身裸

魔力により右腕が変化しルファルが外れ露出しているがものともせず
右腕を更にシグナムに近付ける

暴風する魔力によりレヴァンティンに亀裂が入る

そしてストレージデバイスのルファルは更に大きい亀裂が入り…砕けてしまう

遂に両腕を露出しながらも真っ向から突っ込むリュウ

変化した右腕に力を込め、レヴァンティンを殴りつけた瞬間

閃光

そして

衝撃

大量の魔力が爆発

辺り一帯の砂が吹き飛び、岩盤である岩には巨大な亀裂が幾つも走る
砂埃が収まると 其処には2つのボロボロの人影が横たわっていた

傍らには罫だらけのレヴァンティンが刺さり、バリアジャケットは

殆ど削れ落ち体中に生傷が無ければかなり扇情的な姿のシグナム
既にルファルは砕け、罅だらけの待機状態でリュウの左手に着けられ
露出した左腕だけでなく変異した右腕までもが傷だらけのリュウ
しかし、2人の表情は笑っていた

数10分後、横たわる2人に近付く小さな人影

「デケエ魔力反応を感じて来てみれば…
シグナムの奴は何やってんだよ…」

闇の書を携えて現れたのは守護騎士の1人、ヴィータ
蒐集を行う為に魔力反応のする世界を巡っていたら2人の魔力を感じ
てやってきたようだ

「まったく…世話の掛かる…」

そう言いながらレヴァンティンを待機状態に戻し、シグナムの腕を
自分の肩に掛けるようにして支え、転移しようとしたが少し離れた
所に倒れているリュウを見て

「……………だあつ！もう！
別に助けるワケじゃねーからな！
死なれたら胸糞悪いだけだからな！」

誰が聞いている訳でも無いのに顔を赤くして言い訳をするヴィータ
一旦シグナムを置き、リュウに肩を貸すようにして引きずってきた
らシグナムも支え

「重い…やっぱ置いてこうかな…」

ヨロヨロと転移魔法を展開するヴィータだった

「…あの時はわかんなかったけど…リュウとアイツの魔力が同じ…？
自分じゃない、他の魔力が流れ込んでくる感覚…
妙な感じだけど…嫌じゃないな…」

*

「……………で、何でこの2人はこんなにボロボロなのかしら？」

「わかんねーよ…」

魔力反応があったから行ってみたらコイツ等が倒れてたから…
戦ったんだろうけど…」

「見事に相打ち…だろうな」

場所は変わって八神家

ボロボロの2人が運ばれてきたので急遽ベッドを2つ用意し、治療
魔法で手当てして寝かせている

傍らには守護騎士の3人が

椅子に座るヴィータとシャルマルに狼状態のザフィーラ

「…んで、コイツはどうすんだよ…？」

シャルマルとシグナムの話では、はやてを狙ってるって言うてたじゃ
ねえか」

「確かに…主に害ある存在ならば回復されても面倒だな…」

ヴィータとザフィーラの言葉にシャルが反応し

「じゃあ…いつその場で…」

トドメを刺そうと…

「待て！落ち着け！シャル！
目が本気だぞ！？」

「そうだぞ

真剣勝負ならまだしも、相手が気絶している間になど…それでも騎士か…」

ヴィータが慌てて止めに入り
ザフィーラが呆れる

「ええ…そうね

（だけど…私のバインドを破ってシグナムの弓の起動を逸らせる程の實力

もし真っ向から戦ったら無事では済まないわね…）」

「それにしても…真剣勝負でシグナムと相討つとは…
中々やるな」

「う…うん…此处は…」

ザフィーラがリュウを覗き込んでいると
リュウの隣でシグナムが目を覚ました

「目が覚めたか、シグナム」

「ザフィーラか…」

「そうだ！私はリュウと戦っていて…」

「オメーの隣で寝てるよ」

ゆっくりと起き上がったシグナムが自分の状況を把握し、リュウの事を思い出してヴィータに突っ込まれる

シグナムが隣に目をやると回復魔法では治しきれなかった部分を包帯で巻いてあり、眠っているリュウの姿が見えた

因みにルファルは罫だらけの待機状態でリュウの指にはめてある寝ているリュウを見て、少しふらつきながらもベッドから立ち上がり

「ダメよ、まだ寝てないと…」

回復魔法で治療したとはいえ体力と魔力の消耗が激しいんだから」

「いや…平気だ」

歩くぐらいなら出来る」

リュウに近付き、頬を撫でながら微笑む

「ふふ…」

「どうした？シグナム」

「いや…な…」

戦っていてこんなにも心が踊る相手は久しぶりだ…」

そんなシグナムの様子を見てヴィータもリュウに興味を持ち始める

「へえ…そんなに強いのか？」

「ああ、リユウは強い

デバイスがストレージじゃなかったら…負けていたかもしれんな最後の衝撃で碎けてしまっていた」

「シグナムにそこまで言わせるとはな手合わせ願いたいものだ」

「幾ら守護獣と謂えども全てを受けきるのは骨が折れるぞ」

リユウの側でシグナムとザフィーラが笑みを浮かべ、ヴィータがリユウをじつと見ている

「（コイツ…あの時のアイツと同じ魔力の感じだった…けど姿がちげえ…何か関係があるのか…？）」

帰還（後書き）

んゝ…シグナムさんにフラグ立て…の回になったかな？
いちおうヴィータにも

まだまだこれからですが

ハーレムにしようか迷ってるし

ニコポとかナデポだけは使いたくないので

どうせ惚れるなら物語創りたいので

頑張ります

見舞いに行こうと思ったんだよ何でこんな事になってんだろ（前書き）

更新サボリ気味だったんでせめて第二期終わるまでは頑張ります

感想ありがたいっす

作者のエネルギーに変換されます

見舞いに行こうと思ったんだよ何でこんな事になってんだろ

つい最近まで管理外世界でサバイバルやってたけど、何とか帰還を果たしたんだ
んで、現在どういった状況かと謂うと

「とりあえず大人しくしていれば危害は加えん」

ルファルを預けて八神家でお世話になってます

俺の隣に居るのはザフィーラ

闇の書の守護騎士であり、守護獣らしい
因みに狼状態

俺の隣で寝そべり、俺は壁にもたれ掛かって座っている
そしてはやては入院中

「何か悪いな

衣食住の世話してもらって」

「気にするな

どうやら闇の書を狙ってはいないようだし、主の事も気にかけてくれているしな」

唯一話を聞いてくれそうなザフィーラに相談してみたところ、他の守護騎士に説明してくれると言うのでルファルを差し出したんだ
その結果が、敵じゃないって事は信じてやるから監視下で大人しくしてろって事らしい

一応管理局に協力している立場なので、解放は出来ないってザフィーラが謝ってくれた

狼なのに一番騎士とはどういう事か

「言つたる？友達だつて

はやての見舞いに行きたいけどよ、あの3人の誰かと2人つきりつてのはキツイし

お前さんは動物扱いだから入れねえし

つかザフィーラ以外と一緒につてのが無理だしな」

「すまん

今度3人で見舞いに行くらしいからな

入れ替わりでこっそり行くといい

なに、見付かった時の為に病院の前まで一緒に行こう」

「ありがとう

助かるよ」

マジでザフィーラだけが頼りだ

シャマルは相変わらず警戒してるし

ウィータは不機嫌そうだしさ

シグナムは…何か怖い

偶にこつち見て笑ってる

まあ敵意は向けてきてないだけマシかな
怖いけど

ザフィーラさんかけえです

話を通じるのがザフィーラだけなんだ。マジで

多分今まで呼び出されてきて戦ってきたんだろうけど、敵との交渉とか全部ザフィーラに違いない

シグナムとウィータは話聞かなさそうだし

シャマルは騙し討ち上等な感じじゃん（最初のイメージだけで話してます）

「それにしても…」

「どうした？リュウ」

因みに互いに名前で呼んでます

だって名字とかお互いに無いし

シグナムとも名前で呼び合ってるには呼び合ってるんだが、如何せん会話が続かない

ヴィータ？呼びかけても「あ？」とか「何だよ？」とか、ぶっきらぼうつつかどっかのチンピラかヤンキーみたいな反応しかない

シヤマルは呼びかければ返事はしてくれるけど、向こうからは来ねえんなわけで、一番話してんのがザフィーラ

「何か世話になってるばかりってのは悪いなあ…

かと言って金なんかねえし」

「ふむ…闇の書の魔力蒐集に貢献してくれれば助かるんだが…如何せん魔力が…」

「だよなあ……………あ」

「ん？どうかしたのか？」

アレ渡せばいいんじゃない？魔力球

シグナムが使ってたカートリッジとか言うのに似てたしさ

口に含んで使うかデバイスに仕込んで使うかの違いだけだ（大分違います）

「あのさ…コレ使ってみてくんねえ？」

「何だ？コレは…
一言で言つと黒だな」

俺が取り出したのは真つ黒のビー玉程度の大きさの球体
それを受け取ったザフィーラが訝しげに覗き込む

「俺の魔力の塊
魔力の回復が早いだけが取り柄でさ
魔力を放出して固めて、回復したらもう一回
つてのを暴走手前ぐらいまで繰り返して固定したのがそれなんだよ」

「ふむ、だがな…他人の魔力はそう簡単には取り込めんのだが」
魔力の塊と聞いて俺が何を言いたいか悟つたらしい
カートリッジの様に使うのは無理だと返してくるが、魔力球を受け
取らずに言葉を返す

「俺の体質その2
他人に魔力供給可能」

「……………本当にか？」

少し黙つた後疑わしそくに聞いてくるが

「ほれ」

「どうやら…本当のようだ
連日魔力を集める為に戦つていてな
大分疲れていたんだが…少しずつ楽になっていく…」

俺が手を当ててやると目を細めて感想を言ってくる
そして完全に目を閉じたかと思うと…寝てしまったようだ

「俺も…眠くなってきた

魔力の回復が早いって言ってもな…疲れは溜まるんだよ
体力の回復も早いんだが…流石に今回は疲れ過ぎた…

寝よ…」

そして俺は寝そべっているザフィーラにもたれかかり、眠り込んでしまった

*

「どうして…こうなった…」

シグナムが隣に居ました

ザフィーラは相変わらず俺のクッションに

シグナムは何故か俺の隣で壁にもたれながら眠っている

俺が投げ出していた腕に触れているので、魔力供給をしているうちに眠ってしまったのだろう

守護騎士も大変なんだな…

せめてシグナムに話して、はやての事は任せて貰えばいいんだが…
ま、今は寝よう

この状態でシグナムが起きたら気まず過ぎる

こうして、俺は再び眠ろうとして目を閉じた

臆気な意識の中、俺は感じた

何か小さな、俺より一回りくらい小さいものがもたれかかってきたのを

だが、俺は気にせず眠りについた

「（こいつ…やっぱりあの時と同じだ…
リュウ…お前は一体何なんだ…）」

*

「さて…アイツ等が出てつてもうすぐ1時間か」

只今ザフィーラと留守番中

シグナム、ヴィータ、シャマルがはやての見舞いに行くと言って出て行き

ザフィーラと時間を見計らっている

そろそろいいかと思ひ支度をしてザフィーラと共に家を出る

ザフィーラも家に居なければザフィーラの監視下で外出して思うだろうし、今までも何回かそうしてきたからな

そんなこんなでザフィーラとのんびり話しながら歩いていると何時の間にか病院に

結構早く着いちゃったみたいだ

道中に会ってもいいようにザフィーラと一緒に来たんだが、まだアイツ等とは会ってない

つまり、まだはやての病室に居るって事だ

鉢合わせしたら気まずいどころか問い詰められるだろうから、此処でしばらく待ってシグナム達が出て来たら行こうかな

そんな感じでザフィーラとのんびりしていたら

「あれは…なのは？」

「どうした？知り合いでも居たか？」

遠目でなのはらしき人物を確認

側にはアリサやずからしき人影も

誰か友達でも入院してんのか？

まさかはやての見舞いな訳ないし

っーか知り合いじゃなかった筈だし

「…いや、気のせいだ」

「そうか」

別に気にする必要も無いだろう

きつと偶然だ

「そう言えば、お前は管理局に協力の態勢を取っているんだっとな」

「ああ、一応な

どっちかつーと管理局の個人に対してだが」

「ふむ…ならば知らないかもしれんが…

ヴィータによると高町なのは

シグナムによるとフェイト・テストロッサ

その両者が管理局の嘱託魔導士として戦闘に参加してきているらしい
何か情報は無いか？

既に戦闘スタイルは判っているのだが」

偶然じゃない気がしてきた

何やってんの？アイツ等

とりあえず適当にサラッと教えとくか
あんまり詳しく教えて、その事がなのは達に知れたら後が大変だからな

「聞いた事はあるな

高町なのはは遠距離砲撃

フェイト・テストロツサは高速近接

つてのは判ってたんだよな？」

「ああ、実際にヴィータとシグナムが戦ったからな
2人共かなり苦戦したらしい」

「高町の砲撃魔法は受けようとするな

シールドの上からぶち破られるのが落ちだ

テストロツサは…翻弄してくるタイプだからな

恐らく1人がおびき寄せて、もう1人がタイミングを合わせてバインドで縛るか、広域殲滅魔法

もしくは不意を突くぐらいしか考え付かねえな」

前者は事実

フェイトが実体験してるからな

後者は俺の考えだ

フェイトの高速移動は捉えるのが難しいからな

「そうか…やはり厄介だな

あの執務官も突出した所は無いんだが、平均的にバランスがいい
正に指揮官といったタイプだな

戦闘もそれなりに経験しているようだな、隙が無い」

「（クロノの事だよな？

アイツ等がこの件にかかわってんのか…
後が面倒臭そうだ)

遠距離も近接も対応し、オマケに指揮官が
最初に倒しておきたい相手だな」

こんな会話を続けていると…

「ん…？」

なのは達が出てきたか…」

「どうした？」

それしても…シグナム達はまだ出て来んな…お前はどつする？」

「俺ははやての所に行くよ

もしかしたら気付かない内に帰ったかもしんねえしな」

「わかった

では、後でな

見舞いが終わり次第念話で伝えてくれ」

そう言うのと転移していくザフィーラだった

さて俺もはやての所に行きますかね

*

俺がはやての病室に向かう途中

「シグナム達との連絡が繋がらん
戦闘の可能性が高い

リュウ、お前はどつする？」

「んゝ…デバイスも使えない状況だし、はやての見舞いに行くわ俺の事は誤魔化しといってくれ」

『わかった、また後で会おう』

……多分、なのは達なんだよなあ

魔力球…ザフィーラにだけでも渡しときゃよかったなザフィーラと念話をしているうちにはやての病室前に

「はい、どうぞ」

俺が病室のドアをノックするとはやての声が返ってくる

「うつす、元気か？」

病室に入り、片手を挙げて挨拶すると口を空けて呆けているはやてアホっぽいぞ

「…………兄ちゃん？」

「おう」

返事をしながら近寄る

「やっと来てくれたんかあ
おっそいわ！」

「はは、わりいわりい

ちよつと事情があつてな
前よりは早かつただろ？」

笑顔になつたと思つたら拗ねたような顔になる
笑いながら頭を撫でてやるとまた笑顔になつて

「まあ、そうやね
今回は不問にしたる」

「偉そうだな、おい」

2人でくだらない事で笑い合う
ま、元気そうで何よりだ

「さっきまですずかちゃん達とシグナム達がおつたのになあ
タイミング悪すぎやで兄ちゃん」

「すずか？」

知り合いだつたのか？お前ら」

「え？兄ちゃんこそ」

まさか、なのはじゃなくてすずかの友達だつたとはな
どうやら出会いには俺と同じく図書館で

はやてが取るうとしていた本を取ってくれて、知り合つたそうだ
互いにお薦めの本を教えあつたりしてかなり楽しかつたとか
友達出来てよかつたなあ…

さて、屋上で…何かやってんな

「ちと早いかもしれんが

もうそろそろ帰らないとな」

「えゝまだいいやんかゝ」

「また明日も来てやるからさ
しばらくは来れるから」

「むう……約束……やで？」

「おう」

頭に手を置いてグリグリ弄ると不満げにしながらも納得するはやて
まあ……ザフィーラに頼んで何とか来れるようにしてもらったか

「じゃな」

「絶対やで！」

はやての念押しに苦笑いしながら病室を出て扉を閉めると、俺の体
は光に包まれた

………はい？

すまん、状況が掴めない

何故俺はバインドで縛られている

そして俺の両隣で浮いているのは……なのはとフェイト……？

いや、見た目は2人そっくりだが……何かが違う

纏っている空気が、目つきが、そして魔力の感覚が

似せてはいるが違う

別物だ

「何だ？ テメエ等
何の真似だ」

「あれ？ リユウ君
私の事忘れたの？」

「リユウ、非道いよ」

口調も真似ているんだろうが、ちげーよ
何よりも本質がな

「はっ、騙せると思ってんのか？
ちげーんだよ」

「……………まあ、構わない」

「そうだな、計画の邪魔にはならないだろう」

「リユウ！」

俺が2人と話していると、同じ様にバインドで縛られたザフィーラ
とヴィータが

「テメエ等…何しやがったあ！」

「壊れた機械は…不要なんだよ…」

「もうすぐだ…もうすぐで計画が…
古き因縁の終焉が…」

なのはの姿をした何者かが呟き

俺から少し離れた所に魔法陣が展開される其処に現れたのは…はやて

「あれ…此処は…？」

兄…ちゃん？何でこんな所に…

ザフィーラにヴィータも…

あれ…なのはちゃん？フェイトちゃん？」

「はやてえ！逃げ…がつ！？」

突然景色が変わって驚いたのだろう

困惑しているはやてに逃げると叫ぼうとした瞬間腹を蹴られた

「兄ちゃん！？」

止めてや！なのはちゃん！」

「コイツと…守護騎士を贄に…

闇の書は起動する…」

「闇の書…蒐集…」

偽なのはが俺の首を掴んで吊り上げ、偽フェイトが闇の書を開き、俺から魔力を蒐集する

「ほう…やはり龍の遺伝子か…
魔力が溢れるように吸い出される」

俺の胸からリンカーコアが浮き出し、偽フェイトがリンカーコアを掴み、魔力が蒐集されていく
すぐに魔力が枯渇するかと思いきや、次々とページが埋まっていく

闇の書

そして残り数ページになったところで俺からの蒐集が止まる

「はぁ…はぁ…テメエ等…何を…」

「そして最後は…守護騎士自身でページを埋める!」

「ザフィーラ! ヴィータ!

止めて! 止めてえええ!」

俺からの蒐集を止めた偽フェイトはザフィーラとヴィータに手を向け、2人を蒐集してしまった
はやてが足元から消えていく2人を見て悲痛な叫び声をあげる

「そして…不要なモノは…」

「壊しちゃおう」

なのはとフェイト

2人のフリをした何者かが腕を振り上げ
魔力で俺の体を貫いた

「ぐっ!」

「兄ちゃん!」

そして魔力を操り

「ねえ、はやてちゃん」

「運命って…残酷なんだよ」

俺を病院の屋上から投げ捨てた

「いやああああ！！」

目の前が霞み、周りが全然見えない状況で

俺が最後に見たのは…叫ぶはやてが俺に手を伸ばし、足元に黒い魔法陣が展開される姿だった

「ふ…ざけんじゃ…ねえぞ…
くそっ…た…れ…が…」

そのまま俺は重力に逆らえず

屋上に向かって腕を伸ばしたまま

地面に叩き付けられ、意識を失くした

見舞いに行こうと思ったんだよ何でこんな事になってんだろ（後書き）

何か詰め込み過ぎたかな

2話ぐらいに分割してもよかったかも

はい、闇の書覚醒です

んでもって主人公退場です

ドラゴンクォーターやったことある人にヒント

初めてのボツシュ戦

イベントでどうなったわけ？

…ぶっちゃけネタバレですね

マジでごめんなさい

これわかってくれる人いたら作者感激

では、次回お会いしましょー

闇の書の覚醒龍の力の暴走（前書き）

そろそろA・S編も終わりですな

しばらくは閑話や番外編で息抜きしようかなあ
…

闇の書の覚醒龍の力の暴走

あゝ…だりい…

体が動かねーんだけど、何でだっけっか？

んゝ…ああ、そうか

体を魔力で貫かれたんだっただか

ま、それは別にどうでもいいか

闇の書が暴走を始めたみたいだからな

とりあえず…はやてを助けに行きますかね

待ってるよ、はやて

*

本物のなのはとフェイトが偽者にかけられたバインドを解くと同時に闇の書が起動

はやての体を媒体に闇の書の管制人格が現れる

足元に黒い魔法陣を展開しているのは背中に黒翼が生えた銀髪の女性それが闇の書の管制人格

「また…全てが終わってしまう…」

一体何度この悲しみを繰り返せばいい…」

「はやてちゃん！」

「はやて…！？」

なのはとフェイトが呼びかけるが

管制人格は涙を流しながら闇の書を展開し、魔法を発動する

「我は…闇の書

我が力の全ては…」

『Diabolic Emission』

開かれたページに記された魔法が発動

管制人格が掲げた手に黒い球体が出現し、徐々に巨大化する

「主の願い…そのままに…」

デアボリック、エミッシヨン…」

巨大化した球体が一気に圧縮され、そしてまた解き放たれようとする

「っ!?!」

「空間攻撃!」

「闇に…染まれ…」

管制人格を中心に、円形に巨大な魔力が放たれる

咄嗟になのはがバリアジャケットの薄いフェイトを庇い、シールドを展開

何とか空間攻撃を凌ぎ、一旦ビルの影に隠れる2人

「なのは!」

「フェイト!」

なのはとフェイトが体勢を整えている間にユーノとアルフが合流
クロノ達の対応と、援護が来るまで4人で何とかしなければならな
い状況に

そしてまた、管制人格が闇の書に手を翳す

「主よ…貴女の願い…今叶えます
愛おしき守護者達を傷付けた者達を…今、破壊します」

管制人格が涙を拭き再び魔法を発動する

管制人格を中心に封鎖結界が展開

一定の空間に中からも外からも出入りするのが困難な状況に

「何!？」

「前と同じ、閉じ込める結界だ!」

「やっぱり、私達を狙ってるんだ…」

なのは達を閉じ込めた管制人格は再び魔法を発動する

「スレイプニール、羽ばたいて…」

背中が一回り大きくなり、翼で飛行出来るようになった

*

一方、クロノは

既に正体を割り出していた仮面の男達を捕らえ、アースラの一室で話していた

仮面の男の正体は、グラム提督の使い魔でありクロノの嘗ての師匠のような存在、アリアとロッテ

クロノに魔法と戦闘技術を教えていた

グラム提督は前の闇の書事件を担当した管理局員

前回の闇の書事件以降、極秘に闇の書の転生先

つまり新たな主を探していた

主ごと闇の書を永久凍結し、封印するために

悲劇を繰り返さない為に闇の書を封印しようとするアリアとロッテ

しかし、封印出来る時は暴走の瞬間

まだ管制人格が目覚めているだけでは封印は出来ず、暴走の瞬間では闇の書の主は永久結される程の罪を犯してはいなく、違法になる更に、例えば今も永久凍結で封印出来たとしても力を求めた誰かが封印を解き悪用する可能性がある」とクロノは言い放つ

そしてクロノが現場に戻ろうとするとグラムがクロノを呼び止める

「アリア、デュランドルを彼に」

「そんな…」

「私達にもうチャンスは無いよ…」

持っていたって、役に立たん

ならば彼に託そうじゃないか」

そんなグラムの言葉に、アリアがカードの形状で待機状態になっているデバイスをクロノに差し出す

「どう使うかは君に任せる

氷結の杖、デュランドルだ」

差し出されたカードを受け取り、部屋を後にするクロノ
渡されたデュランダルを見ながらメンテナンスルームへと向かう

「リュウのデバイスと同じ名前：
何か関係があるのか？」

とりあえず現場にドラグーンとリュウのデバイスを持って行くか
早くリュウを助けなくちゃな」

メンテナンスルームの中央に、メンテナンス済みのドラグーンが鎮
座している

『クロノ執務官

リュウはまだ帰らないので？』

「今戦闘場所に居るみたいなんだ
リュウに渡すために君を持って行くよ」

クロノはリュウのデバイスを纏めながらドラグーンに状況を説明する

『そうですか、よろしくお願いします

どうやらリュウの身に何か起こったようです』

「わかるのか？」

『詳しくはわかりませんが

リュウの体にはアジーンの遺伝子が組み込まれていますね？

そのアジーンの力が覚醒しかかっているのです

私は本来アジーンの力を制御するために造られたデバイス

アジーンの力が動き出せばある程度離れていてもわかります』

「そうなのか…」

アジーンが出て来たって事は…リュウが危ない…？」

『その可能性も十分に』

「不味いな…急ごう！」

慌ててドラグーンを持ち、転送ポートに向かうクロノ
転送ポートに向かい、クロノが走っているとエイミィから通信が

『クロノ君！

現場に新しい魔力反応が出たよ！

なのはちゃん達とも、闇の書とも違う魔力が！』

「リュウか…？」

了解した！すぐに向かう！

くそっ…間に合え！」

*

「ハハッ…なっさけねえなあ…」

病院の側

地面に倒れ込んでいるのはリュウ

胸と腹から血を流し、虚ろな目で虚空を見つめる

震えながらも何かを掴もうとするように腕を伸ばし

「何にも…出来ねえのか…？
このままくたばる…？」

空を掴むように拳を握る
壁に手をつき、震えながらゆっくりと立ち上がり
吠える

「んなの…御免…だ…！」

自分の両足で立ち、腕を振る
何かを振り払うように
そして足元には赤く輝く魔法陣

「ぐ…おお…！」

右腕は少しずつ黒く染まっていき紅い魔力の線が浮き上がる
髪は色素が抜けていくように白に染まっていく
背中には魔力を吹き出すバーニアのような物が
両足は御伽噺に出て来る龍のような形状に
立ち込める魔力は密度が濃く、体が淡く、紅く発光しているかのよう

「出て…くんじゃ…ねえよ…！
お前は…黙ってる！」

意識していないのに体が勝手に変化していく
リュウの意識が弱まる一方アジーンの力は体を支配していく
そして完全に…リュウの意識は追いやられる

「ち…く…しょう…
クソッ…たれ…が…」

リュウの意識が無くなると体は倒れ込む
だがすぐに閉じられた瞼は開く
…が、その目に光は宿ってはいなかった
ただ、獲物を…敵を…

魔力が高く、強い
自分と対等に闘えるモノを探して

「グ…ガ…アアアアア！！」

既にリュウの意識は無い
あるのはアジーンの力の支配
暴走する龍の力

ゆっくりと顔を上げ、遙か先を見つめる
その双眸に映るのは…管制人格
脚に力を込め、跳ぶ

一瞬でリュウの姿は消え、後に残るのは魔力の残滓と、リュウの脚
の形に削れた地面
そして辺り一面に入る無数の亀裂

封鎖結界内

夜の空に走る一本の紅い線
膨大な魔力を保有し、辺りに紅い魔力の残滓を撒き散らしながら一
直線に跳んでいく

その先には、闇の書の管制人格
なのはから魔力を蒐集した時に魔法も闇の書に吸収したらしく、ス
ターライトブレイカーを放つ為に桃色の魔力が集められていく
やがて充分に魔力が高められ、なのは達に向けて放たれようとした
瞬間リュウが襲撃する

「ガアアアア!!」

「お前は…!?!」

横からの強襲を咄嗟に防いだためスターライトブレイカーの向きが狂い、なのは達よりも横に逸れて放たれる
なのは達が居る場所よりもかなり後方に着弾し、辺り一帯を消し飛ばす

「流石…なのはのスターライトブレイカー…」

「うう…あんなにひどくないの…」

『そんな事よりも、何でスターライトブレイカーの射線が逸れたんだろう…』

「ユーノ君…そんな事って…」

大部分をスターライトブレイカーの余波で削られ、殆ど残骸に等しくなっているビルだったものを見て体を強ばらせるフェイト
その隣で落ち込むなのは

別方向に避難したユーノとアルフは管制人格の方を見て射線がズレた事を疑問に思っていた
そのまま2人が見ていると再び魔力光が

「誰かが戦っている？」

「そう…みたいだね

黒い光はさっきの奴だろうし…

あの紅い光は…」

「一体…？」

「ガアアアア！」

「くっ…」

攻撃するリュウに防ぐ管制人格

管制人格の攻撃を物ともせず、突き抜けて攻撃を放つ

爪が生えて完全に变化した腕を管制人格に叩き付けようとするが、
当たる寸前にシールドで防ぐ

負けじと管制人格も先程なのは達放った空間攻撃や、小刀程度の
大きさにした魔力を敵の傍で複数爆発させる魔法を使うが効果は無い

「こう…なったら！」

意味は無いと判ってはいるが、めくらましに再度魔力を爆発させ、
一瞬リュウが動きが止まった瞬間に距離を取り次の攻撃に備える

「グオオオオオ！」

「お前も…眠れ…！」

リュウの攻撃を真っ向から受け止め、闇の書に取り込もうとする
抵抗はしているようだが少しずつリュウの体から魔力が抜け、D
-ダイブが解けていってしまう

「ぐ…あ…お前は…？」

「…意識が戻ったのか？
まあいい、そのまま眠れ」

D-ダイブが解けた事によりアジーンの力が弱まり、リュウの意識が戻り始めた
リュウと闇の書の管制人格が対峙していると、合流して戻ってくる
なのは達

機動型で動きの速いフェイトが先に到着し、管制人格の方を見ると
対峙するリュウと管制人格
リュウは何かに耐えているように歯を食いしばっている

「リュウ！？」

「フェイト…？
クロノ達来るまで…逃げ…ろ…」

急いでリュウに近寄り手を伸ばすが、触れる前にリュウの体は闇の
書に取り込まれてしまい、消えてしまう
リュウの手を握ろうとしたフェイトの手は虚空を掴み、魔力の残滓
をすり抜ける

「リ、リュウ…？」

目の前でリュウが闇の書に取り込まれる所を見てしまい、無我夢中
にリュウを助けだそうとして管制人格に斬りかかる

「うわあああ！

リユウを返せえええ！」

バルディツシュから放出される魔力刃で管制人格を斬ろうとするが、繰り出す攻撃を全てシールドで防がれてしまう
攻防を繰り返しているうちになのは達も追いつき、戦闘に参加しようとするが

「ああああああ！」

「……………」

「お、落ち着いて！フェイトちゃん！」

「一旦止まって！」

「落ち着くんだよ！フェイト！」

暴走気味のフェイトを巻き込んでしまいそうになり、迂闊に攻撃が出来ない状況

フェイトが攻撃を防がれ、体勢を整えようと管制人格から離れた瞬間にアルフが羽交い締めにして動きを止め、なのはとユーノでシールドの準備をして攻撃に備える

「アルフ！放して！」

「リユウが！リユウがあああ！！！」

「落ち着くんだ！フェイト！
リユウがどうしたんだよ？」

「リユウが…闇の書に…！」

アルフに体を抑えられて暴れまわるフェイト

尚も絶叫しながら管制人格に向かって行こうとする

アルフに抑えられながら宥められて興奮気味ながらも説明する

リュウが管制人格と戦っていたようで、闇の書に取り込まれてしまったと

「…闇の書に取り込まれた？

そんな能力まであるのか…

とにかく、闇雲に突っ込んでもフェイトまで取り込まれてしまう

此処はリュウを助けるためにクロノ達を待とう」

「そうだよ、フェイトちゃん

リュウ君を助けたいのは私達もだけど、私達まで捕まっちゃったらどうしようもないよ」

「……うん…リュウ…」

闇の書が魔導士を取り込むと聞いたユーノが警戒し、フェイトを落ち着かせる

とりあえず落ち着いたフェイトはバルディッシュを構え直しながら管制人格を見据える

「とりあえず、散らばろう

このままじゃ的だよ」

「そうだね

なのは、フェイト、僕とアルフでサポートするから管制人格の相手は頼める」

「うん！任せて！」

「分かった…！」

アルフとユーノは後ろに下がリサポートに徹し、なのはとフェイトで管制人格の動きを抑えてクロノ達の応援が来るまで持久戦に持ち込むつもりらしい

「クロノ君達が来るまで…行くよ！フェイトちゃん！」

「うん…！なのは！
リュウを助けなきゃ…！」

「フェイトちゃん…？
話…聞いてた…？」

闇の書の覚醒龍の力の暴走（後書き）

多分次回から一人称に戻ります

三人称難しい…

とりあえずフェイトの代わりにリュウに闇の書の中に入れてもらいました

あと2、3話ぐらいでA・S編も完結だ〜い
頑張りますか！

夜天の書

……あ？何処だ？此処…

真っ白な世界？

体中が痛えし…何があつたんだっけか？

はやての見舞いに行つたのは覚えてんだよ…

んで、いきなり転移魔法で飛ばされて、刺されて…

はやての足元に黒い魔法陣が展開されたのは覚えてんだよな

そっからどうやってこんな場所に來たんだ？

っ！か刺されたんなら血が出る筈なのに傷一つついてねえし

ん…と…？確か……ああ、アジーンの奴か！

確か暴走した俺はあっさりと闇の書の管制人格にやられて取り込まれたんだっけか

情けねえ…

まあそれはいいとして、此処は…闇の書の中って事か？

あ、夜天の書か？

いや…まだ改悪されたままじゃ闇の書なのか…？わけ分かんなくなつてきた…

とりあえずこっから出ねえとな

「にしても…見事に何もねえな」

辺りを見回してもずっと真っ白な世界

長いこと居たら気が狂うんじゃないかねえか？

とりあえず歩いてみる事に

……走ってみる事に…

……全力疾走してみる…

……なんつにもねえ！！

何なんだよ此処

まず自分が移動しているのかさえもわからねーよ
いいや、飽きた　寝よ

*

「ふむ、ユーノからの情報と差異は無いな…
やはり闇の書は夜天の書だと言うことか」

『ええ、夜天の書を改悪したロストログアが闇の書です』

僕は現場に向かう前にユーノからの報告と、ドラグーンからの闇の…いや、夜天の書についての情報を照らし合わせているところだ
闇の書は本来、夜天の書と呼ばれる魔導書であり、様々な世界を主と旅して魔法を集める記録用ロストログアだったらしい
過去形なのは何代か前の主によって機能を幾つか弄られ、その結果改悪となってしまったからだ

今の夜天の書は闇の書と呼ばれ、魔力を蒐集してページが全て埋まったら最後

その世界を壊滅させるまで暴走し続ける最悪のロストログアになってしまった

「どうにかしてプログラムのバグだけを切り離す事は出来ないだろうか…」

アルカンシエルをこの世界で使わずに解決出来る方法

それはどうにかして暴走を止めるか、闇の書をこの世界から他の無人世界へ強制転移させ、アルカンシエルで消し去る

時間が無いから簡単に考えたが、この2つぐらいだろう

だが、闇の書の暴走体を強制転移させるなんてほぼ不可能に近い
なのはにフェイト、僕の3人だけじゃ暴走体の動きを止めるなんて
不可能だし、恐らくリュウも手負いだろう

アリアとロツテに魔力刃で貫かれたとは聞いたが、そのくらいで死
ぬようなタマじゃない

例えリュウが加勢してきたとしても恐らく無理だ

せめてもの救いは…こう言っては何だが…守護騎士までもが取り込
まれた事かな…

管制人格だけに集中出来る

流石に酷いかも知れないが、今はそんな事言ってられないからな
暴走体を止めるにしてもどうやって？

そんな僕の呟きを聞いたドラグーンが思いがけない一言を放った

『バグを切り離す事は可能かも知れません』

「…本当か？」

『ええ、闇の書は主を取り込み、媒体にする事で管制人格が表に出
て来ます』

そして主は闇の書の中で眠っていますが、多大な魔力で衝撃を与え
てやれば中で眠っている主を起こす事が出来るかもしれませぬ』

「そして闇の書の主が目覚めれば…」

そうすれば魔導書の主導権は主に移る！

だが、主導権を取り戻したとしてもバグは残ったままだが…？

『はやてさんが書の主導権と機能を取り戻す事が出来ます』

そうすれば再生機能を持った暴走体が切り離されるので、守護騎士
とはやてさんに事情を説明して攻撃に加勢して貰えれば動きを止め

る事が出来るかもしれません』

「だが、動きを止めてどうする？
強制転移を暴走体に使える程にサポートに熟知しているのはユーノ
ぐらいだぞ」

確かにそれならバグは切り離せる
だけど切り離れたバグはそのまま破壊活動続けるぞ？何処かに転
移させるとしても場所が無い…
そんな考えをドラグーンに伝えると

『守護騎士にもサポートに熟知した者は居ます
その方に協力して貰えれば転移は可能でしょう
転移場所はアースラの軌道上に転移させてアルカンシェルで消し去
れば問題ありません
多少無茶な作戦ですが、どうしますか？』

……アースラの軌道上転移…
いけるかもしれないな…
よし、早速ユーノ達に作戦を伝えよう

「何もしないよりはましだろう
すぐにユーノ達に作戦を伝える
ドラグーン、君はどうする」

ユーノ達に連絡するため通信を開きながら手元のドラグーンに尋ね
ると、コアを光らせながら

『先程、リュウのデバイスと同じ名前のデバイスを受け取ったと言
いましたね？』

確かデュランダルと』

「ああ、グレアム提督から受け取ったんだ」

ついさつきグレアム提督から受け取ったデュランダルについて尋ねてきた

僕も気になっていたので、とりあえず出してみる

『ふむ、形状は杖ですね

もしかしたら元から貴方用に逃れてあつたのかもしれませんが

……デュランダルのデータを此方に送っていただけますか？』

「データをかい？

構わないが、どうかしたのか？」

僕用ね…

本当にそうだったら嬉しいな…

『少し気になる事がありました』

「よし、わかったよ

送っておく」

『感謝します』

とりあえずドラグーンにデュランダルのデータを送る事に

そう言えばリュウのデュランダルは両手持ちの大きさの剣だったな
リュウは片手で振り回していたが…

兎に角、今は現場に向かうでしょう

『私も現場に持って行って頂けますか？
リュウに会ったら渡して欲しいのです』

「了解した

ユーノ、作戦を立てたんだ
今どんな状況だ？」

僕がSU2で通信を開き、ユーノに連絡をとるとかなり焦った表情
であまり聞きたくない事を言ってくれた

『クロノ！大変だ！

フェイトが闇の書に取り込まれた！』

「何だって！？」

主戦力のフェイトが闇の書に取り込まれてしまったらしい
無限書庫にも流石に取り込まれたらどうなるかって情報は無かった
みたいだし、フェイトは大丈夫だろうか…

『あとフェイトがさっき言ってたんだけど、リュウもさっき取り込
まれたらしいんだ！』

「最悪だ…

D・ダイブをしたリュウは一番の戦力なのに…
不味いな…想定外の事が多すぎる…」

まさか2人とも取り込まれてしまうとは…
どちらか1人でも残っていれば作戦は実行出来たんだが…

『いえ、恐らく大丈夫です

闇の書に衝撃を与えて主を目覚めさせてやれば2人も出て来れるでしょう』

「……よしユーノ、作戦を始めるぞ
なのは達に伝えてくれ」

『…成功する確率は？』

そくだな…なのは1人で転移までやれって言うならはつきり言って
可能性は皆無だが…
魔力による多大な衝撃を与えるなら…なのはに適任だ
恐らく…

「五分五分…いや、6割は行くかな」

*

此処は…？

確か取り込まれたリユウを助けるために管制人格と戦って…

そうだ、私も取り込まれてしまったんだ…

でも、私も取り込まれたという事は…リユウも此処に居る？

とりあえずリユウを探そうと思ってバルディッシュを探したけれど、
辺りには無かった…

取り込まれる時に落としてしまったのかな…

ひとまずバルディッシュも探すために歩きだそうとしたその時
何か…紅く、ドロリとしたものが視界の端に映った

そしてその中央には…見覚えのある人が倒れていた

「え…あ…？」

リュ…ウ？」

信じられない　信じたくない
何で……？

「リュウ…リュウ…？」

側によって抱き起こし、呼び掛けるが……返事はない
顔から血の気が無くなっており、脈もなく
既に体は冷たくてかなり重い

「い…やあ…」

何…で？どうして…？
うわああああ！」

リュ…ウ……返事を…して…

「死んじゃ…嫌だよお…」

私がリュウにすがりついて泣いていた時、その声は聞こえた

「勝手に人の事殺してんじゃねーよ
な」に泣いてんだあ？フエイト」

私の頭に手を置いて、撫でながら喋りかけてくる
一緒に居ると安心出来る人

「リ、リュウ…？」

「あいよ」

気付けば死体と血溜まりは消えていた
そして目の前にはリュウが不思議そうな顔をして立っている
よかった…リュウ…

夜天の書（後書き）

はいども、*です

闇の書にはえげつなくなっでもらいました

幸せな夢を見せるんじゃないくて、悪夢を見せて心を壊しにかかります
ガンガン壊しにかかります

リュウの死体だけでしたが、最初はなのは達のも考えておりました
描写が思い浮かばなくて断念しましたが

とりあえずリュウが居たからよかったものの、取り込まれたのがフ
エイトだけだったら出てこれなかったかも

誤字脱字がありましたらご報告下さるとありがたいです

ではこのへんで失礼します

ありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6959o/>

Project.D

2011年9月28日23時55分発行